

工學博士櫻井省三校閱  
文學士鈴木周作抄譯

ペルリ  
提督 日本遠征記

東京 大同館發兌

291.099

CP 467

S' II

序

顧れば弘化嘉永の交、外船頻に北邊南陲に出没し、開國の氣運は漸く熟せしと雖も、眞に和親通商を眼目とし、平和と親厚とを以て我に臨みし北米合衆國の如きもの他に其の國ありしか。或は恐る、當時若し敵意ある他國の來つて、初めて我鎖國の鍵に手を觸れなば、急轉打撃、兵火迸り、遂に及ぶ可らざるの條件を以て國を開くの已むを得ざるに至りしを。然るに事茲に至らずして、浦賀の砲聲は日本開國の第一祝砲となり、神奈川條約亦其の先驅となり、是より瀛西の文物陸續として入り來り、遂に今日の國運隆々の素因をなししもの、此の點に於て吾

人日本國民が合衆國に負ふ所亦尠ならずと謂ふべし。往年我海軍省より合衆國へ軍艦笠置并に千歳注文の事あるや、余監督官として彼地に在り、此處にして史材を索めなば、米艦來航の事情、兩國委員折衝の狀況并に所謂黒船艦隊の果して、如何なる艦船なりしやを審にし得べしと、公務の餘暇之が蒐集に勉め、華盛頓の米國海軍省に至り、語るに前事を以てせしに、果せるかな、同省には日本に渡來せし軍艦の圖面及寫眞を保存しありて、之を余に贈られ、且同艦隊の引率者にして、同時に特命全權使節たりしヘルリ提督の報告書なる日本遠征記三卷を得たり。就いて之を見るに、記叙精細、觀察周到、具に

外交の委曲を述べ、或は風俗を叙し、或は人情を品し、間々畫圖を挿んで實相を示し、彼等の眼底に珍奇と映ぜし凡百の現象は、一種の感想と共に宛ら筆端に上り、吾人の知らんと欲して能はざりしもの、知るを求めずして知らざる可らざりしもの累々として現れ來つて、興快横溢、卷を措く能はざるものありき。

數年前、余該書收むる所の畫圖を幻燈に寫し、開國の始末を談ぜし事屢々ありしが、偶々鈴木氏の來つて之を抄譯せんと余に該書を求む。即ち快諾譯成るに及んで之を閱するに、新に編を別ちて項目を擧げ、頗る讀過に使せり、且取捨精粗其の宜しきを得、原書の眞意を傳へて大

瑕無きに邇し、努めたりと謂ふべし。

四

明治四十五年五月

海軍造船大監工學博士 櫻井省三

## 凡例

一、本書は千八百五十六年合衆國國會コンGRESSの命によつて發行せられし代將官コマンダントエム・シー・ペルリの合衆國日本遠征記 (United States Japan expedition by Com. M.C. Perry) の第一卷を抄譯せしものなり。

一、原書はフォリオ版五百餘頁、挿むに數多の圖書を以てし、當時に於ける日米條約締結の事情始末より、日本の國情、施設、風俗、習慣、風土、文物等、百般の事物に亘りて詳述盡さざるはなく、其の好奇の眼を瞠り、透徹の批判を加へ、隨處何等かの感想を附する處、大に傾聽すべく、又噴飯すべく、微笑すべき

ものあり。洵に、日本開國の由來と其の當時の社會とを知らんと欲するものには缺くべからざる貴重の史料たると共に、興味豊かなる一種の旅行記の性質を備へたり。抄譯は史實と興味とを旨とし、之に關する記事は殆ど之を譯載し、航海、氣候、產物等に關するものは之を省略せり。又一般の讀者に應ぜんとの希望を以て、文字を平易にし、口語體を採れり。

一、原書に記載せられたる日本の地名、人名、其の他の固有名詞は、多くは發音を異にし、殆ど判別に困しむものあり。其の内の幾分は之を本邦の史籍に勘考して、正當の名稱に改め、又譯註を加へなどせしも、業未だ終らざるに、抄譯者俄に東

都を去らざるべからざるに至り、偏阪の地殆ど史籍の參考すべきものなく、下田の卷以下に於ては、僅に不完全なる羅馬綴の發音を辿りて、臆測の名稱を之に當て、其の下に？の標を置く。其の正鵠を失へるや固よりなり。他日機を得て勘考訂正せんと欲すれども、偏に讀者諸君の指教を仰ぐ。一、原書中日本固有の名稱を誤れるもの尠からず。例へば、將軍を指して總て皇帝エムペロルと呼べるが如し。此の類の誤謬往々あれども、皇帝を將軍と正しし外、多くは其の儘に存せり。一、原書は海軍造船大監櫻井工學博士の所藏にして、博士が此の貴重なる珍書を貸與せられ、且公私の事務多忙なるにも係らず、此の拙劣見るに堪へざる本書を鄭重に校閲せられ、

一々缺點を指摘して訂正せられし其の厚意は、誠に抄譯者の感謝に堪へざる所なり。

一、抄譯者が本書を抄譯するに至りしは、全く親友岸田繁次郎君の勧誘に依るものにて、君が始終抄譯者に助言と奨励とを與へられ、而して本書の出版せらるるに至りし亦君の斡旋に依る。厚意謝するに餘あり。

一本書が出版せらるるに臨みて、茲に改めて復櫻井先生と岸田君とに深く感謝の意を表す。

明治四十五年六月

愛知縣津島にて

鈴木周作しるす



# 提督ベルリ 日本遠征記

## 目次

### 第一編 日本遠征艦隊の卷

- 一、遠征艦隊派遣の目的……………一
- 二、使命はベルリ提督に下る……………五
- 三、遠征艦隊の編成……………八
- 四、ミシシッピー號の航路……………一四

### 第二編 琉球の卷上

- 一、日本の土地の踏み初……………二〇
- 二、解が雨を冒して來た……………二〇

- 三、牛豚鶏卵野菜の贈物……………二四
- 四、攝政と提督との會見……………二六
- 五、品物を放出した儘の辻店……………二九
- 六、琉球人の二つ魂膽……………三二
- 七、人情に差異はない……………三四
- 八、提督は轎に乗つて……………三八
- 九、行列が首里の門に達く……………四一
- 十、空茶一杯の待遇……………四四
- 十一、攝政邸の大饗宴……………四六
- 十二、提督の満足……………五〇
- 十三、けしからぬ支那人……………五三
- 十四、新攝政が就職して居た……………五七
- 十五、サスタハナ艦の饗宴……………六〇

### 第三編 浦賀の卷上

- 一、相模の岬に達いた……………六四
- 二、七月八日午後五時……………六七
- 三、黄黒い體を丸出し……………七〇
- 四、決して長崎へは行かぬ……………七二
- 五、全く戦時の光景……………七六
- 六、七月九日……………七九
- 七、測量隊……………八三
- 八、十日と十一日……………八五
- 九、江戸の挨拶……………八五
- 十、奉行と交渉委員との協議……………九二
- 十一、好機嫌な香山榮左工門……………九七

十二、七月十三日……………一〇〇

十三、久留濱上陸……………一〇三

十四、國書の受渡し……………一〇八

十五、大統領の親翰(使節派遣の趣旨)……………一一三

十六、提督の書翰(渡來の趣旨)……………一一九

十七、榮左工門と三郎助……………一二三

十八、パンやハムの片を袂に……………一二七

十九、七月十日……………一三三

二十、贈物の交換……………一三六

廿一、江戸灣を退去……………一四〇

### 第四編 琉球の卷下

一、琉球再度の訪問……………一四四

二、事の決定迄宮殿を占領せん……………一四七

三、提督の要求は悉く容れられた……………一五二

四、バザール……………一五五

五、佛魯の行動に疑を懐く……………一五七

六、斷狀と共に金を戻して來た……………一六〇

### 第五編 浦賀の卷下

一、將軍の訃音……………一六五

二、マセドニアン號の坐礁……………一六八

三、眞直に江戸に赴かんのみ……………一六九

四、浦賀は艦隊の碇泊に危険である……………一七二

五、不得要領で濟まざるとす……………一七六

六、夫人も同伴して貰ひたい……………一七九



七、林大學頭……………一八一

八、舊識の榮左衛門……………一八六

九、軍艦に乗組んで居た日本人……………一九〇

十、アダムスと榮左衛門との問答……………一九三

第六編 横濱の巻……………一九六

一、應接委員の來着……………一九六

二、二十一發の皇禮砲……………一九八

三、應接委員の品定め……………二〇〇

四、將棊倒しに平身低頭……………二〇四

五、亞米利加人の墓地……………二〇八

六、黒川嘉兵衛とアダムス艦長……………二一二

七、獻上品の陳列……………二一五

八、半紙と矢立とを内懷から取出した……………二一九

九、劔を抜いて威赫した……………二二二

十、函館開港に決す……………二二五

十一、日本の贈答品……………二三一

十二、角力見物……………二三六

十三、榮之助が提督の意向を採りに來た……………二四一

十四、日本委員の酔潰れ……………二四四

十五、條約の調印……………二四九

十六、名主の女房と妹……………二五六

十七、日本人觀……………二六〇

十八、日本の防禦工事……………二六三

第七編 下田の巻……………二六八

- 一、三月十八日下田入港……………二六八
- 二、提督大いに怒る……………二七二
- 三、吉田松蔭米艦に投ず……………二七七
- 四、提督松蔭の爲調停を圖る……………二八二
- 五、賣買の事が決した……………二八七
- 六、ビストルを向けた……………二九〇

### 第八編 函館の巻

- 一、五月十七日函館に投錨……………二九五
- 二、噴火山の爆發……………二九九
- 三、松前勘解由……………三〇四
- 四、提督下田に歸る……………三〇八
- 五、倉藏日本に留まるを肯ぜず……………三一二

- 六、提督歸國の途に就く……………三一七

### 挿 畫

- 第壹圖……………水師提督ペルリ及旗艦ミシッピノ號航海の圖
- 第貳圖……………琉球王の攝政及ペルリ提督一行首里宮殿へ參上の圖
- 第參圖……………浦賀港の外観及國書受渡しの圖
- 第四圖……………饗應角力及獻上品陳列の圖
- 第五圖……………旗艦ポーハタン號及艦上にて饗宴の圖
- 第六圖……………下田港の外観及同港引揚に就き告別訪問の圖
- 石版畫……………北米合衆國艦隊遠征航路圖



提督

# 日本遠征記

文學士 鈴木周作抄譯

## 第一編 日本遠征艦隊の卷

### 一 遠征艦隊派遣の目的

總ての點に於て、日本帝國が心ある世界の人士から特別の興味を以て注目されしは、久しい以前よりの事、殊に此の著名な國が不思議にも最近二世紀間鎖國政策を執り外國との交通を絶ちて自から進んで國を鎖さうとするに至りて、歐米人の興味は一段と高まり、好奇心は殆ど其の絶頂に達し随つて各方面の熱心家は我こそは此の絶東の寶庫を開いて、今日迄此の自求的孤立國に就いて知られて居る僅

かな智識に更に新たなるものを加へようと躍起り出した。政治家は國家の組織制度法律等を地理學者は風土氣候山川原野の狀態等を又博物學者は動植物等を航海者は岩石暗礁風位潮流港灣等を商人は産物工業其の他貿易賣買の情況需用品の模様等總て商業上の事項を調査せんとし宗教家は異端邪教の國民に基督教の福音を傳へて彼等を基督教國の仲間に入れようとする。其の外人類學者にあれ、文學者にあれ、其の人々に依つて目標こそ異なれ此の廣大にして有望なる未知の國土をば開發せんとの大目的、大希望に於ては悉く一致して居たのである。是より先、日本開發の企は既に幾度か試みられ、葡萄牙、西班牙、和蘭、英吉利、佛蘭西、魯西亞等の諸國は競うて日本と商業上の關係を開かんと努めた。就中、葡西二國は巧に成功して、兩々相並んで其の位置を保つて居たが、やがて葡萄牙人は放逐せられ、次いで英吉利人も亦自から日本を見棄てて去つたので、基督教國民としては、唯和蘭人のみが支那人と共に長崎の出島で通商貿易を許されて居た。然し和蘭人は此の特權の爲には、貿易上の利益位では到底償ふ事の出来ない國民的屈辱にも

甘んじ、人身の監束をも忍び、出島より外には一步も踏出す事が出来なかつた。極めて最近迄、日本に關した智識は、勿論其處には制限はあるが、全く和蘭人の賜物で、ケンフェル、サンベルグ、チッシン、ドーフ、フィシヤリ、メーラン、シーボルトなど云ふ出島の和蘭商館に緣故のある人達が、僅か一年一度の江戸參上の途上で、監視の眼を窺んで書いた記録に過ぎず、随つて極めて不十分なものであつた。右のやうな有様で、世界の文明國は日本に就いては全く何事も判つて居なかつたとは言ふ事が出来ないが、知れて居る點より知れて居らぬ點が遙に多いのは事實で、謂はゞ日本が今日迄かうして何處の國からも手を着けられずに居たのは、世界の新進國たる我々亞米利加人が来て、奇怪なる日本國民が自ら求めて閉籠らんとする鎖國の牆壁を破壊して和親通商の條約を結び、日本を世界の商業國民の間に紹介する先達となる爲に保存されて居たので、合衆國は又其の適任者として耻つかしくないのである。我々の亞米利加大陸がコロンブスに發見されたのは(一四九二年)偶然の事で、コロンブス

の元來の素志は、千二百九十五年に亞細亞の長い滞在から伊太利に歸國したマルコポーロに依りて初めてデバング(Nipangu)の名で歐州人に紹介された日本に至るにあつたので、彼が初めて今の南米キューバ島に上陸した時は、一圖に待焦れた日本に着いたと許思つたのである。這麼譯て、運命とても謂はうか、コロンブスは自身日本を見出して基督教國に紹介する事が出来なかつた。されば彼の行手を遮り、彼によりて発見された新大陸に崛起した新興の米國民たる者は、自ら進んで日本と歐米諸國との自由交通を開く鍵となり、日本を歐羅巴文明の勢力内に引入れ、以て新大陸の父たるコロンブスの宿望を果す義務があるのである。

加之千八百四十六年に米國は墨西哥と干戈を交へて、其の結果カリフォルニア州が米國に屬する事と成つた。其の以前、米國の商船が支那、印度地方に行くには、喜望峰を迂廻して三四箇月の日數を費したが、今カリフォルニア州から太平洋を越えて彼の方面に赴く事にすれば、航海の日數が非常に減縮する譯である。然のみならず、當時丁度蒸汽船が世に現はれて來たので、此に乗つて太平洋を越え、支那、印度地

方へ往く事とせば、航海の日數が以前に比して殆ど四分の一即ち一箇月前後も減じ、亞米利加の商賣の爲には、非常な便利を得る事になる。併しながら蒸汽船の航海には、是非とも途中に於て石炭を積込まねばならぬ。然るに日本は亞米利加と支那、印度との丁度真中にある國であるから、米國の商船が日本に於て石炭を搭載する事を得れば、米國の商賣の爲に非常な利益と成るし、且日本は鎖國主義を執ると云ふものの、和蘭人には通商を許して居るのであるから、他の外國にのみ之を斷ると云ふ理由はない、是非とも日本と和親通商條約を結ぶ必要があると云ふ考が上下の別なく米國人一般の頭に浮んで、忽ち一問題となつたのである。

## 二 使命はペルリ提督に下る

當時墨西哥戰爭で非常に名聲を揚げ、大いに人望を博したペルリ提督は、なか／＼の學者で、一般の人々と等しく、同僚などと共に右の問題に心を傾け、其の成功を疑はなかつたのである。ペルリ提督は、日本國民が自ら進んで國を鎖して外國との

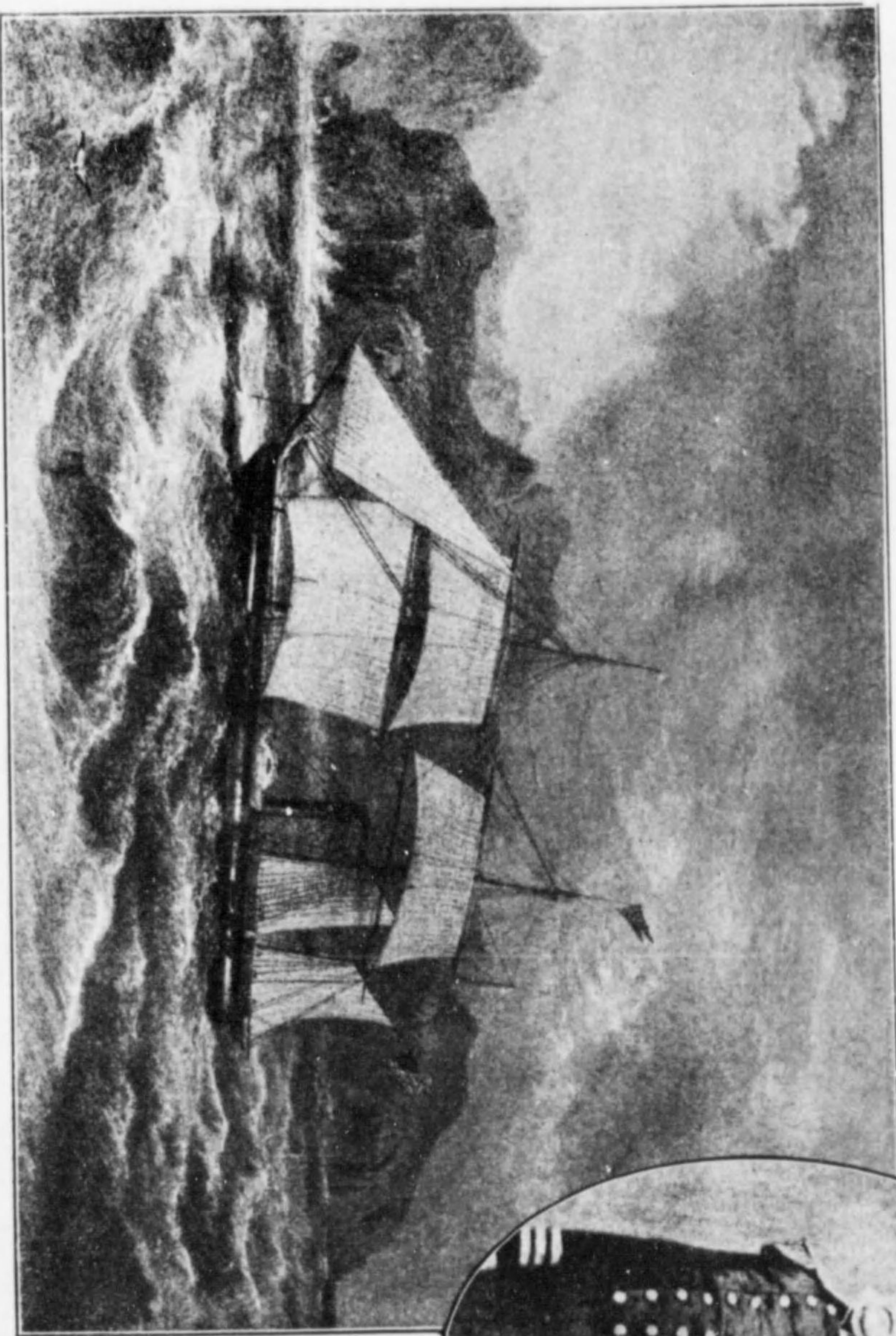
交通を絶つには、其處に何か深い理由があるに違ない、夫には先づ第一に日本の歴史を調べて見るに限ると考へ、日本に關した書物と云ふ書物は悉く涉獵した。其の結果、日本の鎖國主義は決して日本人本來の希望でなく、實は日本人の性格氣質に全く反したものである事を發見した。同時に又提督は、歐州の諸國が此の鎖國の牆壁を打破しようとして幾度か繰返した其の努力の跡を詳しく調べて、成程失敗するの無理がないと思はるる原因を見出したのである。即ち各國民は我先に日本と交通の特權を得ようとして、相互に排陥したり、妨害したり、又使節の中には、自分の希望を無理無體にも通さうとして、勇悍なる日本人を威嚇するなど、随分剛慢不遜な振舞をなした者もあつた。甚しきに至つては、屈辱と名譽との何物なるかを善く知り、正義と親切との上に立つて居る日本人の性格を見損うて、其の面目を潰したり、或は不正の事すら敢へてした者がある。例へば葡萄牙は島原亂に賊徒に加勢し、英吉利の海軍士官は日本の海上で慮外な亂暴を働いた。又魯西亞は日本の領土たる北海の島嶼を占領し、盛に黒龍江口の防備を堅めて益々其の野心を疑は

しめた許でなく、實際日本皇帝が云つた通り、日本を窺つて居た。這麼譯て、日本は益々西洋諸國を蛇蝎の如く嫌忌するやうになり、獨り和蘭人のみには二百餘年間通商を許したと謂ふものの宛然四人同様な取扱をして居たのである。所が亞米利加合衆國は以上の諸國とは其の趣を異にし、未だ嘗て日本人に不快な聯想を惹起させるやうな交渉もなかつた。唯一度修好の目的で、ビドルと云ふ人を司令官として二隻の軍艦を派遣した事があるが、僅か十日内外日本に碇泊して居ただけで、日本人の希望通りに其の儘歸つて了つた。其處でペルリ提督は、種々考察を廻した後、日本と商業上の關係を開くには、亞米利加は右に述べたやうな色々な事情からして、非常に好都合であると信じた。而して提督は、此の問題が世間で囂しくなつて、遠征艦隊派遣の必要が唱道せらるる餘程以前から、自分の所信を海軍の同僚や、政府の高官、民間の有力家などに洩して居た。勿論提督と同意見の人は他にも居たし、又政府部内にもあつたので、政府は當時印度に駐在した米國艦隊の司令官アウリックに命じて日本に赴かしめ、其の結果の報告をばプレブル號のグライン艦

長から徴して見ると、艦長は日本と修好を開くの重要な事を盛に説き立てた。斯うして日本遠征艦隊派遣の氣運は大に熟して來たが、斷然是が決行せらるるに至つたのは、ペルリ提督の熱誠なる主張の結果で、提督はアウリックの召還せらるると共に、合衆國政府に向つて、日本遠征艦隊派遣を正式に建議した。大統領ミラー・ド・フォルモアは提督が着實にして思慮に富む人物なるを知り、此の人を特命全權公使として日本に派遣したならば必ず事を成就するであらうとの考を起し、早速此の建議を容れて彼を特命全權公使に任じ、日本と親通商を開く平和的使命を授け、一艦隊を率ゐて日本に赴かしむる事に決定したのである。

### 三 遠征艦隊の編成

ペルリ提督は此の使命を受けると共に、早速艦隊の編成に取り掛つた。而して墨西哥戰爭中ペルリ提督の最愛の旗艦であつたミシシッピー號を筆頭とし、同じく蒸汽船のプリンストン號及びアレガニー號、夫にヴェルモント號、小軍艦のヴァンダリア號



水師提督ペルリ

及ビマセドニアン號も其の撰に當り、此の外既に東印度に滞在中の蒸汽船サスク  
ハナ號小軍艦のサラトガ及ビプリマスの二艦と武装運送船サプライ號レキシ  
グトン號、サウサンプトン號なども亦遠征艦隊に加はる事に定まつた。大統領フ  
ルモアを初め、國務卿エベレット、海軍卿ケネデー以下内閣の諸卿も此の計劃に對し  
ては非常に贊同を表したので、艦隊の準備は思ふ儘に整頓する事が出来、ペルリ提  
督は艦隊の司令長官と同時に特命全權公使と云ふ、海軍並に外交に關して異常な  
る權力を委ねらるる事になつた。提督が海軍省から受けた遠征の任務は、東印度  
支那海及び日本と云ふ廣大なる範圍に互る航海及び測量にあつたが、其の大目的  
は日本と和親を結び、大平洋を航海する我が蒸汽船の爲に便宜なる地點に永久的  
の石炭貯藏所を設定するにあつたのである。  
遠征艦隊は出来るだけ早く出發すべしとの命令であつたが、各艦の準備に非常に  
手落があつた爲延引に延引を重ね、其の爲世間からは件の計劃は中止になつたの  
てはないかと想像された位で、プリンストン號の如きは準備に取掛つてから悉皆



完成したと云ふ報告のある迄に九箇月も要つて居るのに、試運轉をして見ると、汽  
 罐が不完全で全く役に立たぬ事が判つた有様である。這麼事で準備に一年餘を  
 費し、プリンスストン號の代には蒸汽船のポーハタン號が艦隊に加はる事になつた。  
 提督がプリンスストン號の修繕を待つて居る間に、セントローレンス灣で英米兩國  
 の漁業に關して紛擾が起り俄に軍艦派遣の必要が生じたので、提督は政府の命に  
 依つてミシシッピ號を率ゐて、其處に赴き巧に紛擾を解決して兩國漁民の權利  
 を確定し、満足に自分の任務を果たした。而して紐育に歸る迄には、艦隊の準備が悉  
 皆整つて居て、早速遣東の使命に出立つ事が出来るやうにと心に念じつつ紐育に  
 歸つて來たのである。  
 合衆國が遠征艦隊を日本へ派遣すると云ふ噂がばつと世間に弘まると、軍艦の下  
 廻にても佳いから使つて呉れとて、履歴書を添へて申込む者が世界の各地方から  
 引きも切らなかつた。又合衆國は云ふに及ばず、歐羅巴の文學者、科學者、旅行家な  
 ども切りに一行に加はらん事を求めて來たが、提督は斷然之を拒絶したのである。

斯く提督が軍人以外の人を斷乎と謝絶した理由は種々あるが、兎に角今回委任さ  
 れた任務は普通の場合とは異なり大に慎重な綿密な取扱を要するもので、之を巧  
 に仕遂げるには、提督が始終絶對的の權力を握つて、嚴格なる規律と訓練とを保つ  
 て行くが最も肝要である。所が軍人以外の人々に向つては、窮屈な艦内にあつて  
 嚴重な軍律に一々服従するを望む事が出来ない。此が其の理由の一つである。  
 猶又、軍艦には夫々用務の將校や士卒が一杯乗込んで居るので、斯う云ふ學者達を  
 容れる場所もない、夫によしや乗込んだにしても、偕て珍しい物があつて探究して  
 見たいと思つた處で、自由勝手にならないので、非常に落膽するのは今から見透  
 て居るし、又彼等が上陸した場合に、萬一彼等の不注意や其の他の事から人民と衝  
 突の起るやうな場合がありはせぬかと云ふ杞憂も提督にはあつた。然し以上に  
 擧げたよりも最も重大なる理由は、日本遠征の目的は學問上ではなくて、海軍並に  
 外交上にあると云ふ事實に歸するのである。  
 又一方に於ては、提督は總て部下の者に、艦隊の行動、内部の動靜等に關した事柄は

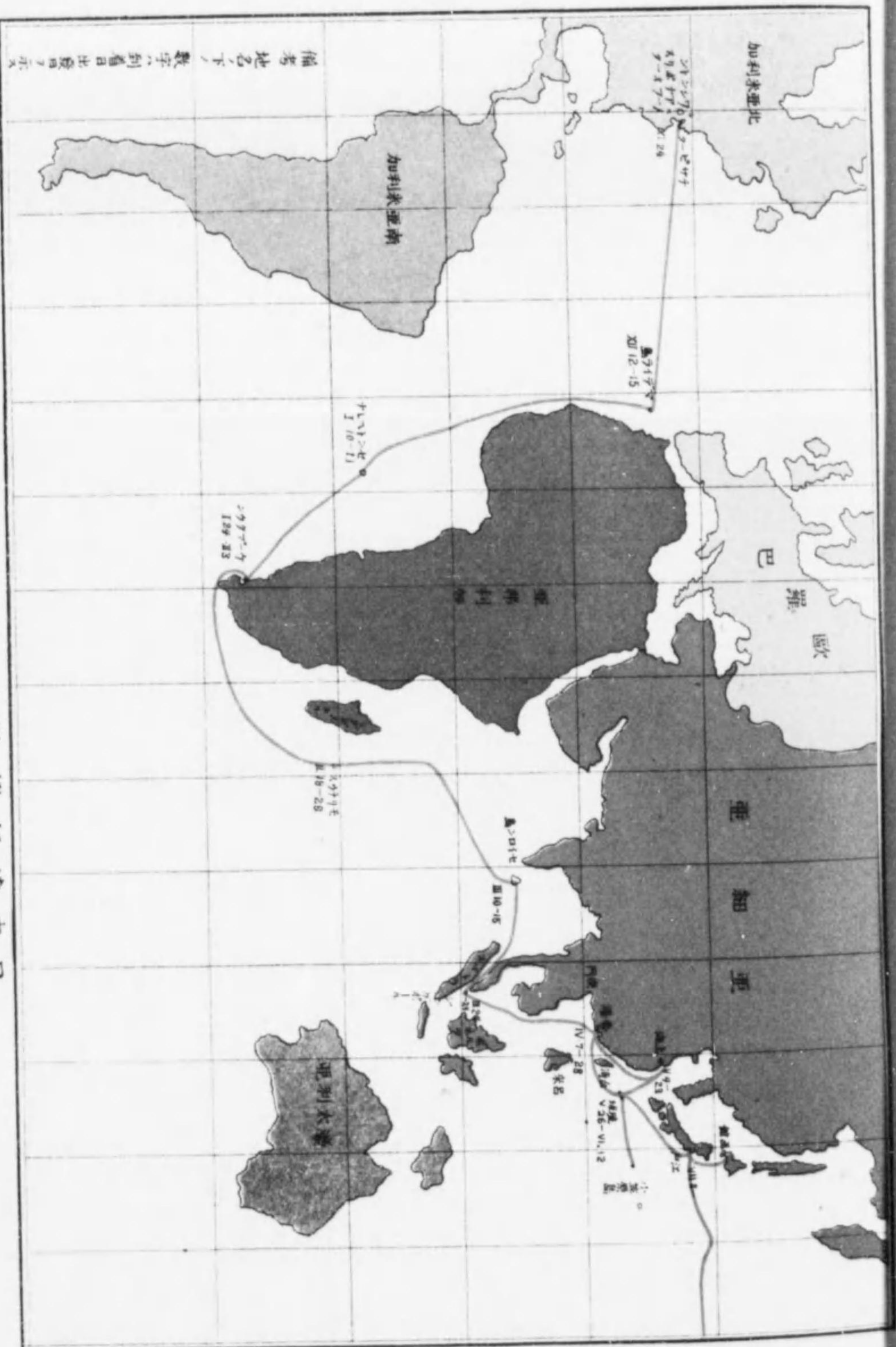
一切新聞雜誌等の刊行物に通知するを嚴禁し、故里知人への通信も以上の記事を避ける事を命じた。其の上遠征艦隊に加はつた人々の日記、記録類は海軍省から公にしても宜しいと云ふ許可のある迄は、政府の物として取扱はるる事となつた。畢竟斯う云ふ嚴重な取締をしたのは、我々の使命を中途で轉覆するやうな消息が他國に洩るるのを防遏する爲で、現に魯西亞の如きは、合衆國が日本に艦隊を派遣するのを探知するや否や、早速軍艦を日本に送つたやうな有様である。所が學者を艦隊に乗込ませた場合に、知人や家族への通信を如何取締つたら良からうか、艦員に對するやうに一々手紙に容喙する譯にもゆかないので、提督は初めからさう云ふ面倒の起るのを避けた次第で、夫に又部下の士官に科學的の觀察や、研究の趣味を起させるには實に好機會で、縱ひ彼等には哲學的の十分な考察は出來ないにせよ、見聞の事實を有りの儘に記録するは雜作もない事であるから、夫だけでも彼等の學問の修業に成る譯である。のみならず我士官の間には學問にかけても評番の者が澤山あるし、現に陸軍の將校中には多くの學者が居る事であるから、海軍

部内にもさう云ふ人の居ない筈はないと提督は考へた。以上のやうな種々の理由で、提督は學者の同行を謝絶したのであつた。セント・ローレンス灣から歸つて見ると、まだ軍艦の準備は出來て居なかつたので、提督はミシシッピ號で紐育を立つてアナポリスに向つた。而して軍艦の準備が出來る迄待つて居た日には、此の上猶五六箇年も延ばさなければならぬから、提督は海軍省の許可を得、殘した軍艦は出來るだけ早く準備を整へて後から來るやうにとの約束で、斷然ミシシッピ號で出發する事に決心した。ミシシッピ號がアナポリスを解纜する時には、大統領海軍卿其の他知名の紳士淑女が軍艦に訪ねて來て、提督並に部下に訣別の意を表した。やがてミシシッピはプリンスストン號と相並んでチサビク灣を下つて行つたが、其の時プリンスストン號の航海に堪へぬ事が發見せられたので、ノルフオークの鎮守府に到着する否や、丁度東印度から歸航したボーハタン號が直ぐ之に代る事になつた。代る事は代つたが、ボーハタンは色々準備の必要もあつたので、直ぐ出帆する事は出來な

一四  
 かつた。と言つて此の上日延べをするのは最早提督の堪ふる所でないし、夫に後から來さへすれば、別に同艦を待つて居る必要もなかつたので、石炭、糧食は、マディラ、喜望峯新嘉堡等で、補供する計劃を以て、千八百五十二年の十一月二十四日、提督はミシシッピー號のみにてノルフォークの鎮守府を解纜して、日本を指して使命の途に上つたのである。

#### 四 ミシシッピー號の航路

ミシシッピー號は(譯註千七百噸、大日本古文書幕)大きな三本橋の付いた外車の蒸汽船で、速力は七八哩位、石炭は一週間分より多く積む事が出来ない故、順風の時には帆を利用して石炭の無くなるのを助ける方針を取つた。ノルフォーク鎮守府を出發してやがてチサピークの岬を離れると、十日間と云ふもの南風が強く吹き續けたので、大洋は宛然煮え返へる前に荒れ立つた。ミシシッピー號は山なす激浪怒濤を物ともせず、十二の汽罐の内八つに石炭を焼き立て、平均七哩位の速力で進



航した。而してノルフオークを立つてから十九日目の十二月十二日の暗々にマ  
デイラ島のファンカール灣に初めて錨を卸したのである。此處に碇泊して居る内  
提督は深く此の度の使命の重大なるを思ひ、夫と共に自分の取るべき態度方針を  
一應本國政府に明かにして置く必要があると考へたので、十一月十四日の日附て  
一通の意見書を認めて海軍卿の許に送つた。其の大意を搔摘まんで見ると。  
此の度の日本遠征の結果に就きては、十分の成算はあるが彼の奇怪なる日本政  
府を促して、直に實際的の協約を結ぶと云ふやうな手早い成功は覺束ない。然  
し結局此の大目的の成就する事だけは堅く信じて疑はない所である。  
先づ第一に、捕鯨船、其の他の船舶の避難所及び糧食薪炭等の需要品補給の港灣  
を一箇所なり、又夫以上得るのは容易い事と思はれる。萬一日本政府が本土に  
於て許可するを肯ぜず、猶兵力に訴へても云ふ頑強な態度に出た場合には、日  
本の南方にて、良港を控へて、飲水糧食を得る便のある島嶼を一二箇所得て、軍艦  
の集合所を作つて置いて、溫和と親切とを以て徐に人民を宥和し、漸次に交際を

開くやうに仕向ける考である。

次に、目下日清兩國にて主權の論争中なる琉球にても、重なる港を開かしむる覺悟である。此唯公徳上正當なる許てなく、世界の公用から見ても至當な事である。琉球は今薩摩藩の下にあつて、人民は苛酷なる壓制に苦しんで居るから、彼等に對して正義と親切とを以てしたならば必ず我々に信服するやうになり、日本政府も亦我合衆國の害意なきを知つて、我を友邦と認むるに至るであらう。斯くの如くして避難港が出来、船舶が數多輻湊する場合には、勢食料品の需用が多くなり、隨つて其の土地の果實蔬菜などの栽培を奨励する必要がある。此の目的で多少種子類を用意して來たが、猶農具類等も後から送附して下さらば甚だ仕合である。

又一方和蘭の陰謀に對する手段としては、各國の國勢殊に我合衆國の富強なる事を明に日本に知らしむ事は最も良策と信じたので、我國の精細なる統計表と説明とを擧げたる物を豫め印刷して用意したから、是で和蘭の騙詐も直ぐ暴露

するであらう。

港が開けて、石炭糧食等に不自由なく、土地の人民の勞働や品物には相當の價を拂ふこと、總て彼等に接するに公平無私の態度を以て、彼等と親密な交際を通じた上てこそ、初めて日本政府をして我眞意を知らしむる事が出来るのである。兎に角カリホルニヤ支那間を往復する船舶は中途に安全なる港を得る事となり、同時に時日の經つに伴つて、日本をして我合衆國の求むる交際の目的は全く平和的のものであると云ふ事を善く了解せしむるを得るは疑ない。海上權に就き、我大敵たる英國が東方に有する占領地と、其の防備ある港灣の着々たる増加とを見る時、我國には亦敏捷の舉に出づる必要があると思ふ。従つて世界の地圖を緋けば、東印度並びに支那海に於ける重要な地は英吉利の既に占むる所となつて了つた。幸日本及び太平洋上の島嶼は未だ英國の手に觸れられずに残つて居る許てなく、其の内或ものは商業の要路に當り、合衆國に取つて重要な地點となるのであるから、今こそ自ら進んで多

くの避難港を得るに一刻も猶豫すべき時機でない。夫故ボーハタン及び其の他の軍艦を大至急後から派遣して貰ひたい。以上當官は此の燕雜にして略儀なる書信を以て、世界を通じて非常の注意を促せる問題に就き卑見を陳述いたしました。而して當官は本省が拙案を承認せらるべき事を信じて居る次第である。云々。

斯う云ふ手紙を提督は便船に托して本國に送り、糧食石炭其の他の須用品を積込んで、十二月の十五日に錨を引揚げた。其の時提督の考へは、北東の貿易風を利用して何處へも寄らず真直に喜望峯迄帆走する積であつた處件の貿易風は常よりは、遙か北方で停つて、南東の貿易風が之に代つて居た。此處で石炭補充の爲餘儀なくセントヘレナ島に寄港すべく進路を向けた。セントヘレナ島のゼームスタウンに着いたのは、翌千八百五十三年の一月十日の正午であつた。此處はナポレオン終焉の地として名高いこととて、艦隊の士官水兵は我先にとロングウッドに英雄の遺跡を見物に出懸けた。用意の爲に石炭糧食を積込み、十一日の午後六時錨を

抜いて、喜望峯に着いたのは同月の二十四日、又もや此處でも糧食薪炭等を積込み二月三日に出發した。夫からモリシウス(二月十八日)錫蘭(三月十日)新嘉堡(三月二十九日)に寄港し、到る處石炭糧食の補充を得て四月七日の日没頃に香港に着いた。すると此處にはブリマウス號(百噸)サラトガ號(九百噸)の帆前船二艘と運送船サブライ號(十噸)が碇泊して居て、ミシシッピー號に對つて祝砲を發つたので、ミシシッピーからも挨拶の大砲を發つた。ミシシッピー號は暫く香港に滞在して居たが、やがて此處を立つて澳門に寄港し、更に廣東に赴き再び澳門に引歸して、四月二十八日の夕方サラトガ號をば艦隊の通譯たるべきウリアムス博士を待受ける爲に此處に残して置いて上海に向つた。而して上海に着いたのは五月の四日であつた。此處にて旗艦をば碇泊中の蒸汽船サスクハナ號(百噸)に移し、愈々琉球を経て日本に赴く準備に取掛つたのである。斯くて此の月の二十三日午後一時、サスクハナ號はサブライ號を曳いたミシシッピー號と同じく其處に碇泊して居たカプリス號(十四噸)と都合四艘で琉球の那覇を指して出發した。

## 第二編 琉球の巻

### 一 日本の土地の踏初め

サスクハナ號とミシシッピー號とは一海里の間隔を保つて徐々と進んだ。カブリス號は甚しく南西貿易風に吹立てられながらも、遠くなる迄猶帆影は見えて居たが、やがて闇の裡に影を没して了つた。後に續いたミシシッピー號は、サップライ號を曳いて居るにも係らず、橋帆の力で直ぐサスクハナ號に追附いた。之を見て、サスクハナでは前の橋帆を揚げた。すると見る間にミシシッピーは後になつて了つたので、再び近寄るのを待たねばならなかつた。サスクハナ號の汽罐は一時間石炭一噸の消費に限られたので、速力は平常の半分より出なかつたが、貿易風がそよそと吹くので、其の力を借りて一時間に七哩を走る事が出来た。航路は南へ南へと下るので、氣候は追々暖く、海は湖の如く滑であつた。

航海中は規律正しく、種々の訓練が行はれ二十五日の朝には琉球島滯在中の心得が申渡された。其の日の夕方、ミシシッピー號から琉球島が見出したと云ふ合圖があると同時に、サスクハナ號の前橋の番人からも同じ報知があつた。夜になると蒸汽船は共に速力を緩め、近くなり遠くなりつゝ進み、サップライ號は是より前にミシシッピー號から放されて、單獨で帆走して居たのである。

二十六日の朝七時半に、琉球は再び二十哩餘の沖合に現れた。近付くに從つて、一列に連つた島影は漸次に判然と海上に浮上つて來るのであつた。サスクハナ號は先頭に立ち、ミシシッピー號は直ぐ其の後から續いたが、サップライ號の影は全く見えなかつた。軍艦が段々近づくに隨つて、明媚な英國の山水を想起させるやうな美しい景色が、一々指顧の間に展開して來た。三時には那覇の市街が港の奥に判然見える所迄進んだ。續いて軍艦が港内に這入つて行くと、市街の北方に突出した岩上の一軒家で、旗竿に高く旗を掲げた。之はベトルハイムと云ふ猶太教から改宗した宣教師の住宅で、彼は英國海軍士官並に英國の信徒の有志者から成る或

協會の庇護の下に、最早此處に五六年、琉球人の反對にも係らず住み通して居たのである。

港口に突出した岬を廻ると、内港の口が顯に見え出して、港内では大きな日本船が此處彼處で錨を引揚げて居た。件の旗竿の下には、二人の男が我軍艦の行動を監視して居た。試みに望遠鏡で観ると、白い日傘を差して、市街を逃げる者が陸續と見える。

やがて其の日の夕方、サスタクハナ、ミシシッピーの二艦は、折節塙門から來合したサラトガ號と共に、琉球第一の要港たる那覇港に投錨した。

琉球が果して日本の屬領なれば、之が日本の土地の踏初である譯だが、當時此の島の所屬に就いては、或は薩摩の國主の一所領とも、或は支那の外藩とも謂はれて、何れとも確定して居なかつたのである。

## 二 解が一艘雨を冒して來た

投錨して二時間と経過せぬ内に、二人の役人を乗せた解が一艘折柄降り出した雨を冒して、旗艦サスタクハナに漕寄せて來た。甲板に上ると、彼等は幾度も鄭寧に挨拶して、夫から赤色の日本紙に認めた、一丈餘もある手紙を差出した。

長官らしい人物は、鮭の肉色の、同伴の男は青色の芭蕉布で仕立てた、なか／＼立派な寛濶な外袍を著け、青い帯を締め、白い足袋を穿いて、手には眞黄色な長方形の冠を持つて居た。そして二人とも、同じやうに、黒く長い、疎な顎髯を垂れて居たが、年

は三十五六か四十邊らしく、顔型は全然日本人で、色は淺黒かつた。

彼等が何物で、又何の目的で來艦したのか、言語不通のため差當り判らなかつた。其處で、早速提督の使つて居る一人の支那人を呼寄せて、件の手紙を讀ませて見ると、何の事はない、唯軍艦の無事到着を祝するため挨拶に來たのだと云ふ事が解つた。然し提督は豫定の計劃通り彼等と會見するのを拒避したので、二人は提督に會ふ事出來ずに其の儘歸つて行つたが、疑ひもなく彼等は、島の官憲から、我々の意向を探る爲に遣はされた間喋て、其の様子次第で、我々外人に對する政略や待遇振



を決定しようとしたのである。

換人

彼等と行違ひに宣教師のペトルハイム博士が小舟に乗つて訪ねて来て衷心から艦隊の入港を祝した。彼は提督の船室に案内されて、二三時間話をして居たが其の間に米國の日本訪問の計劃に就いては一寸も噂すら聞かなかつた事や、此の一年半許と云ふもの外國船が一艘も那羅に寄港せぬ事などが知れた。久振て同じ外國軍艦が入港したとは云へ條、ペトルハイムの喜び方は非常に宛然氣が狂つたかと思はれる位であつた。其處で船を漕いで來た船頭には、酒やビスケットなどを與へて喜ばせ、宣教師の歸りには海岸から三哩近く迄見送らせた。斯うして二十六日は何事もなく暮れた。

### 三 牛豚鶏卵野菜の贈物

夜が明けると二十七日、陸地は青々と緑滴る許に昨日よりも一段美しいので、誰一人恍惚と見とれぬ者はなかつた。すると朝の七時頃、四艘の小舟が贈物を積んで

軍艦に來た。其の内の一艘には、昨日の二人が贈物の目録らしい手紙を携へて乗込んで居た。

賜物は、犢一匹、豚五六匹、山羊一匹、夫に鶏野菜若干の鶏卵などであつた。提督は斷然夫を卻けて、使者の甲板に上るのも許さなかつた。彼等は如何する事も出來ず、暫く茫然として待つて居たが、やがて不安と恐怖とを顯然顔に現はして、漕ぎ歸つた。

其の時數艘の大船が港内から北を指して出帆した。其の内の二三艘は殊更軍艦の直ぐ傍を物珍しさうに眺めながら通つて行つた。確に亞米利加軍艦の出現は琉球人に非常な恐怖を惹起させたに違ない。其の報道のため今の船は日本本土に急派されたのであらう。

其の内艦隊では海陸二組の探檢隊が組織された。前者は東西の海岸を探查し、後者は内地の調査並に動植礦物等の標本採集に當る事になつた。提督は又ブラウンと云ふ寫眞技師に上陸して撮影する許の準備を整へさせた。然し此の日は港

内を漕ぎ廻る位の事で、上陸も土民との交通も堅く禁じられてあつた。

#### 四 攝政と提督との會見

三十日になると、今日琉球の高官が旗艦サスクハナに訪問して來ると云ふ噂が、艦内で立て、通譯のウキリアムスもサスクハナ號の甲板に出て來る、同時に宣教師のウキトルハイムの許にも今日の會見に立會つて呉れるやうにと使が出された。此より前、コンテ・大尉はウキリアムス通譯と一處に那覇の統治者と推量される市長とも云ふべき里主を訪問した。里主は頗る鄭重で、慇懃に二人を款待したが、贈物の拒絶されたのを非常に不快に思つて居るらしいから、コンテ・大尉は、總て軍艦では他國の贈物を拒絶して受けないが、我が米國の慣例であつて、決して他の厚意を輕蔑すると云ふ考ではない。先日の場合も、矢張之と同じ譯であつたのだと説明したのである。

偕て其の日の午後の一時期、琉球の高官を乗せた粗末な普通の小舟が一艘陸から

漕寄せて來た。軍艦では、彼等に敬意を表すると共に、深い感動を與へてやらうと、水兵には制服を着換へさせ、總ての準備を整へて待受けて居たのである。最初に下級の役人が一人、舷門を昇つて來て、上官の名刺を差出した。夫をウキリアムス通譯が受取つて讀んだ。彼が小舟に歸ると間もなく、琉球王國の攝政と稱する立派な老人が、二人の役人に助けられて出て來た。

ブツカナン艦長とウキリアムスとは攝政を舷門に立迎へた。攝政は自國流に兩手を胸の邊で組合せて、頭を少し低げた儘で、腰を深く屈めて艦長に挨拶した。而して王子は十二歳の幼主で、其の上病氣の爲、自分が攝政として總ての事を一任されて居る旨を述べた。續いて、役人が七八人、從者が二三十人、攝政に扈從して、甲板上に列んだ。其の時三發の禮砲が轟然と鳴り響くと、其の音に吃驚して、思はず腰を抜かした役人もあつた。訪問者一行の様子の内、特に著しく目立つて見えたのは、誰も彼も眞面目腐つた顔付をして居る事であつた。夫には好奇心もあり、又恐怖心も多少手傳つて居た

所爲であらうが、何處までも眞面目な態度を崩さぬやうにと努力して居るらしかつた。先づ艦長室を手始めに、艦内限なく案内して歩くと、彼等は相變らず落付さ拂つて見て廻るのであつたが、蒸気汽罐の處に来ると、流石の彼等も愕然として、異體が判らず、狼狽へた様子が顯然と顔に讀まれた。

此の時迄提督は、或る政略上一人船室に閉籠つて居て顔を見せなかつたが、やがて訪問者を自分の船室に導かせた。攝政が提督の船室の階段を昇り終はると、夫を合圖に樂隊が盛に鳴り出した。威嚴を具へた老人は樂隊には眼も呉れずに船室に這入つて行つた。提督は攝政を立迎へて巧に待遇した。而して一時間半餘の會見の間に互に厚意を交換し、攝政が歸る時には提督は態々艦側迄叮嚀に見送つたのである。

會見の際提督は攝政に向つて、六月六日に首里の宮殿にお禮の訪問を致すからと言ふと、攝政は早速返答が爲かねて、同伴の顧問官と協議を始めた。然し提督は、其の日に必ず訪問する決心であるからと堅く言ひ切つて、更に亞米利加合衆國の使

節並びに艦隊の司令長官としての地位階級に相當する待遇を得たいと附け加へた。攝政は之に對して公然何とも承諾の言葉を與へなかつたが、提督の言葉は十分に吞込んで歸つたのである。

## 五 品物を放出した儘の露店

右の會見の結果琉球人の不快を招かぬ範圍内だと云ふ條件付で、上陸しても差支ない事になつた。有名な旅行家て上海からサスタクハナに乗込んで遠征艦隊の一隊に加つたテラーは一隊を組織して直ぐ様ベトルハイム博士の旗竿の建つて居る岩下に上陸した。テラーは當時の有様を次のやうに記して居る。

琉球人は其處にも此處にも簇つて我等の上陸を見張つて居たが、我等が岸に上つて進んで行くに隨つて、段々尻込みして遠退いて了つた。唯一人銀の留針を頭髮に挿した、一角優れて立派な男が留つて居て、我等に挨拶した。短い蜿蜒した小徑を傳つて行くと、やがて那覇から首里に通ふ大通に出た。石を敷いた實に立派な

往來て、英國の砂利敷の道路を彷彿させるのであつた。

土人は一杯に道の兩側に寄り塊つて、我等の通行を見て居たが、近づくると雪崩を打つて身を退くかと思ふと、直ぐ後から又一杯になつて跟いて來るのであつた。夫を我等を監視のため特に任命された五人の役人が取締つて居る様子であつた。其の群集の中には、長い頸帯を垂れた人品卑しからぬ顔も澤山混つて居たが、其中の一人が何とか言ふと、群集はばら／＼と一時に退散して了つて、見る間に家々の戸は悉く閉ざされて、女子の影一つ見えなくなつた。

我等は恰かも無人の境を行くやうに寂然とした大通を練つて行つた。町の家々の赤い瓦の屋根市中に蔚然と茂る樹木の綠陰、其の間に椰子や芭蕉果の參差見える有様は、地中海のシシリーの町を想起させるのであつた。一行は猶那覇の一番繁華な場所を通つて、夫から小山の麓の坂を下ると港に出た。其處には船が繫泊つて居る許で、何も眼に觸れるやうな物はなかつた。港口に續いて、東に延びた入江に沿ふて小廣い市場があつたが、此處には大きな天幕が二つ三つ入口を細目に

明けて、其の附近に二三の土人が彷徨つて居るだけ、町同様寂然として居た。其處に居た土人に手眞似て水を求めると、天幕の内に這入つて行つて、四角な木の杓子に水を入れて來た。

入江の方に引き返して行くと、突然警吏らしい男が二人我等を呼び留めた。立止まると、彼は海濱に行く道を指示した。夫には關はず眞直に進んで行つた。觀る所、全市は悉く戸を締め切つて、明いて居る商店は一軒もなかつた。のみならず餘程周章たつたものと見えて、大通に品物を放出した儘の露店もあつた。

歸りに或寺に紛れ込むと、女らしいのが五六人壁から顔を出して我等を覗ふ様子であつたが、戸の内に這入ると周章て、引込んで了つた。庭には美しい樹木が善く繁茂して居たが、二艘の細長い小舟の外別に目に着くやうな珍しい物もなかつた。其の舟に腰を卸して休んで居ると、一群の土人が周圍に寄つて來た。彼等は初め幾分か煙たがつて居る様子であつたが、直ぐ親しくなつた。而して辻や路傍に出で居た露店も、今度は逃げる暇がなかつたので、饅頭や菓子等を並べた儘、其の側

に坐り込んで居た。其の内には女も混つて居たが、何れも何れも醜い老婆許であつた。

## 六 琉球人の二つ魂膽

琉球側では、提督の首里訪問を餘程恐れたものと見えて、極力之を防ぎ止めるに懸つた。其處で彼等は種々様々の口實や策略を設けるのであつたが、夫が何れも拙陋で、直ぐ腹の中が見え透く許であつた。

第一に彼等は提督の訪問を首里の代に那覇にして貰ひたいと申込んで來た。之が抑も琉球人の一つの魂膽で、首里の宮殿への挨拶の訪問をば、那覇で喰止め、然かも攝政へ返禮の訪問にして、有耶無耶に済まして了ふ量見であつたのである。その爲那覇の里主は、提督が首里を訪問すると言つた二三日前に大宴會を那覇で開いて、攝政が主催者として出席するから提督にも是非も出てを願ひたいと求めて來た。所が提督は夫を見抜いて居たから、生憎當日は糧食船のカブリス號を上海

へ派遣するので手抜きが出来ぬからと體克く謝絶した。

提督が出席せぬからと云つて、態々準備した御馳走を其の儘反古にして了うも殘念と思つたのか、琉球人は響應の献立を澤山船に積んで軍艦に持込んで來た。今更これ迄も拒絶する譯にはいかなかつたので、兎に角禮儀として受取つて置く事にした。すると見る間に上甲板は鳥魚野菜、果實などの料理で一面になつた。此の時も提督は政略上顔を出さずに居たのである。

第一の魂膽が見事失敗したので、彼等は手段を更へて、今度は提督の同情に訴へて來た。而して言ふのは、王子の御母上が一年許前から御病氣に渡らせられる、其の原因はと申せば、何時ぞや英國海軍の士官が、琉球政府に宛てたパーマーソン公の手紙を差上げるのだと言つて、無理無體に宮殿に這入り込んだので、夫に仰天した所爲であるから、若し再び其麼騒動があると、御病氣を増長させる許、萬一不慮の御事がないとも限らぬから、提督が首里にお出でくださるのは少しも差支がないが、訪問は宮殿の代に王子の御所にして貰ひたいと云ふ事であつた。

然し提督は王太后の病氣は初めから怙て信用しなかつた。のみならず斯う云ふ策略は、たゞ琉球人を監視して居る日本政府の間隙を満足させるのである事を吞込んで居たから、右の懇願に對して提督は反對に、嘗て英國の士官が面會した處迄行くのは當然自分の務で、當日は數多の樂隊、其の他お供を連れて宮殿を訪問致すから、若し太后が王子の御所に移らるゝやうな事なく、宮殿にお出でになれば行列を見て御氣分を慰めらるゝに違ない、實際又お喜ばせ申さうと仕組んだ次第であるのみならず、當日は上手な醫者も連れて居るから、夫に御病氣を診せて一日も早く御回復を圖らるゝやうな事があらば實に此の上ない仕合であると云ふ風に答へさせた。

這麼具合で琉球人の魂膽は二つとも見事水の泡になつた。

### 七 人情に何處も差異は無い

提督は又陸上に家屋を得る必要があつたので、サスクハナの士官二人に通譯を付

けて、流珠の官憲と其の事相談の爲上陸させた。使の者は上陸して、米國で町會所とも云ふべき、泊村にある一軒の建物に這入つて行つた。此處は普通の外國人を接待する所、三十疊敷許の廣間が寢所に當てゝあつたが、其の外色々の事に使はれる様子であつた。

此處に著くと、小使がお茶と煙草と出して待遇し、同時に直ぐ使が上官の處に立つた。一時間許すると、日本の役人が一人出て來たが、其の態度の温順な事は實に感服の外はなかつた。而してお定まりのお茶と煙草とが直ぐ又運ばれた。此處で米國の使者は今日の用件を切り出した。すると彼は言下に亞米利加人が海岸に家を持つ事は所詮出來せんと答へた。然し吾々は以前英國のホールと云ふ艦長が長い間懸つて結局海岸に家を得た事を知つて居るから、其の事實を楯に取つて、何うしても一軒借り受けなくてはならぬと頑張つた。彼は此にも屈せず、夫は極めて至難しい相談であると巧に言ひ争ふのであつた。家を貸す事が出來ぬならば亞米利加人を二人か三人此處に泊めて貰ひたいが如何であるかと尋ねると、

亞米利加人は一人なりとも海岸に泊める事はなりませんと答へた。更に追求すると、彼は一々通譯の手を煩はすのをもどかしくなつたと見え、席からつと立ち起るかと思ふと、つか／＼と士官の所に進み寄り、通譯の口を籍らずに、意外にも英語で、

「紳士よ、琉球人は甚だ弱いです。亞米利加人は甚だ弱くありません。私は華盛頓の事を書いた本で亞米利加の事を讀みました。華盛頓は甚だ善良な善良な人です。琉球は亞米利加の善良な友邦で、琉球人は亞米利加の入用な食料は皆上げます。けれど亞米利加人は海岸に家を持つ事はなりません」と殆ど間違なく言つた。兎に角此の内の二三人を夜だけでも可いから此處に泊めて置いて貰ひたいと猶執固く請求すると、彼は、夫ては一應那覇の里主と相談して來るから暫く待つて呉れと挨拶して出て行つた。歸つて來る迄にかなり時間が懸つた所を見ると、那覇より一里程先の首里迄行つて里主と相談したものらしい。彼が歸つて來たので

「如何です、今晚此處に泊めて貰はれますか」と訊くと、彼は、鄭寧に頭を低げて、力の這入つた聲で

「出來ません」と一言答へた。

斯う素氣なく拒絶されたものゝ、我が士官達は提督より家屋設定の命令を受けて居るので、何うしても夫を貫徹しなければならぬと決心し、琉球人の反對にも係らず、士官一人と通譯とを後に殘して置いて、他の者は一伍一什を報告すべく旗艦に歸つた。

其の夜後に殘つた士官と通譯は疊二疊の上に、琉球人は餘りの疊に轉つて寝た。其の際、琉球人が此の會所を強制的に取圍むと云ふ噂を一寸耳にしたが、其處事もなかつたし、町の民家に泊つた他の二人の連中も唯土人に取捲かれて居ただけで、外に別條はなかつた。其の翌日、提督は病氣の士官一人に看護人を附けて泊村の會所に送り届け、前夜の人々は歸艦する事になつた。

這麼具合で、最初琉球の官憲が公然上陸に反對したのに係らず、我が士卒は上陸し

て、那覇の市中や郊外を彷徨いた。すると土人は珍しさうに面白がつて後からぞろぞろと跟いて来る、偶に道で逢ひになると、彼等は腰を低く彎曲めて、丁寧な辭儀をするのであつた。此の様に土人は我等に對して懇意であつたのに、斷えず間喋が付き纏つて居て、我等の一动一舉を監視し、亞米利加人が近づくと、夫と注意するので、子供や女達は嚇かされたやうに怖がつて逃げ去つて了うのであつた。然し泊村の會所に病氣養療に行つて居た米國の士官と土人との間は至極圓滑であつて、彼等は確に親切なものであつた。

要するに琉球の島民は愛すべき人間で、善く彼等の性質を調べて見ると、人情に何處も差異はないと云ふ事が解るのである。

六月の四日には内地探検隊が出發した。琉球からは一人の親雲上と云ふ身分の役人を案内につけた。

## 八 提督は轎に乗つて

豫定の首里訪問の六月六日が來た。外觀を立派にするのも一つの政略なので、前日から其の準備に取懸り、色々の趣好を凝して其の日を待つて居た。

待ち兼ねた六日の朝の明けた所を見ると、空は薄暗く曇つて風さへ強く吹き荒み、とても天氣の好くなりさうな望がなかつたが、朝雨が一陣沛然と通ると、雲は追々に切れて、やがて青空が現はれ出し、日暮迄には此の上ない爽快な好天氣となり、陸地の景色は之も云はれぬ美しさを増した。出發の時間と定めた九時になると、其の合圖が旗艦から發せられた。すると短艇は一齊に漕出した。

上陸點は首里の宮城から三十町程手前の泊と云ふ村で、短艇が皆其處に漕寄せた時は素晴らしい觀物であつた。提督は少し後れて大艇で出發した。前に上陸した水兵は各々武裝して、路側の並樹の下に整列して、提督の上陸を待受けた。短艇に残つて居る者は橈を休めて面白相に陸上の行列を眺めて居た。幾百と云ふ土地の群衆は犇々と周圍を取圍んで、氣が抜けたやうに眼前の光景に見蕩れてゐた。ペルリ提督は參謀長アダムス大佐及びサスクハナの艦長ブツカナン、ミシシビ



の艦長レエー、サラトガの艦長ウォーカーの三人を従へて上陸し、水兵と砲兵との列  
んで居る前を通過ぎた。夫と共に一行の行進が直ぐ開始された。一番先頭には  
メント大尉が二門の野戦砲を引いて立つた。其の後にサスリハナのベネット、通譯  
のウキリアムス、宣教師のペトルハイム、其の後は又ミシッピー號の音楽隊と、ゼ  
リン少佐に率ゐられた水兵の一隊が随つた。提督は轎に乗つて其の後に續いた。  
提督の乗つた轎は當場の間に合せに、急に艦内で造らせた物で、場合が場合故思切  
つて大きく威厳しく、頑丈一點張りて殆ど荒木同様なのを、繪具や漆で濃厚と塗り  
立てたのであつた。夫に周圍に垂れた掛布も赤と青との派手な物であつたが、夫  
すら餘り上等の品ではなかつた。然し總體から云ふと行列の中では確に一番目  
立つて居た。兎に角這麼大袈裟な轎を見るのは琉球人には今日が初めてであつ  
たのだ。夫を支那人の苦力が八人で四人交替に擔ぎ、其の兩側には二人の水兵が  
護衛として付き、直ぐ後からは小性を選ばれた美少年が給仕の支那人と一處に扈  
從した。アダムス大佐コンテ、大尉及びベルリ氏は轎に随つた。其の後からは

六人の苦力が琉球の王子と王太后とへの献上物を擔いで其の前後をば一隊の水  
兵が護衛して居た。其の後にはブッカナン、レエー、シンクラの諸艦長が先に立ち  
色々の役人達が従者を伴れて續々と現はれて來た。最後の殿軍はサスクハナ號  
の音楽隊と水兵の一隊とであつたが、水兵の數は二百人以上もあつたらう。

### 九 行列が首里の門に達く

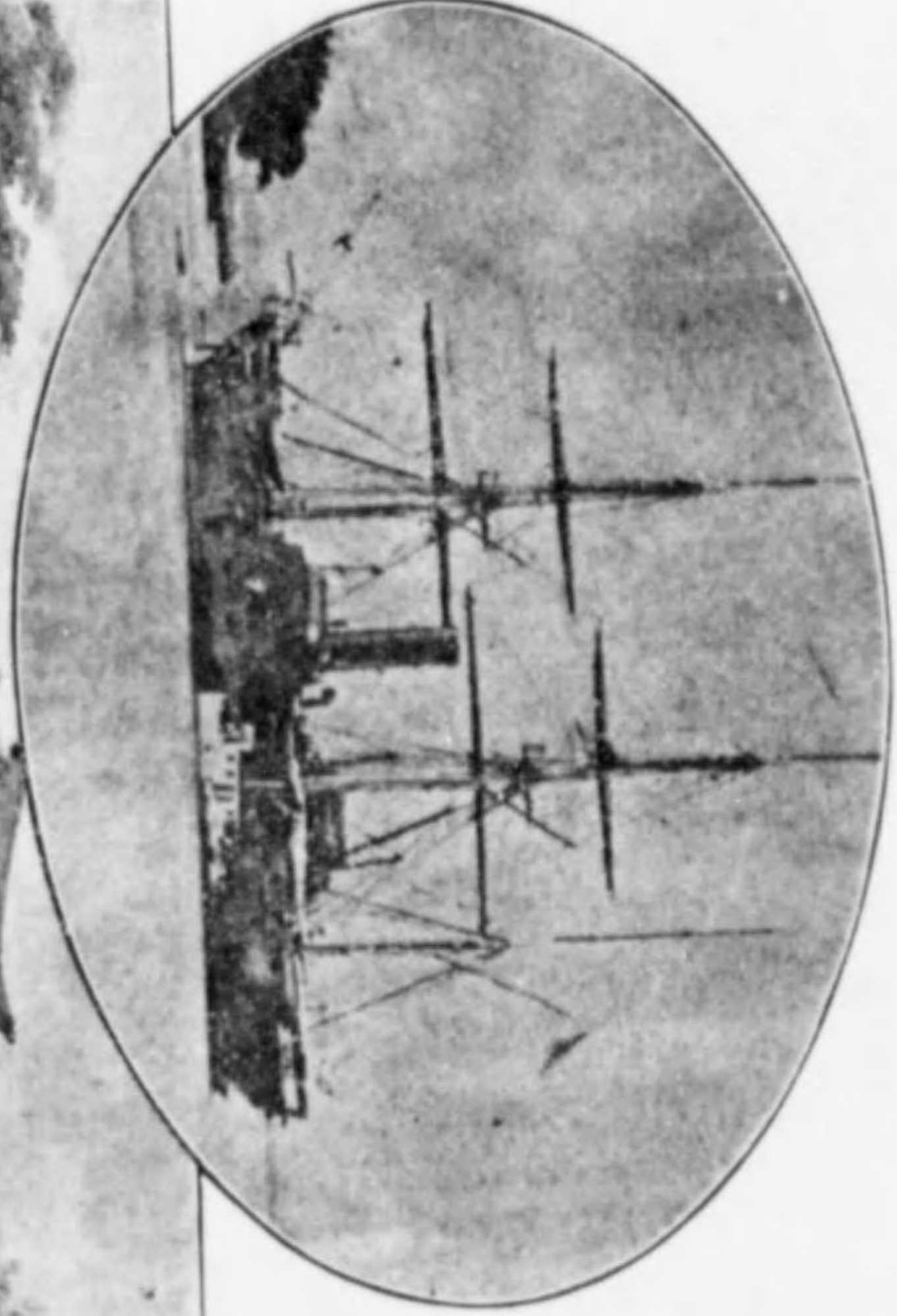
隊伍は整然として恰も繪に畫いた行列のやうであつた。夫に天氣は次第に好く  
なり、樂隊の音楽は劉曉として綠の溢れる野や山に響き渡つて浮き起つ許であつ  
た。土人は此の珍しい目の眩くやうな立派な行列を見物しようとして路傍に犇々と  
折り重なり、而して行列が行過ぎると後から雪崩を打つて押寄せて來るのであつ  
た。然し彼等には何の爲に此の様に武装した水兵迄澤山行列を作つて通るので  
か其の譯は一寸も解らぬ様子で、唯目の前の光景に許心を奪はれて面白かつて居  
た。行列が或細通りに差懸ると、路の兩側に集つて居た群衆は誰にも見えるやう

に一番前の列は跪坐み、次の者は中腰に屈み、後の者は起つて居た。村落を放れると、一行は首里の南の廣々した平坦な田圃に出た。其の周圍の景色は宛然繪のやうで、稻は風の渡る毎に波のやうに美しく揺れるのであつた。並樹や小山の柵は緑陰が青々として、さも涼し氣に見えた。樹木で取圍まれた首里の人家は、其の棟だけを此處彼處の樹木の繁みから日光に閃々と露して居た。

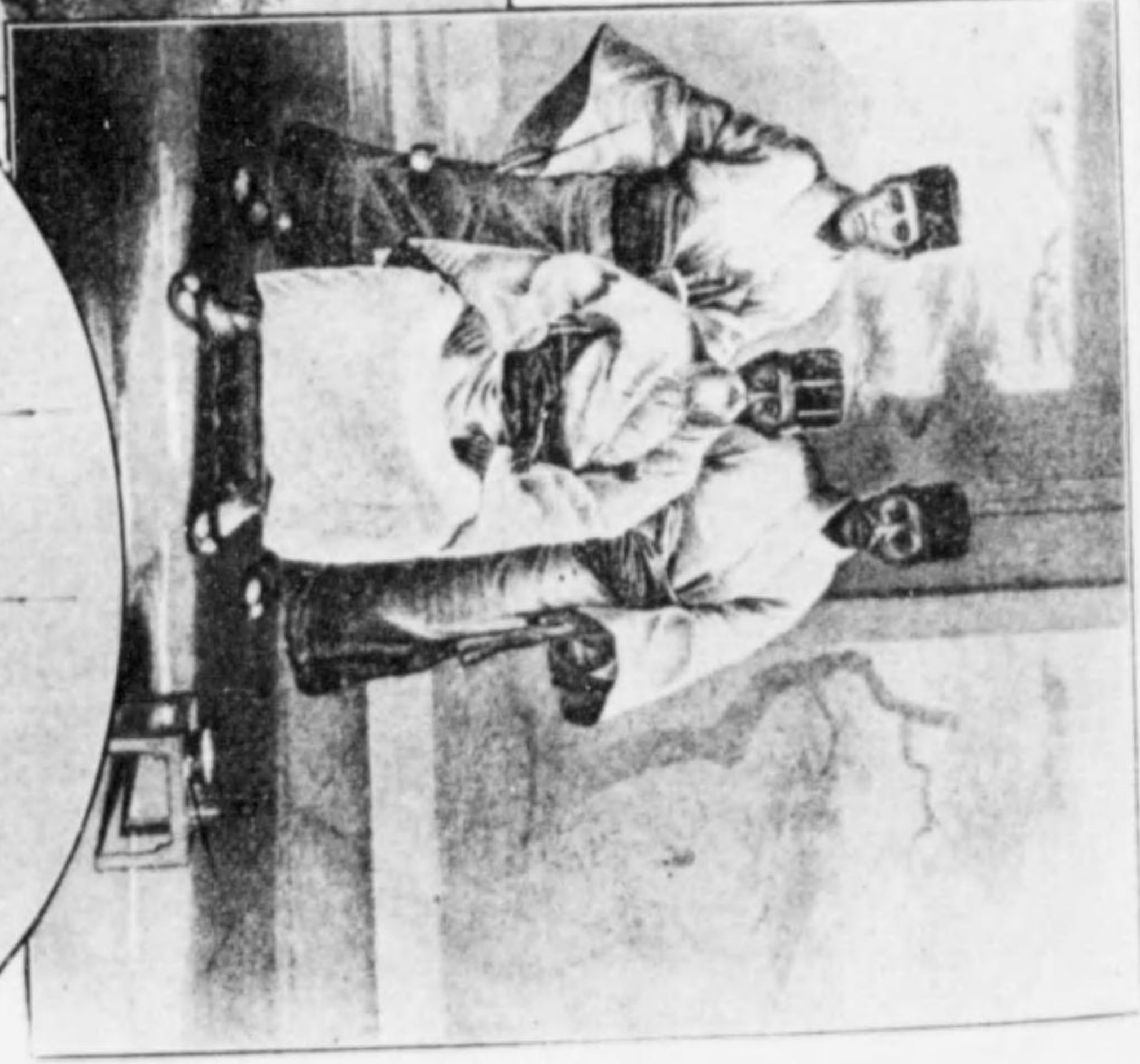
見物人の中には、松の樹陰に塊つて面白相に行列の通るのをちつと觀て居るものもあれば、行列の異つた所を見ようと、田圃の畔を思ひくりに駆け違ふものもあつた。樂隊は斷えず勇ましく其の音を遠くの方迄鳴り漂はし、行列の進軍に一入元氣を添へた。行列が首里に通ずる坂を下ると、長い間單調なる艦内生活に拘束されて、美しい自然に接する事が出来なかつた士官や水兵は、嬉し相に四方を見廻し、南と西とに延び廣がつて居る豊饒なる耕地の景色に全く恍惚として了つた。

琉球側からは、前回内地探検隊の案内をした親雲城が、ペルリ提督を泊の上陸地に出迎へて首里へ案内の任に當つた。やがて行列が首里の門に達くと、従者を引拉

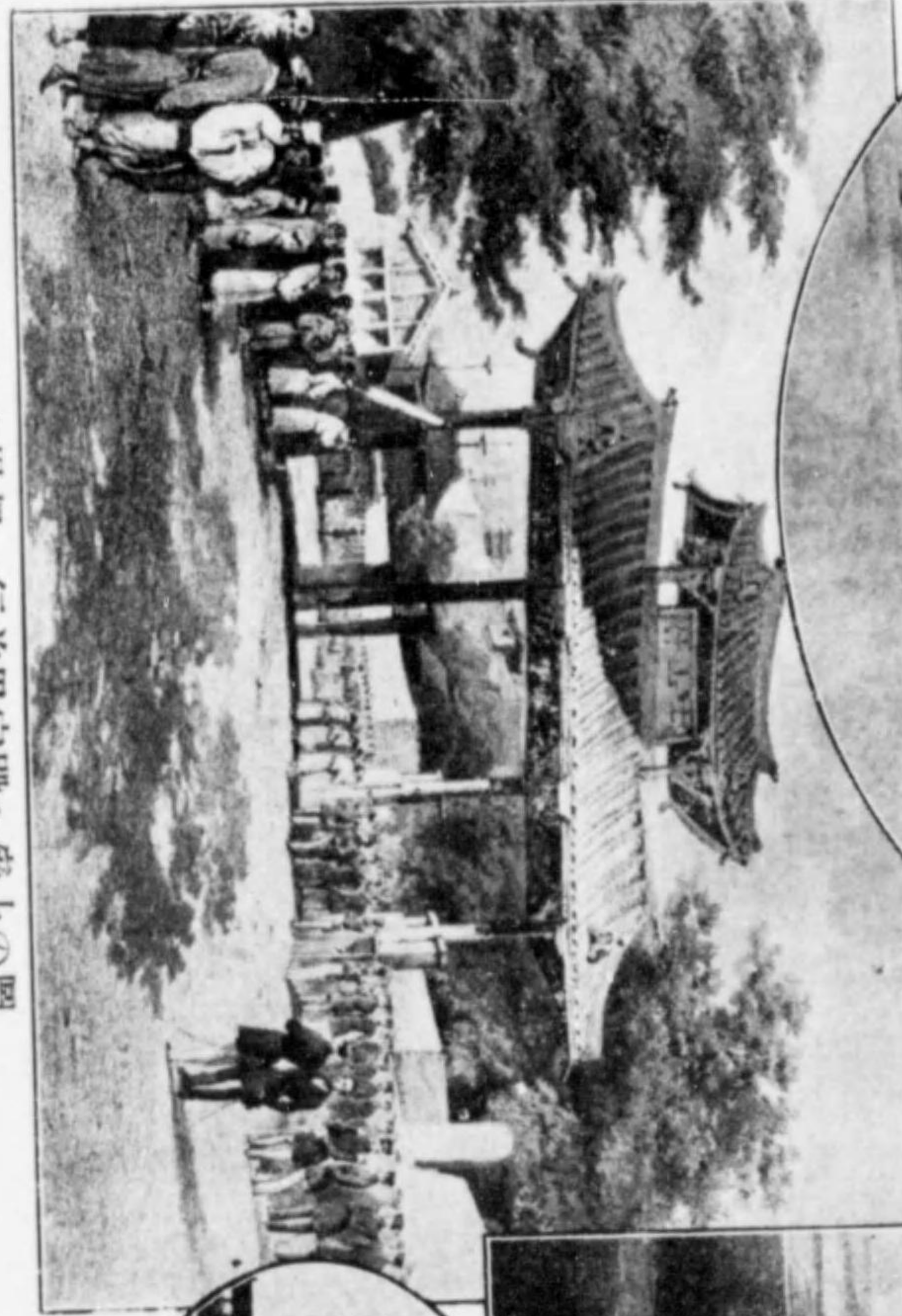
長右國艦ササキハナ丸、最大幅四十五呎、深三十七呎六吋



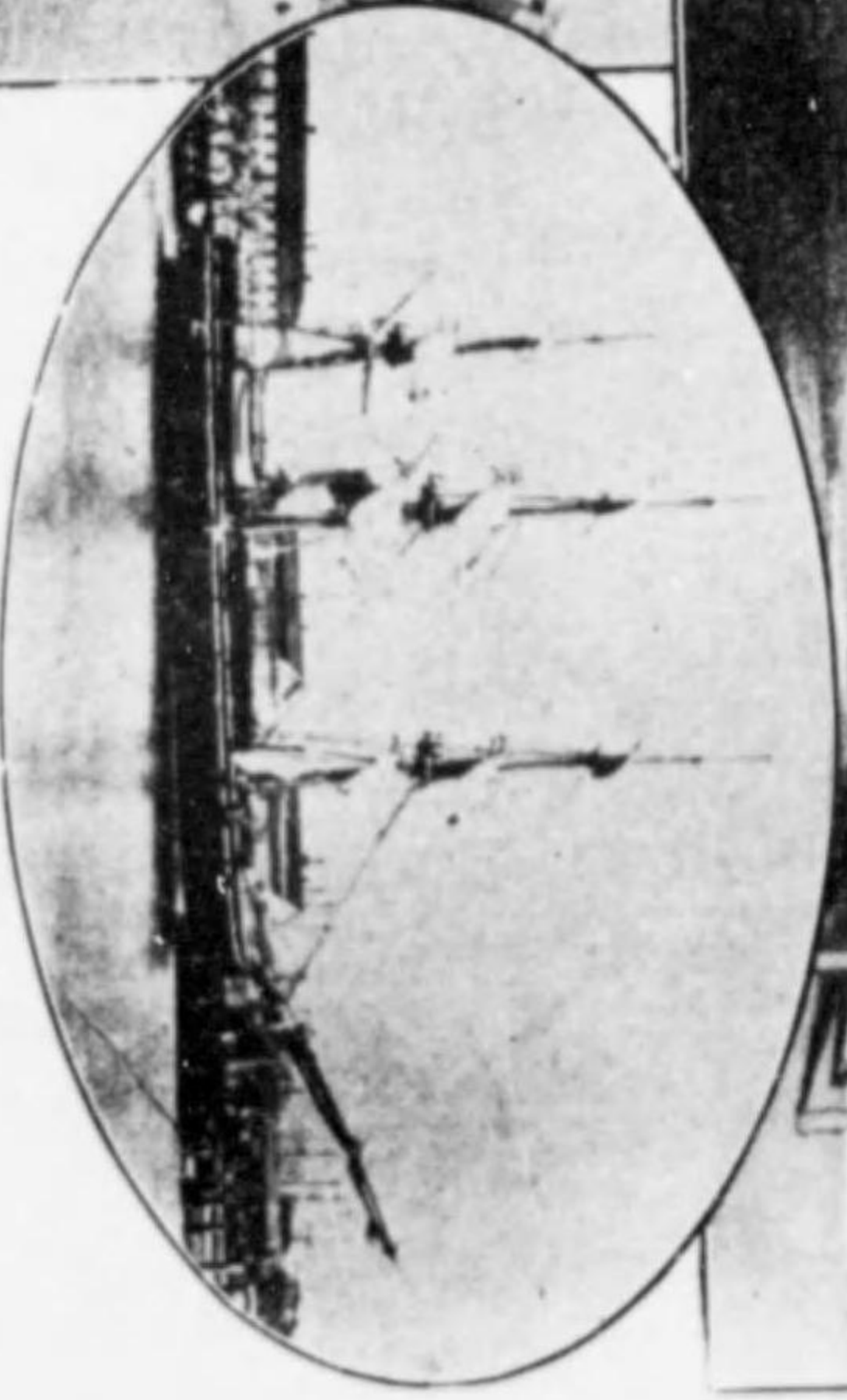
右圖琉球王ノ攝政



ペルリ提督一行首里宮殿へ參上の圖



ササトガ丸、最大幅三十五呎、深二十五呎



れた土地の高官の一群に會した。何れも盛装をして、琉球特有の赤や青色の四角な冠を被つて居た。其の内から老攝政と三人の立派な隨行員とが現はれて來て挨拶するや、直ぐ足を回して行列を町の内に導いた。行列は足を停めずに、門の真中の通路を通抜けて、大通を進んで行つた。攝政と高官との後には、傘を差したり、重箱や折箱や、其の他の道具調度などを持つた從者が澤山隨つた。大通の兩側には高い壁障が築いてあつて、處々四又に切れて、其處から小徑が兩方に分れて居た。土地の役人は見物人を通から追拂つて、左に折れる辻の處だけに一杯集めて置いたので、其處の雑沓と云つたら素晴らしい物であつた。實は此處で又提督の參城を妨げようとの最後の魂膽が企てられたので、行列が其處に近つくと、琉球の高官が通譯を通じて、攝政の邸宅は此處から遠くもないし、夫に攝政は御馳走を用意して待つて居るから、一先彼處へ寄つて食事をして貰ひたいと申入れた。ウキリアムス通譯は此の要求の眞意を直ぐ觀破したので、夫には頓着せず眞直に城門指して進んだ。攝政は件の計略が確に成功と豫期したと見え、宮城の門

をば閉して置いたが、目算が外れたので、大急に使を立て、門を開かせ、提督接待の準備に取懸らせたのである。

行列の先頭が宮城の門に達くと、砲兵と水兵とは一列に整列した。提督は随行員を従へて其の前を通つて宮城の内に這入つて行つた。其の時軍隊は一齊に銃剣を捧げ、國旗は下げられ、樂隊は「ヘル・コロンピヤ」の曲を奏した。

### 十 空茶一杯の待遇

やがて提督は宮中の接待の間に導かれた。右側には漆塗の椅子が一列に並べてあつた。提督は其の上座の椅子に腰を卸し、續いて随行員一同も席に着いたが、下座の方は一列に居きれずに二列に並んだ。左側の椅子には攝政と顧問が三人着席し、従者は其の後に二重に並んで立ち、通譯は提督と攝政の間の上座に提督に少し近寄つて起つて居た。病氣だと吳々も云はれた王太后は勿論顔を出さなかつたし、王子も出て來なかつた。然し相互の挨拶が一通り済むと、卓子が運ばれて、薄

い茶が一杯夫に煙草と非常に硬い捻つた菓子卓上に並べられた。後にも前にも待遇としてはこれきりなので、今日の宮城訪問は全く豫期して居なかつたのだなと云ふ事が直ぐ判つた。疑ひもなく琉球側では提督を攝政邸に引留めて參城を喰止めやうとの提督の計略が一圖に成功すると許思つて、宮城で招待の準備は一つもして置かなかつたのである。

やがて提督は、自分は二三日の内に那覇を出發する積であるが、十日許経つと再び此處に歸つて來るから、出發前でも亦歸つてからでも、何れでも貴方方の都合の好い時に、サスタクハナ號へお出でを願ひたいと、攝政と三人の顧問をば招待した。すると彼等は訪問の期日は貴方の指圖通りで結構との事であつたので、提督は、然らば軍艦に歸つた上で改めて挨拶いたさうと答へた。彼等は満足らしく夫に同意した。

以上の挨拶が右の如く一段落を告げると、今度は攝政が改めて數枚の赤い紙片を取出した。すると三人の顧問は一度に起上り、二三步提督の前に進み出て、ぐラツ

と腰を曲げて鄭重にお辭儀をした。提督も士官も一同起立つて夫に應答した事はしたが、此の場合琉球人の敬意は實際何う云ふ意味であるのか全く解らなかつたのである。其の時提督は攝政に向つて色々珍しい有用な品物が軍艦に用意してあるから貴下に差上げたいと思ふが、お受けくださらば誠に本懐の至りだと言つた。夫に對して、四人の琉球の高官は再び起上つて前に進み出て、前回の通りに腰を曲げたが、夫から後は何うした譯か、彼等がそはくし出したので、會見は次第に沈勝ちになつて來た。

### 十一 攝政邸の大饗宴

一時間許すると、攝政は起上つて、自分の宅にお出でを願ひたいと提督を招待した。夫は當方の望む所であつたので、早速行列を整へて攝政の邸宅に赴いた。攝政の邸宅は廣々としたもので、母屋の兩側には庭に突出した別室があつて、細い廊下で續いて居る。座敷には奇麗な壘を敷詰め、一見亞米利加の賓客の爲に萬事善

美を凝して用意して置いた事が判つた。座敷の真中に据ゑた四個の卓子には、兩側に三脚づゝ椅子を列べて、何れも結構な料理が載せてあつた。客が這入つて行くときと直ぐ席に請ぜられた。提督はブッカン艦長とアダムス參謀長と三人一處に右手の一番上の卓子に著き、攝政と其の連中とは向ひ合つた左の卓子を共同に占めた。卓子の隅には箸を置き、真中には琉球酒を入れた土焼の徳利一箇を据ゑて、其の周圍には檜の木、杯と粗末な支那焼の盃と、同じく支那焼の無作工な匙と茶碗とが各四箇宛に置いてあつた。又卓子毎に、形状や大小の異つた皿が二十餘列べてあつたが、吾々米國人には確と原料の判らぬ料理が多かつた。多分夫は豚肉であつたのだらうと思ふ。其の内て西洋人に善く知れたのは、紅て色を著けた鶏卵焼油で揚げた魚の團子、冷たい焼魚豚の肝臓の切肉、砂糖漬胡瓜、芥子、鹽漬大根、薄い豚肉の揚物などであつた。最初に茶が出て、其の後から直ぐ佛蘭西酒の味がする酒の小盃が廻された。續いて吸物が出た。夫には先の突つた竹の小箸が、椀の汁の中の肴や麩を挟むために

肉釵の代りに添へてあつたのを、楊子と思違をした人も寡くなかつた。御馳走は總て十二通て其の内吸物が七通迄あつて、夫が後から後と續いて出た。後の四通は若い莢豆と葱の白根を入れた餅の雜煮と、甘たるい餡を薄い麵の衣で丸く手際よく包んだ薄黒い一寸見ると果物か何かのやうに見えるのを藍に入れたのと、野菜と鶏卵を打混ぜて夫に香料で味をつけたなか／＼美味い料理などであつた。吾々訪問隊の紳士は、斯う云ふ珍妙の御馳走をば心から禮儀を守つて頂戴したのである。而して第十二通目の御馳走が濟むと、此の上猶十二通以上の御馳走が出るとの事であつたが、鄭寧に拶挨拶して退出した。

此の十二通の御馳走は高貴の饗應にのみ限られて居るのだから、之を見ても琉球人が如何に我が米國人を禮遇するに努めたかが判るのである。感心な事には、彼等は西歐文明の交際から遠く隔絶して居るにも係らず、祝盃を舉げて健康を祝すと云ふ作法なども善く吞込んで居るやうに思はれた。加之吸物と吸物との間は、斷えず盃を自由勝手に廻して、思ひ思ひに盃を傾け、少しも儀式張つた窮屈な所が

なかつたのである。吸物が出終つて、次の献立に移るらしい時を見計つて、提督は起立り、琉球の王母と王子の健康を祝し、併せて琉球人の幸福と、亞米利加人と常に親密ならん事とを祈ると言つて祝盃を舉げた。以上の意味が攝政に通譯されると、攝政は非常に満足の體で、琉球の禮法に従つて酒を注いだ小さい盃を一口に空けて伏せた。

やがて提督は又攝政と僚官の健康を祝した。攝政は、提督士官並に艦隊の健康を祝して之に應へた。此の時迄彼等は困つたらしい心配相な顔色をして居たが、今初めて夫が消え失せたのである。何う云ふ譯で彼等が這麼な顔色をして居たのか、我等には判然解らなかつたが、多分探偵に附纏はれて居て、彼等の一言一行が總て彼等の上に立つ者の處へ密告されるのを懸念して居たからであらう。然し饗宴は其の儘何の事なく取運ばれて、双方とも無上の交驩を盡して終を告げたのである。

## 十二 提督の満足

やがて提督の一行は暇乞して、前通りに隊伍を整へて歸途に就いた。日本の役人は町の入口迄見送つて來た。町を放れた處で、馬丁が小さい四匹の空馬を引いて隊後に續いた。若い士官達が夫を乗り試さうとしたが、殊に栗毛の小さい奴が、非常な元氣で、蹶つたり跳ねたり一寸も靜にして居ない。丸て癖馬のやうに後脚で飛上つては思ふ存分に荒れ廻つた。之が又神妙に行列の中に加つて穩順しく歩いて居るよりは、幾程可笑味を添へたか知れない。行列が坂の下に達いた時は、折しも正午近くであつたので、暑さが烈しく、太陽はぢり／＼と顔に照りつけた。坂の中腹に差懸ると、樹木は青々と繁つて、涼しい風が海から吹いて來た。港には短艇が旗を翻して靜に浮んで居る。陸の木蔭には後に残つた乗組員が其處にも此處に散在つて、行列の來るのを眺めながら、今日の會見の模様如何にと待つて居るのが見えた。彼等は米國の國旗に對して存分の敬意が琉球人から拂はれたと云ふ

事を聞かされて大悦びに喜んだ。而して一同今日の成功を喜びつゝ、何等の故障も變事もなく、軍艦に歸着したのは午後三時半であつた。斯うして重大な公式の宮城訪問も無事済んだが、此を決行する迄には、提督は何れ程苦心したか知れない。實に思慮に思慮を重ねた結果であつたのだ。一度訪問の決心を琉球人に表白した以上は何處迄も夫を遂行するのは最も策の得たものであると信じた提督は、自分の言葉を固く執つて一步も動かかなかつたが、其の精神的効果は直ぐ事實となつて現はれた譯である。這麼風に東洋人との交際には、或事を決行しやうとする時は、先づ其方法を十分考慮した上で定め置き、一度此と發表した以上は、容赦も猶豫もなく、自分が成すと言つた丈の事を必ず成すと云ふのが提督の遺口で、彼の成功の大部分は實に此の簡短なる消息に歸するのである。提督は東洋人に對して決して虚偽を用ゐないと共に、彼等をして又自分の決心は決して騙詐や術數で變更さるべきものでないと云ふ事を知らしめた。夫て彼等も提督の決心を侮るの事は甚だ危険であると氣が付いた次第である。要するに提督の外交の秘訣とも云

ふべきは何事も唯眞理で突通す換言すれば自分の言質を堅く守り誓約を正しく行ふと云ふにあつた。

宮城を訪問した時提督一行の注意を惹いたものは澤山あつたが、其の内最も著しく目立つたのは琉球人が極めて清潔好きな事で、提督も「こんな清潔な市街は未だ見た例がない」と言つた位である。夫に道路も善く、且つ奇麗であるし、料理は上手で甘く、上流社會の人々の温和で鄭重なのは洵に感心であつた。接待振の周到で、一々禮儀に適つて居る所は、假に眞意からしたのではないにせよ、實に巧者と云はざるを得ない。參城の際王太后が出て來なかつたのは物足らぬと云はゞ云ふものゝ、王太后の大病も實は虚構であつたのだと攝政から聞いて提督は非常に満足に思つた。王太后が病氣でなかつたとすれば、側付の女官達と一緒に襖の隙間から珍しい西洋人を覗いて見て、異様な様子に尠からず興味を起した事であらう。のみならず提督は、王太后へ立派な姿見に添へて、佛蘭西製の香水を献上し、其の外王子、攝政那覇の里主、其の他の高官達へも夫々贈物をした事であるから、此の度の

訪問をば長く記憶に留めて置くに違ない。提督は堅く夫を信じたのである。

### 十三 けしからぬ支那人

ペルリ提督が參城の際攝政に明言した所の暫時琉球を退去する目的は、實は琉球の東方に隣つて居る小笠原群島探検の爲であつたのだ。夫て那覇を出發する前に、内地探検の節も、參城の時も案内役に立つて大に骨を折つて呉れた老親雲上に謝禮するため、ジョンズ、テラー、ハイネ及び宣教師の四人は提督の指圖て用意された贈物に、自分達が廣東で買つた絹の半巾など迄添へたのを持って上陸し、宣教師ベトルハイムの宅で親雲上に會つて滞りなく件の品物を渡した。此の時も相變らず探偵に着け狙はれ、上陸すると灰色の服装をした五人の男が後を尾け、一人の警吏は先に立つて土民を道から追ひ立つるので、外國人が近づくと彼等ははつと飛び退くのであつた。殊に婦人を見られるのを非常に怖れる様子で姿を見せぬやうにして居たけれど、偶然した機會で見える事もあつたが、何れも呆れる程の



醜婦許であつた。

右のお禮の使と同時に、提督の命令で、コンテ・大尉とウキリアムス通譯とは琉球の出納掛の勘定座に掛合つて、米國軍艦が補給を仰いだ品物の代價を支拂ふため、米國製の綿布などの贈物を若干携へて上陸した。所が勘定座は琉球の今迄の慣例だと言つて、補給品の代價を受取る事を肯じなかつた。然し其處事は何うしても承知出来ない、米國軍艦では補給を受けた場合には、何れの國民に向つても常に支拂をして來たのだからと、彼等を説得し更に追求の結果、物品の總ての代價と、今日持つて來た贈物とを受取らしめた。這麽具合で、先づ第一に琉球在來の習慣を全く打破つたが、之が又重大な事で、斯うして物品に對する辨償を濟ました以上は、彼我的關係は全く對等で、外國人に恩惠を施したと云ふ理由で、威張つたり、勝手を振舞つたりする事は出来ない譯になつたのである。

愈々出發の準備が整つて、六月九日の朝、ペルリ提督はサスクハナに坐乗し、帆前船のサラトガを曳いて小笠原群島に向つて發航した。ミシシッピー、サブライの二艦

は其の儘那覇に残つて居た。提督は出發するに際して、後事をば高級士官のミシシッピー艦長レー・大佐に托して、琉球の官憲並に人民との交際は、出来るだけ寛大に親切にして、島民と大に親密な關係を開く事に努め、殊に温順な人の外は上陸させぬやうに注意して、切角出來掛つた和諧をつまらぬ出來事で傷はぬやうにと言ひ置いた。

航海は靜穩で何等の障害もなかつたが、サスクハナの艦上で哀な支那人の死人があつた。

初めウキリアムスが通譯として艦隊に乗込んで琉球に來る時、自分の先生であつた一人の年寄つた支那人を、何か役に立つだらうと云つて拉れて來た。此支那人は大の阿牙好きだが、當時夫を廢めるに懸つて居た最中であつたので、一つには其の爲、又一つには船酔の爲全然衰弱して了つて、薬も通らず、丸て昏醉の狀態に陥つて、見る目も傷ましい有様であつた。死ぬ前の一週間と云ふものは、實に悲惨なものであつた。體は骨と皮許の骸骨になつて、骨の節々が憂々と音を立てて、動き相

に思はれた。顔は黄色く丸て幽霊のやうで、頬は深く落込み、眼許ぎらくと物凄く光つて、精神は半ば狂つて居た。間もなく死んだが、這麼状態で幾日も續くよりは死んだ方が何れ程本人の爲にも、亦傍で見居る人々の爲にも、仕合であつたか知れない。其の翌日は提督迄列つて、立派な海葬式が行はれた。夫に怪しからぬは同じ軍艦に乗込んで居た支那人供である。彼等は自國の同胞がよしや知らぬ他人同志とは云へ條死にかゝつて居るのに一向何とも思はず、死ぬ一二日前に提督の使つて居た男が一人傍に寄つただけで、他の連中は見向きもしなかつた。臨終の晩には、二人の支那人の苦力が艦長の命令で餘儀なく病室に残つたが、彼等は一番遠くの隅に蹲つて居て、其の間に分隊長などは終始傍に付いて居て死水を取つてやつたにも係らず、終に一度も病人に近付かなかつたのである。提督は小笠原群島の探検を終はり此處に亞米利加殖民地を設定して六月二十三日の夕方那覇に歸港した。丁度ブリマウス號も來て居たので、軍艦の數は之で都合五隻になつた譯である。

#### 十四 新攝政の就職

那覇に歸つて見ると、前攝政は何時の間にか廢められて、新攝政が就職して居た。何う云ふ譯で前攝政が黜けられたのか、確然した處は判らぬが、我が米國軍艦の那覇滞在に幾分か關連して居る事は疑ふ餘地がない。多分提督の一行を首里の宮城に引き入れたに起因したのであらう。素より我等の思ひ懸けぬ事ではあるが、老攝政が廢められるやうになつた間接の原因が我等にあるかと思ふと、實に氣の毒に堪へなかつた。夫にしても、嘗つて英國軍艦スフィンクス號の士官が宮殿に闖入した場合には何事もなかつたのに、今度は何う云ふ譯で攝政が廢めやられると云ふやうな重大な結果を惹起したのであらう。最初老攝政が切腹を仰せつけられたと云ふ噂を専ら聞いたが、幸其の事もなかつたと見えて、其の後サスクハナの士官が彼を首里の邸宅で見懸けた事がある。夫て一安心と思つて居ると、今度は宣教師のベトルハイムが、前攝政は多分家族と共

に島流しになるだらうと言ふのであつた。而して宣教師は一寸も氣の毒と思はぬ様子であつた。

提督は改めて、新攝政と勘定座の長官以下を、六月二十八日に旗艦サスクハナに招待した。處が夫は心好く承諾せらるゝし、且つ新攝政は尙宏勳と云ふ名前で、前攝政尙惇の一族で、年も餘程若く、夫に前攝政よりは一層鄭重で、用意が行き届く所などから推して見ると、何うも老攝政貶黜の評番は疑はしくなつて來た。其處で提督は、是は老攝政が職を貶されたのではなくて、自分から進んで壯者の爲に辭職したのであらうと信ずるに至つた。

饗宴の當日は、三艘の短艇を泊の入江に遣はして、琉球の賓客を迎へさせた。客を乗せた三艘の短艇が軍艦に著くと、琉球人は例の赤色の手紙を差出した上で、立派な芭蕉布の盛装に派手な色の冠を被つて、續々と軍艦に上り始めた。ブツカナン艦長は之を舷門に出迎へて、夫から艦内を所々案内した。其の間水兵は武装して甲板に整列し、樂隊は歓迎の曲を奏した。

やがて饗宴の知せがあると、彼等は提督の船室に導かれて直ぐ食卓に著いた。饗宴は純西洋風で、提督は食卓の中央に席を占め、提督の右には新攝政左に勘定座の長官が並び、那覇の里主と他の一人の勘定座の役人とは、艦長達に伴はれて食卓の端に列つた。ウキリアムスとベトルハイム博士とは賓客兼通譯として出席した。旅行家のテラー、和蘭語通譯のポイトマン、美術家のハイネ及びメツサース、ペルリ諸氏は小さな卓子を圍んで居た。新攝政の隨行員は一人も食卓に列する事は出来ず、通事の板良敷も攝政の後に立つて御伴をして居た。

新攝政は見た所四十五六の小柄の男で、顔の色は誰よりも一番黒く、夫に左の眼が少し藪睨であつた。彼は非常に眞面目で、無口で、斷えず新しい自分の地位を氣に懸けて居るやうに時々穩かならぬ不安の色を顔に現はすのであつた。而して特に話を仕掛けられた外は一切口を噤んで居た。然し攝政が出席者中誰よりも一番落付いて居なかつた事は一見明かであつた。之は恐らく、一つには彼が新しい職に就いた許で未だ夫に慣れないのと、二つには米國の宴會の作法に合はぬやう

な失態をしはせぬかと、夫を氣遣つて競々して居た所爲であらう。夫とも亦彼は自分が日本の間喋に附け廻はされて居る事を承知して居るから、今日の米國軍艦の訪問から縁因して、面白くない政治上の結果が起りはせぬかと怖れた所爲かも知れない。

六〇

## 十五 サスクハナ艦の饗宴

食卓には小刀と肉叉とが米國流に客の前に配られた。小刀は琉球人に奇怪に見えた様子であつたが、肉叉は箸代りに機用に使ふのであつた。此の日の献立は非常に念を入れた物で、鯛魚のスープ、鵝鳥と山羊とのカレー、其他幾通も甘味、御馳走が並べられた。那覇の里主と勘定座とはスープを喜んで味つた。宴席に當つた船室はかなり蒸し暑い處へ、琉球の來賓は餘り眞面目に構へて居たから一層暑かつたであらう。宴會の進むに従つて彼等は終に凌げなくなつたと見え冠を取つても差支ないかと尋ねた。差支ないと答へると、夫では御免を蒙り

ますと言つて冠を取つた。すると各自のお供が後に立つて、主人の裸頭を猛烈に扇ぎ立てた。

提督は先日前攝政の邸で御馳走になつた酒の返禮に、今日は各國の名酒を振舞はんとて、佛蘭西酒や獨逸酒、スコットランドのウキスキーや、亞米利加のウキスキー、夫からマデイラ、夫から波蘭土のジンに強い芳醇しいマラキノを混ぜた無類味の佳い酒などを持出した。琉球人は舌鼓を打ちながら、透き徹るやうなシェリーの美酒を眼を細くして、ちびり／＼と嘗摩つて、節制も何にもかも直ぐ忘れ果て、了つたやうな有様であつた。斯うして陶然としてお目出度なつて居る間に、例の卓子に坐つて居たハイネは今日の全體の模様を寫し、ポートマンは攝政の肖像を畫き撮つたのである。

琉球の賓客は喜んで食事をした後、煙草を吸はして貰ひたいと求めた。勿論夫には否應なかつた。勘定座の長官は續け様に二三服吸つてから、縫箔のした煙草入を煙管に添へて提督に勧めた。すると里主も勘定座の役人も之に倣つて各自

のをアダムス大佐とブッカン艦長とに渡した。今日の御馳走の内、用意の牡蠣や、國を出るとき貯へた品物などは大にお客の口に適つたらしく、幾程でも際限なく召し上るので、實際お腹の底の判らぬやうな方もあつた。殊に小笠原島から持つて来た、瓜やバナナには全然心を動かして、了つて、妻の土産にしたいが少し頂けませんかと乞求つた。遠慮なくと言はれると、彼等は上衣のだぶ／＼した内懐を袋代にして這入るだけ夫を詰込んだのである。酒宴も此處迄来ると、遠慮も氣兼ねも全然融けて無くなつて了つて、欲のない、満足な泰平の相が、莞爾と喜ぶ那覇の老里主の照照する顔の中に鎮座して居た。老耄れた二人の勘定座の役人の皺だらけの顔も、眞赤に赤らんで、皺が伸びて見えた。唯攝政一人は相變らず黙然と構へて、心配氣な容子を續けて居た。畢竟飲んだ酒も餘り四角振つて居るので、利目がなかつたのである。這麼風に攝政は始終むづかしい顔許して居たが、唯一度提督は亞米利加産の草花と野菜の種とを贈つた時、親しげな温しい顔を見せて、種を蒔いて、大事に世話して

見ようと約した。夫から又提督が前回上陸の節贈つた牛と水牛とも善く飼育して種を取らうと約した。

饗宴の間は樂隊が甲板で斷えず奏樂を續けて居たが、酒宴が終りに近づいた時提督は一番上手な樂師を三四人撰び出して獨奏をさせた。攝政は夫に耳を傾けて聽いて居たが、里主と勘定座の役人とは御馳走の残物を切つたり食べたりするのに忙しくて、美妙的な音樂に耳を借す暇がなかつた。間もなく珈琲が亞米利加の茶と云つて出されたが、彼等は口の所へ持つて行つただけで下に置いて、又煙草に取りかゝつた。

御供の者も決して粗略にされなかつた。彼等は主人同様に十分飲んだり食べたりしたのである。やがて宴が閉ぢられ、容は三發の禮砲の下に軍艦を辭して、泊の海岸に送り届けられた。サスクハナ艦の饗宴は這麼具合で終つたのである。

### 第三編 浦賀の巻 上

#### 一 相模の岬に達いた

愈々七月二日の早朝、ペルリ提督は、サブライ號を後に残し置き、カブリス號は警備の爲上海に派遣し、サスクハナ、ミシシッピーと云ふ二隻の蒸汽船と、ブリマウス、サラトガと云ふ二隻の帆前船と、都合四隻から成る小艦隊、所謂黒船艦隊を率ゐて琉球那覇を出發した。最初國を出る時は、十二隻の堂をたる大艦隊を以て日本を訪問する計劃で、追加艦隊は後から来る手筈になつてあつたので、其の到着を今日か明日かと待受けて、思はず時日を延ばして居たが、一隻も到着しない許か、何時來ると云ふ當もなかつたので、提督は斷然此の小艦隊で出立す事に決心した。然し提督の心中には、異常の事變がない限り、日本訪問の大目的を遂げるに、これに充分其の必要に應じて餘りあると云ふ確信があつたのである。夫て旗艦サスクハナはサ

ラトガを、ミシシッピーはブリマウスを曳いて揚々として浦賀を指して航海し、七月七日の夕方には、伊豆の岬から四十哩の所まで進んだ。夜半から翌朝の四時迄は、斷えず艦首を陸地より轉けて進行した。霧が深く立罩めたので、僅に峻しい海岸の輪廓が判然見えるだけで、其他何物も判らなかつたが、天氣は好く、海上高く聳え立つた伊豆の岬が、打ち重つた山をなして遠く内地に連亘して居るのが霧の間に見えた。

八日の朝は、日本氣候の特長とも見えて、霧が非常に濃厚であつたので、眼界を極限され、浦賀に投錨する迄、沿岸の陸影を終に見る事が出来なかつた。風があるにも係らず、蒸汽船は總て帆を捲き上げて、八哩乃至九哩の速力で波を蹴立てて進んで行つた。すると之を見た、海岸近くに群つて居た漁船や、相模の灣口に散在して居た數多の漁士は、皆船の上に突立ち上つて、今迄見た例のない蒸汽船に吃驚して膽を潰した様子であつた。

時間が經つに従つて霧も次第に薄れ、やがて太陽も現はれて來て、其處や此處に見

える漁船の大きな帆に赫々と輝き出した。伊豆の岬は遠く後退いて、其の高い頂  
点や峻しい側面が、折々霧の間に見え隠れした。艦隊は相模灣の口を真直に横切  
り、大島を右舷に望んで、相模の岬に向つて進んだ。時々霧が切れるので、其の合間  
々々に大富士の姿を灣の奥の方に見る事が出来た。遙か遠くの空に驚く許高く  
聳え立つた其の圓錐形の頂には、白い帽子を被いて居たが、雪か雲か何れとも見分  
けが付かなかつた。

初め艦隊が相模灣に這入つて行くと、日本の船は皆用心して遠ざかつて居たが、遂  
々一艘の船に追付いた。すると船の人々は非常に周章狼狽して、急いで帆を引卸  
し、艦隊を避けようと、必死に櫓を漕ぎ立て、逃げるのであつた。

艦隊が相模の岬に近くと、提督は信號旗をサスクハナの、橋頭高く掲げた。之に應  
じて各艦は立所に甲板を取り片付け、大砲に彈丸を込め、軍器を整へ、武器を要意し、  
信號兵其の他各其の部處に就いて、敵に對する時の準備は全然出来たのである。  
而して正午に垂んとする頃、旗艦は相模の岬に達した。續いて艦隊も十分許て來

たから、提督は再び信號旗を掲げて、艦長を旗艦に召集し、夫々命令を與へた。夫が  
濟むと、艦隊は再び進行を始めだが、直ぐ相模の海峡に這入つた。やがて軍艦が陸  
地から二哩位の處迄近づくと、十餘艘より成る大きな日本船の一隊が軍艦に向つ  
て突進して來た。確に艦隊訪問の目的である事は判つて居たが、夫には頓着せず  
進行を續けたので、彼等は見ると後に残されて了つた。蒸汽船が風に向つてづ  
ん／＼進んで行く速力の早いには、彼等は大に困つたらしかつた。其の船には  
大勢乗込んで居たが、武装はして居ない様であつた。然し船毎に文字を記した大  
きな旗を建てて居る所を見ると、何か政府の船らしく思はれた。其の内に海岸を  
漕ぎ廻る船が次第に殖えて、時には、船の構造や船具などが判然と判る處迄近寄つ  
て來るのもあつた。

二 七月八日の午後五時

相模の岬を通過して江戸灣の口に這入ると、峻しい崖を成した海岸は、内地に向つ

て波の様な青々した丘陵をなして次第に伸び上つて居る。入江の水は樹木に彩られた青い岸を洗つて、其處には幾多の村落が見えた。道に江戸灣の入口は十分に防備を設けた様子で、相模の側の山や崎は怖ろしい程堡壘で堅めてあつたが、外國軍艦が闖入して來たにも係らず、大砲は悉く沈黙して居た。之と向合つた安房の海岸は、遠く東の海上に繪のやうな巔を連ねて灣口を扼して居るが、明かに砲臺の設備はしてなかつた。艦隊が此の海峡を過ぎて浦賀の沖深く進んで行くと、無数の漁船は大急に遠退いて、此處で安全だと思ふ處迄逃げ行くと、櫓の手を休めて、尋常ならぬ氣色で軍艦を打囀つて居るのであつた。やがて艦隊は浦賀に投錨したが、其の少し前から終日立單めた濃霧が丁度晴れ上つて、美しい富士山は、周圍の群山の上に、一段高く、判然と見え出した。先頭に立つた軍艦は斷えず鉛錘を下して水深を測量しながら、速力を緩めて浦賀の岬を廻り、他の軍艦も之に随つて、十分に警戒を加へつゝ、徐行を續け、浦賀の町から殆ど一哩、砲臺から半哩の近く迄進んだ。其の時、爆然と二發の大砲が砲臺から放たれた。

一團の煙は晴れたる空に高く懸りて、夫は狼煙を擧げたのであつた。同時に投錨の命令は直ちに下つたが、其の邊は猶二十五尋の水深があるので、蒸汽船は猶少し海岸近く進み、かくて一八五三年七月日(嘉永六年)の午後五時頃四隻の軍艦は舳艫を並べて、浦賀の町と相對して錨を卸した。去年の暮、ノークフォークの鎮守府を始めて解纜してから、丁度二百二十六日目である。艦隊が未だ投錨せぬ内、日本の警護船の一群が陸を放れて、艦隊目懸けて追懸けて來るのを見た。提督は早速信號を以て、軍艦にも、短艇にも、決して彼等に乗せてはならぬと命令した。而して旗艦に限りて、用件を帯びた者の上艦を許すが、夫も一度に三人を超えてはならぬと命令を下したのである。所が今迄の外國船は、日本人が來ると、一々甲板に上げて待遇するのが其の常例であつて、嘗つてコロンブス號が江戸灣に乗込んだ時などは、二三百の大勢が一時にどやどやと船に上つて來て、何の遠慮も會釋もなく、船員達の款待を享けて、呑氣に愉快らしく構へて居たが、偕て彼等を還す段になると、口眞似や手眞似で以て、何うしても陸に歸る事は出來



ぬと言つて、船を下りなくて非常に困つた事がある。提督は之を知つて居たので、堅く一般の日本人の乗船を拒絶し、唯役人に限りて、旗艦のサスクハナに直接来て交渉するのを許さうと兼ねて決心して居たのである。こんな具合で、軍艦の側に漕ぎ寄せて來ても、上艦を許されなくて、随分不満らしい様子を現はす者もあつたが、夫には容赦なく、提督の命令は堅く勵行されたのである。

### 三 黒い體を丸出し

艦隊が錨を卸して居ると、又一發海岸の砲臺の一つから放たれた。間もなく艦隊は砲門を砲臺の全面と浦賀の町とに向けて、一列に碇泊を終つた。其の時日本の警護船が四方から澤山出て來た。何れも艦隊を監視する目的と見えて、食料、飲水、夜具、其の他長い間の滞在に差支ないやうな用意を整へて居た。而して彼等はサラトガ號に横付けにして上艦しやうと懸つたが、遠慮なく突返された。夫にも懲りず、鎖に縋つて昇らうとするので、終には槍や刃物拳銃などで威しつけて、漸く彼

等を喰ひ止めて居たが、彼等もやかでは、我が水兵や士官が實際眞面目なのを見て、軍艦に上る事は断念した。

一艘の船には、大抵三十人餘づゝ乗込んで居て、何れも丈の高い、骨格の逞しい男が、腰の邊を除く外は、黄黒い體を丸出してあつたが、夜になると、彼等は各自、赤地や青地に白い縦縞の袖のある寛濶な着物を思ひ思ひに着た。而して背の眞中には、黒や其の他の色で、紋所や標などが描いてあつた。多數は何物も被らず、頭髮は頂邊の兩側を長く伸ばして、煉油めく物で塗り堅め、腦天の禿げた所を結んであつた。彼等の中には、浅い鉢を反らしたやうな形の竹細工の笠を被つた者が、二三人立交つて居た。或る小船の中には、長い棒の先端に十字形を着いた槍を携へて居る者もあつたが、之は軍事掛の役人の標らしかつた。又上官と見ゆる人達は、輕さうな漆塗の笠の眞正面に紋所を描いた陣笠を被つて居たが、此等の紋所は多分其の人の階級地位などを示すのであらうと思はれた。彼等が櫓を漕ぐ事の巧みなのは、實に驚く許で、従つて船の速力も非常に速く、高い

聲で櫓調子を取りつゝ漕いで來るかと思ふと、直ぐ傍へ漕ぎ寄せるのであつた。船毎に、一本の黒條を真中にして其の兩側に白條を縦に二筋引いた小旗を艦に建て、居たが中には色々の標の付いた旗を並べて建てた船も餘程あつた。又船の中に刀を二本脇に差した人が二三人立つて居るのを見懸けたが、之は確に地位の高い職權の重い人達であつたのだ。

#### 四 決して長崎へは行かぬ

其の内小舟が一艘旗艦の側に近づいて來た。舟の中には一人手紙を持つたのが居て、上艦を求めたけれど、サスクハナの士官は之を拒絶した。所が其の手紙が佛蘭西文で書いてある事が知れたものだから、試みにミシシッピーの艦側で讀み上げさせて見ると、軍艦が此處に碇泊して居るのは危険だから早く退出せよと云ふ指圖であつた。直ぐ又大官と見える役人がサスクハナの艦側に來て、艦梯を卸すよらにと合圖したが、是も亦拒絶した。其の時提督は、支那語の通譯ウキリアムスと和

蘭語の通譯ポートマンとに命じて、提督は最高の役人の外は誰にも會はないのだから陸へお歸りなさるが善いと支那語と和蘭語とで彼に言はした。すると同じ舟に乗つて居た一人の男が、私は和蘭語が話せますと英語ですら〜と言つた。其處でポートマンは其の男に英語で話を始めると、今言つた一語だけで種が盡きたらしく、英語は夫きりであつた。然し和蘭語は全く得意と見えて、非常に早口調で訊き立てるので、大方は返事が出來なかつた。彼が此の軍艦は亞米利加から來たのぢやありませんかと尋ねた所を見ると、我が艦隊の來航は早くから判つて居たらしい。彼は執拗く上艦を迫つたが其の度毎に拒絶され、夫と同時に此の艦隊の司令官は合衆國で最高の官位の人であるから、夫に比敵する重路の高位顯官の人の外は浦賀に於て協議する事が出來ないと告げられた。すると彼は傍の一人の役人を指して、此の人が浦賀奉行の支配組與力で、地位も此處で一番高いのだから、これこそ申分ない相當の人であると述べ立てた。何故奉行自身出て來ないかと訊くと、國法に嚴禁してあるので奉行は碇泊中の外國船に來る事が出來ない

のだと答へて、彼は更に兎に角與力に相當する人を選んで與力と協議をさせて貰ひたいと申出した。彼が斯う申出して來たのは、畢竟亞米利加人に會つて、何の目的で艦隊が來たのかを探知して之を江戸の政府に報告したい爲であつたのだ。提督は殊更回答を引張つて置いて暫くしてから此の要求に同意して、副官のコンテ・大尉を應對員に擧げた。次いで舷梯が卸され、浦賀奉行の支配組與力中島三郎助は和蘭通詞の堀達之助を連れて甲板に上つて來た。而して二人は艦長室に導かれた。此處で事實上提督と與力との間に協議が開かれたのであるが、提督は故意と船室に閉籠つて居て、副官の手を通じて日本人と商議したのである。コンテ・大尉は提督の指圖に従つて、ペルリ提督は和親修交の使命を帯びて、亞米利加合衆國から日本に派遣された者で、大統領より日本皇帝に當てた國書を携へて居る。交付の期日は何れ提督から正式に指定さるゝ筈であるが、差當り其の騰本を受取りに相當な役人を軍艦に差遣されたいと云ふ旨を與力に通じた。すると與力は、日本の國法では外交の事は一切長崎で取扱ふ事になつて居るから、左様云ふ

譯なら長崎にお出でになつたが宜しいとの挨拶であつた。コンテ・大尉は夫に對して、提督が浦賀に來たのは浦賀が江戸に近い爲、殊更選んで來たのであるから、提督は決して長崎へは行かぬ、而して國書は相當の禮を以て現在の場處で受けらる事並に提督の素志は全々和親にあるが、苟且にも侮辱に渡る如き事あらば、一點の假借を許さぬと云ふ事を附け加へて答へた。夫と同時に日本政府の警護船が此の様に軍艦を取巻いて居る事は容赦出來ぬ、若し早速退散せぬならば、提督は武力を以て彼等を解散するであらうと言明した。此が與力に通譯されると、彼は急に席を起つて舷門に行つて何か命令をした。すると今迄取巻いて居た船は大方岸に歸つて行つたが、猶幾程か塊つて残つて居るので、軍艦から武装した一艘の短艇を出して一つには武器を觀せ、二つには威風で彼等を威し還さうとした。所が之が思つた通りの結果を現はして、警護船は悉皆影を潜めて了つて、其の後とも軍艦碇泊中は、一艘も軍艦の近邊に寄つて來なかつた。夫て提督は之をば先づ第一に贏ち得た重大な點であると稱して居た。

間もなく與力中島三郎助は別を告げたが、其の時彼は自分は大統領の手紙を受取る事に關しては何等の資格もなく、従つて何事も約する事は出来ないが、明朝自分より地位の高い役人が来るから、委細は其の人から挨拶せらるるであらうと言つて歸つた。

## 五 全く戦時の光景

提督は日本に来る前から、日本政府に對しては決然たる態度を執り、爲すだけの事は必ず何處までも仕遂げようと決心して居た。之が提督の策略で、提督は自分の委任せられた花々しい使命を甘く果すには、之が最上の方法であると信じたのである。其處で提督は今日迄自分と同じ目的を以て日本を訪問した他國の人々とは全く反對の徑路を採らう、詳しく言へば今迄は何うか和親修交を開いて貰ひたいと此地から日本人に折り入つて頼んだが、自分は之を權利として要求しやう、又前の人々は随分日本人に我儘勝手をされて困つて居たが、是から先は其處事は少

しも許容せず、苟且にも亞米利加國旗の威嚴と衝突すると思はれるやうな行動並に強迫や威嚇がましい振舞があつたら、容赦すまいと腹を定めて居た。而して兵力の上陸否やは事件の成行次第で決定する事になつて居た。勿論兵力の上陸は取るべき最後の手段であつて、又最後ならん事を望んだのである。然し提督は萬一の場合に備ふる爲艦隊は何時たりとも行動が出来るように準備を整へ、士卒は各部處に就くなど全く戦時と同様であつた。其の後日本政府の警護船は軍艦の周圍に近寄らなかつたが、矢張遠くの方にあつて、艦隊の行動を監視して居た。正午から日暮迄の間に、向ひの陸で狼火が三四本上つたが、何かの合圖らしかつた。夜になると陸上の恐怖は又一層で、山々の上は云ふに及ばず、海岸は眼の達く限り一帯に篝火を焼いて、終夜大きな半鐘の鳴り渡るのが甲板の上で善く聞えた。最初は寺の鐘かと思はれたが、矢張警鐘か何かの合圖であつたのだ。陸上は這麼騒動にも係らず、海上は静寂として丸て湖の如く、夜の沈靜を破るやうな事は何にも起らなかつた。其の内旗艦の六十四封度砲が

九時の號砲を放つと、夫が轟然と兩側の山岳に轟き渡つた。すると陸上では又もや騒動を惹起したと見えて、篝火は見る間に悉く消されて了つた。と言つて別に衝突が起るとも思はれなかつたが、艦上は全く戦時の光景で、歩哨は立つ、大砲の筒元には砲弾を積み重ね、後甲板には小銃を配置し、その他短艇、小銃拳銃、刀などの軍用品が手落ちなく用意されてあつた。

此の晩思ひがけずも珍しい慧星が夜半から朝の四時迄の間に見えた。最初南西の空に地平線上十五度許の所に現はれた。すると空一杯眞光になつて、軍艦の檣や帆や、甲板や、胴は恰かも軍艦から一時に青光が燃え立つたやうに燦爛と照反した。慧星は一直線に道を東北に取つて、やがて海に落ちて影を匿して了つた。其の形状は、赤い楔形の尾を引いた大きな青い火玉のやうなもので、尾は花火のやうに燃えて居た。其の時提督は

「昔の人は此の珍らしい天上の現象をば、自分の事業の成功する瑞祥だと観じたといふが我々は之を以て、我々の現在の目的が血を流さずに成功して、隱物同様の孤

獨な一國民を文明國民の仲間に入れられる事が出来る前兆だと思はれる」と言つたのである。

## 六 七月九日

翌九日(四月)の朝日が昇ると、夜中海上を包んで居た濃霧は次第次第に晴れて來たが、彼方此方の陸には柔毛のやうな霧が掛つて居て何とも云へぬ美しい景色を呈した。港灣を見下す地點には、其處にも此處にも砲臺が見えるけれど、望遠鏡で觀ると、未だすつかり完成しないのも、工事最中のも、變更中のもあつた。又口径の小さい大砲を運んで居る所も、大砲の一つも据ゑ付けてない所もあつた。砲臺には胸壁の前面にも内部にも、又海岸には一帯に白條や黒條の這入つた八九丈の幔を引廻はしてあつた。何の爲這麼眞似をしたのか、多分虚勢を張る目論であつたのだらうが、笑止や、日本人は望遠鏡や、佛蘭西双眼鏡で全然手に取るやうに觀られて居るとは露思ひも寄らなかつたのである。猶も望遠鏡で眺めると、眼の覺めるや

うな緋の武装をした兵士が陣屋から陣屋へ行くのが見える。其の内には區々の標の付いた旗や、長い棒の先に大きな提灯を付けたのを持つたのも混つて居た。岸には軍艦が初め這入つた時取圍んだ警護船と同じ種類の船が一杯に列んで居て驚く許の盛観であつた。町の人家と警護船との間の海岸には赤い旗が二本建

て、あつた。船は町の歩哨に立つたのらしい。九日の朝日の出が、りに初めて小舟が一艘陸から旗艦サスクハナに近付いて来た。舟の中には疑ひもなく一組の畫工が乗込んで居て軍艦の直ぐ側迄漕ぎ寄せて来たが、別に上艦しやうとはせず、忙しく軍艦の模様を寫し取つた。朝の七時になると、二艘の大船が軍艦に來た。其の内の一艘には役人が六人乗込んで居て、和蘭語の通譯が町の最高級の役人が來たのだから上艦させて貰ひたいと通じた。所が前日與力の中島が奉行は國法に禁じてあるのて外國船に來る事は出來ぬと言つた言葉とは明かに予盾して、浦賀奉行の香山榮左衛門が來たのである(時ノ註、當賀奉行ハ戸田伊豆守、其ノ下ノ支配組頭ハ黒川嘉兵衛ニシテ、中島三郎助、香山榮左衛門等ハ支配組與力ナリ、原本ニハ中島三郎助ヲ浦賀副奉行、香山榮左衛門ヲ浦賀

奉行トアリ、榮左衛門ヲ奉行ト思ヒナルベシ。)提督は國の大官にあらずば會見せぬ以下奉行トアルハ與力榮左衛門ノ事ナリ。と云ふ彼の政略通りに、艦長のブッカナン、參謀長のアダムス、副官のコンターの三人に命じて奉行と會見せしめた。奉行は金糸や銀糸で縫箔の模様をとつた孔雀の羽根のやうに立派な絹布の装束を着けて居た。前述の三人は鄭重に奉行を迎へて直ちに協議を始めた。提督は相變らず引込んで居たが實は提督と奉行との協議であつたのだ。其の時奉行は日本の國法として大統領の國書を浦賀で受取る事は出來ぬ假りに浦賀で受取つたにせよ、其の返答は長崎へ廻送せらるゝ次第であると繰返して説き立てた後で「左様云ふ譯だから艦隊は長崎に赴くより外はない」と附足した。此に對して三人の者は、提督は決して其座相談に同意して長崎へ赴くやうな事はしない。而して國書は現在の場處で渡す覺悟である。若し日本政府にして、大統領から日本皇帝に宛てられた國書を受取る爲に相當の委員を選定する様子がなかつたら夫を奉呈する任務を帯びて來た提督は、餘儀なく十分の兵力を率ゐて上陸し、自から之を奉呈する迄であ

ると奉行に答へた。すると奉行は是から町へ歸つて、早速江戸に使を立て、此の上の指圖を仰ぐから四日間待つて貰ひたいと言つた。一時間懸れば軍艦は江戸の見える所迄行ける位の近い所て使の往復に時間のかゝる譯でもないから、夫ては三日だけ猶豫するから、其の時には必ず確答を待つと奉行に答へたのである。奉行は各艦から一艘づゝ出した短艇が浦賀の港灣を測量して居るのを視て、あれは何をして居るのだと尋ねた。海を測量して居るのだと答へると、榮左衛門は其廢事は日本の國法に違反して居るから許されぬと言つた。夫に對して榮左衛門は、亞米利加の國法は彼等に測量を命じたのだから、日本人が日本の國法に従はなければならぬと同様に、亞米利加人は亞米利加の國法に従はなければならぬのだと云ふ返答を受けた。提督は是を第二に贏ち得た重大な點であると稱したのである。

右の會見の間に兼ねて華盛頓で用意して來た大統領の親書と、ペルリ提督の信任状とを藏めた立派な籠を示すと、奉行は其の立派さと貴重なとに疑ひもなく感服

して了つた。而して此の時初めて奉行は飲水糧食の用達を申し出てたが、別に何も要る物はないと答へられた。夫と共に日本政府から、國書受取の期日に就いて確答のある十二日迄は、何事も此の上協議の必要はないと云ふ旨を奉行に告げた。榮左工門は其の意を諒し、大いに感動の體で艦を辭して歸つた。

### 七 測量隊

九日の午前各艦から一艘づゝ出した測量隊は、何れも十分に人も乗込み、武備も備へて居たが、着弾外に行かぬやうに堅く命令されてあつた。其の上萬一攻撃を受けた場合に援助を送る爲見張が附けて置かれた。短艇は悉く普通の短艇旗の外に平利の意味を現はす白旗を舳に建て、對岸に向つて、各自の路を取つて廣がつて行つた。而して軍艦の碇泊地點から二哩許進んだ時、合圖の大砲で召還された。歸ると、又西の海岸に遣された。測量を終はりて皆歸艦したのは午後の三時であつた。

短艇が海岸に近寄ると、砲臺は手に取る如く善く見えだが、大して怖るべき程の物はなく、其の構造は堅固らしくも、手が懸つて居るやうにも思はれなかつた。其の上位置や軍器など迄丸出しに露はれて居るので、雑作なく攻撃が出来し、胸壁と云つても土俵で造つただけであつた。建物、兵營、倉庫などは皆木造らしく、夫に口径の小さい大砲が二三門備へてあるだけで、然かも砲眼が圖授けて大きい爲、砲身が丸て剃ぎ出してあつた。初めて測量船が夫に近づくと、武装て身を堅めた兵士が非常な権幕を示し、手に手に槍や火繩銃を持つて、威猛高になつて砲臺から現はれて來た。大陽の光が彼等の漆塗の陣笠と楯とに閃々と輝いて、可恐しい勢であつたが、別段斷乎たる抵抗をするやうに指圖されなかつたと見えて、短艇が陸に近づくと砲臺の内に引込んで了つた。或る短艇を指揮した一人の士官は、海岸から五十間位の所迄近付いた。而して上官らしい男が三人砲臺の上に立つて居るのを認め、たので、望遠鏡を向けて彼等を觀た。すると彼等は見る間に姿を隠して了つた。之は多分彼等が望遠鏡をば、何か異體の判らぬ武器と心得、たゞ片眼で視る許

ではなく、何か一層恐ろしい物が飛出す仕掛になつて居るのだらうと思つて、非常に氣味が悪かつた所爲であらう。其の時海岸に列んで居た警護船の日本兵が、我々の士官に歸れ歸れと手眞似をした。士官が矢張手眞似で自分の行く方向を示すと、彼等は直ぐ様岸を放れて、恰かも短艇を襲ふものゝ如く急に近付いたので、士官は直に一同に命令を下し、櫓を休めて小銃の標準を立てさせた。然し直ぐ様襲ひかゝる様子もなく、唯後から幾艘も追跡して來たが、我々が十分に武装して居るのを見たので、敢へて邪魔をしようともしなかつた。

## 八 十日と十一日

十日(六日)は日曜で、例の如く艦上で祈禱式があつた。而して日本官憲との交渉は何にもなかつた。所が此の日の日本の小舟が一艘横條の入つた旗を建て、軍艦に來た。此の旗は身分の高い人の標で、舟の中には日除の下に二三人腰を掛けて靜かに扇を使つて居た。確に格段な人物と見えて、何れも顔付の聰明な、禮儀の極め



て正しい人達であつた。彼等は艦側に舟を寄せて、伴の通譯を通じて上艦を求めた。其處で何か提督に用事があつて来たのかと尋ねると、彼等は何にも用事は無いが、たゞ少しお話ししたい事があるから是非ともと言つて懇願した。然し提督の命令で會ふ事は出来ないと叮嚀に断られたのである。

其の間陸では防備に忙しく、砲臺の近所には閃閃する楯や、長い槍を持つた兵隊が蠢々と動いて、縞の布で繕へた偽砲壘を運んで居るのもあれば、大砲を艦隊に向け居るのも見えた。夜になると再び篝火が點いた。前夜よりは幾程か寡いやうだが、重苦しい半鐘の音は相變らず夜明け迄鳴り響いた。陸では此のやうな騒にも關はず、艦上は極めて靜穩で、此の上なき平和な安息日であつた。

十一日(六日)の早朝、一隊の測量船が江戸灣の奥深く派遣され、蒸汽船「ミシシッピ」は其の護衛の任に當つた。提督が測量隊と共に「ミシシッピ」を遣はしたのは、單に護衛の爲許ではなく、斯う云ふ有力な軍艦が江戸に近寄つたならば、たゞ近寄つたゞけても日本官憲が吃驚して、自分の要求に都合の善い挨拶をするやうになる

だらうと豫期したからである。浦賀奉行は「ミシシッピ」が江戸灣を奥深く進航して行くのを見て、早速軍艦に訪ねて来た。其の時奉行は自分が今日訪問したのは明日國書(騰本)を意味したのであらうが受取られて江戸に廻される都合になつたから、たゞ夫れだけの事を知らせに來たのだと假托して居たが、其の實、「ミシシッピ」と測量船が江戸灣を上つて行くのは何の爲であるかを確めに來た事は隠れもなかつたので、やがて本音を出して其の譯を尋ね出した。提督は其の心中を看破したので、自分が艦隊を率ゐて江戸灣に來航した其の用件が、今回の訪問中に纏らなければ、己むを得ず來春再び大艦隊を率ゐて來るが、其の時は浦賀は碇泊地として不便で、其の上不安全であるから、成るだけ江戸に近い所て江戸の政府と交渉に便利な適當な地點を撰ぶ事にすると云ふ旨を、部下の士官から奉行に通じさせた。測量隊は前回通りに各艦から短艇を一艘づゝ出して組織し、ペント中尉が指揮官であつた。而して提督の命令に従つて、艦隊からの信號距離を保ち、日本人との衝突を避けつゝ、出來るだけ江戸灣を溯つて行つた。すると陸上では之を觀て、急に

非常な活氣を呈し、千餘の大勢が續々と東海岸に繰出して來て船に乘込み、直ぐ測量隊の後を追駈けた。續いて各所の砲臺でも盛に軍勢が運動を始めたが、一つは對抗の準備と、一つは虚勢を張る爲であつたらしい。

測量隊は艦隊の碇泊地には十哩乃至十二哩の所迄江戸灣を溯つた。短艇が灣を上つて進んで行くと、一隊の警護船が我々闖入者に歸れ歸れと手を振つて現はれて來た。其の内の三十五六艘は測量隊の行手を遮る積か、真直に前に廻つた。前頭に立つたセント中尉は全員に命令を下して、櫂を休めて小銃に劍を付けさせた。けれど此の手段は思ふ通りの効力はなく、彼等は停まらずに猶も進んで來た。セント中尉は事の破裂を氣遣ひ、直ぐ衝突せぬやうに幾分か進路を變へて置いて、一艘の短艇を二哩後のミシシッピーに急派した。蒸汽船が近付くと直ぐ其の効力が現はれて、其の後彼等は測量隊と衝突するやうな氣色を示さなかつたので、難なく測量を續ける事が出來た。やがて召還の號砲が本艦から鳴り響いたので、ミシシッピーは測量隊を曳いて浦賀に歸航した。

此の日も常と同じく終日日本船が異國軍艦の出現にも怖れず、海上を盛に往來して居た。

時には漁船などが軍艦の直ぐ近く迄來て、珍し相に眺めるのもあつたが別に恐怖の様子も敵意も見えなかつた。斯うして何事も平穩に過ぎた。艦隊の人々は皆舉つて提督の要求に對して挨拶のある明日をば深い氣遣と興味とを以て待受けたのである。

### 九 江戸の挨拶

愈指定の十二日(六月七日)になると、朝の九時過ぎに、浦賀の海岸を放れて三艘の船がサスクハナを指して向つて來た。普通の警護船とも異なり、又他の船にも似ない、何うかと云ふと歐州式に造つたかと思える船で、其の内の一、番大きいには三十人他の二艘の少さいには十三人づゝ乗込んで居た。船が近寄ると、立派な絹布の裝束をした浦賀奉行の香山榮左工門(實ハ與力ナルコ)が胴の間に敷いた筵の上

に、通詞や従者に圍まれて坐つて居るのが判つた。奉行の乗込んだ先頭の船は、他の二艘をばサスタクハナから餘程遠い所に残して置いて、獨り艦側に漕ぎ寄せた。香山榮左工門閣下は一等通詞の堀達之助、二等通詞の立石得十郎と共に直に上艦を許され、交渉委員のブガナン艦長及アダムス參謀長の前に案内せられた。是より先提督は、日本の皇帝陛下に宛てた信任状と、國書棒呈に關して貴帝國の最高官の一人と豫め打合せを致したいと云ふ旨を認め、手紙とを用意して置いた。奉行は先づ第一に、國書の原本と其の翻譯騰本とを別々にして、翻譯騰本を渡した。後でなければ、原本を渡さぬとは、以前の約束に違つて居ると述べ立てた。之に對して、其麼間違は決してない、國書の原本は、其の翻譯騰本及提督の手紙と一緒に渡す事は出来ないが、提督の手紙は相當なる日本の高官に限り、提督の手から直接渡す事にすると言ふと、奉行は、國書を受取る爲提督並に隨行員の接待館が、只今海岸に建築中で、應接委員も既に陛下から特命された次第であると答へた。彼は又夫に附け加へて、國書は受取られた所で、其の返答は江戸灣にて致す事は出来ないか

ら、長崎へ廻送して、和蘭人か若しくは支那人の手を経て撈換されるであらうと言つた。此の言葉が提督に報告されると、提督は早速次のやうな抗議書を認めて交渉委員をして之を和蘭語に譯して懇に奉行に説かしめた。抗議書には『提督は長崎へ赴かず、又國書に對する返答の通信は和蘭人若しくは支那人の中介を煩はさざるべし。提督の齎せる合衆國大統領の親翰の原本は、日本皇帝若しくは外務の上長官の外は、何人にも渡し難し。若し大統領より日本皇帝に宛てたる此の友誼的國書にして適當の方法を以て受取らるゝ事なく、且又何等の返答をも與へられずんば提督は之を以て彼れの國家が侮辱せられしものと認め、從つて其の結果に對しては何等の責を負はざるべし。以上に對する返答は兩三日内に交付せられたく、而して其の返答は現所在地の附近にて交付せらるゝにあらざんば受けざるべし。』とあつた。之を聞くと、奉行は追つて午後挨拶を致すと云つて別を告げて起つた。多分浦賀の奉行所には、彼より上の役人が黒幕に隠れて居て、一々談判の指圖をして居たので、彼は夫と相談の爲歸つたのであらう。奉行との會見は三

九二  
時間に互つたが極めて平穩に取り運び、彼が軍艦を辭したのは午後の一時であつた。此の日は陸上も靜穩で、砲臺にも何等の運動が見えず、警護船は海岸に舳を並べて泊つて居た。

### 十 奉行と交渉委員との協議

浦賀奉行は約束通りに午後再び旗艦に來た。ペルリ提督は相變らず引込んで居て顔を見せなかつた。ブツカナン艦長、アダムス參謀長及旗艦副官コンテと浦賀奉行香山榮左衛門及通詞との間に起つた協議は次の如くであつた。

(榮左衛門) 原本と騰本とを別々にすると非常に時日を費す事なれば、貴下の取計ひにて同時に渡さるゝ事は出来ませぬか。

(ブツカナン) 夫は出来ませぬ。

(榮左衛門) 最初軍艦が着きました時、騰本のみ先に渡して原本は一處に渡さぬと云ふ事は聞きませんでした。然るに今左様の事を被仰るは如何いふ譯です。

(ブツカナン) 最初貴下が軍艦に訪ねて來た際、原本と騰本とをお目に懸け、今日と同じ事を言つて置いた筈です。暫く言葉を切り再び續いて提督の親翰と受取りに此處に來らるゝと云ふ其の高官は皇帝の信任を受けられたお方でありませぬか。

(榮左衛門) 皇帝の信任を受けて居ります。

(ブツカナン) 何か其の證據がありますか。

(榮左衛門) はい、其の證據を持つて居ります。

(ブツカナンとアダムスとは提督と合議の爲退出)

(副官) 提督の親翰は何時受取らるゝ都合ですか。

(通詞) 明日か明後日か。

(副官) 其の接待館は何處にありますか。

(通詞) 海岸に。

(副官) 此處から見えますか。

(通詞) 見えません。

(副官) (再び繰り返して) 此處から見えますか。

(通詞) 山の向側ですから他の處だと見えます。

(ブッカナン、アダムス歸り来る)

(ブッカナン) 只今アダムス參謀長と私とは提督と相談を致したが、提督の言ふには、貴下は國書受渡しの件に就いて誤解して居るやうに見えるから、若し貴下が相當階級の役人が國書受取委員に指定せられたと云ふ證據を示す事が出来るならば、今迄の争點は取消して、原本と謄本とを同時に渡しませう。

(榮左衛門) 外國の手紙を受けるのは本来長崎にのみ限られ、浦賀は其の地でないから、欽差委員はたゞ國書を受取るのみにて、何事も商議する事は出来ません。

(ブッカナン) たゞ國書が受取らるれば宜しいのです。而して委員は軍艦に參らるゝか、夫とも陸上で渡すべきか。

(榮左衛門) 陸上で受取らるゝてありませう。

(ブッカナン) 國書を渡すに先立つて、和蘭語に譯した信任狀を提督の許に送られ

たい。

(榮左衛門) 欽差委員は國書受取の委任だけにて商議の委任は受けて居ります

まい。

(ブッカナン) 商議の必要はありません。然し皇帝の捺印した信任狀を所持して

居なくてはなりません。

(榮左衛門) 彼は相當の捺印ある書狀を所持して居るでせう。

(榮左衛門) 欽差委員は明日陸上にて國書受取りの爲め當地に參るてありませ

ら。

(ブッカナン) 何時に。

(榮左衛門) 朝の八時に。而して軍艦で旗の掲げらるゝのを合圖に私は夫を知らせに此處に參りませう。

(ブッカナン) 其の節は欽差委員の信任狀と其の謄本とを持參して貰ひたい。

(榮左衛門) 持參致しませう。

(榮左衛門) 大統領の國書に對する皇帝の返答は直ぐてなくてはなりませんか。

(ブツカナン) 否直ぐてなくても宜しいです。

(榮左衛門) 提督は何時其の返答を受取りに參りますか。

(ブツカナン) 提督は二三个月の内に再び此處に歸つて來てありませう。

(榮左衛門) 欽差委員は大統領の國書を受取つた證據として受領書を差上げるてありませう。

(ブツカナン) 接待館は餘り遠隔て短艇で行くは不便なれば今の處より軍艦に近い場所に選定する事は出来ませぬか。提督は天幕の中なりとも軍艦に近き砲臺の中なりとも満足して委員と會見致します。而して會見は長くはかかりませぬ。

(通詞) 接待館は遠くはありませぬ。日本の一里近くであります。

(ブツカナン) 貴下軍艦の近くに作るやうに取計らふ事は出来ませぬか。

(通詞) 奉行は取計らつて見ようと言つて居ります。

(ブツカナン) 其の結果を明朝知らして呉れませぬか。

(通詞) 承知致しました。

協議は是て済んだのである。

### 十一 好機嫌な香山榮左工門

右の協議が済むと後は饗應になつた。香山榮左衛門と伴の通詞とは非常に好機嫌の體で、サスクハナの士官の懇なる接待にも遜けず劣らず器用に上品に應對して居た。而して款待も遠慮なく享け饗應に出たウキスキとブランデーとは一番お口に召した様子であつた。其の内でも奉行は殊に外國酒が好物らしく、砂糖を入れたのは猶更で、盃を一滴も餘さず飲み竭して、非常に甘味さうに舌鼓を打つのであつた。通詞は酒宴の興につれて追々と寛いて來て、自分達の主が酒に酔つて饒舌になつたのを興かつて笑ひながら、

「随分赤くなりました」と榮左衛門の餘り酔ひ過ぎるのを氣遣つて言つた。さう云

ふもの、彼等日本の役人は始終端然として紳士らしい態度や振舞を少しも崩さず頗る社交的で自由に愉快に談笑したのである。加之彼等は學問及び一般の智識の點に於ても決して其の閑雅な態度や優しい氣質に劣つて居なかつた。實に彼等はたゞ生育が善い許でなく、教育も悪くなく、日本語は云ふに及ばず、和蘭支那語にも上達し、科學の大體にも、世界地理にも通じて居た。地球儀を彼等の前に持出すと、合衆國に眼を注いで、直ぐ様華盛頓と紐育とを指示したが、一方は我が國の政治上の首府で、一方は商業上の首都である事は既に承知して居る様子であつた。夫と同様に雜作なく英佛丁抹などの他の歐羅巴諸國をも一々指示した。合衆國の事に就いて彼等は色々質問したが、夫から推して見ると我が國の物質的進歩の狀態を萬更知らなくはなかつた。鐵道は山を掘り抜いて通るかの、鐵道の上を走る汽車の機械と汽船の機械とは、矢張同じ物ではないかの、又地峽を通る運河は末だ出來上らないかと尋ねた。之は多分パナマ鐵道の事を指したのであらうが、兎に角兩方の海洋を連絡する工事が起された事は承知して居て夫を自分等が觀た

事のある運河と云ふ名で呼んで居た。響應も終り話も濟んでから榮左衛門と通詞とを軍艦の觀覽に誘つた。彼等は鄭重に夫に應じて案内されて甲板に出ると、其處には日本人見たさの好奇心に驅られ士官や士卒の群衆が彼等を取圍んだが、件の日本人は假初にも狼狽へざる許か、却つて落付き拂つて威嚴ある態度を示した。艦内の種々の設備や構造、又大きな大砲などに注意して眼を留めて居たが、初めて蒸氣船を見る人にきつとあるやうに、機械の有様や不思議な仕掛に吃驚した様子はなかつた。取分け機關は彼等の興味を一番惹いたらしが、通詞は其の原理を丸切り識らなくもないやうであつた。奉行の一行が船室を退出する際、彼等が刀を残して置いて行つたが、其の内の二振はさる身分の人々が常々帶用して居たものである。取上げて調べて見ると、實用よりは寧ろ裝飾が、つた物であるが、質も鍛も申分なく、閃々と磨き立て、あつた。鞘は鮫皮で手際よく作つたもので、純金の鍔が附けてあつた。斯うして奉行の訪問は日暮に及び、彼等が例の溫雅な禮儀振て、愛驕の中に威嚴の

ある微笑を洩しながら、一步毎に辭儀をしつゝ、軍艦を別れて行つたのは既に七時過であつた。艦上では斯う云ふ事が起つて居る間に提督が派遣した艦隊の短艇は終日忙しく海上の測量や視察に従事したのである。

## 十一 七月十三日

昨日の約束に従つて、奉行は例日の如く早朝に訪ねて来るかと待設けて居たが終に來なかつた。周圍の情勢から推して見ると、陸上では何等かの變動があつたらしく、兵隊を乗せた多勢の船が續々と對岸から浦賀の側に渡つた。其の内には官府の旗と旗標とを建てた大船が一艘混つて居た。

午後の四時になつて初めて、香山榮左衛門は二人の通詞を連れて、軍艦に顔を出した。奉行は欽差委員が今江戸から着いた許なので、其の爲遅れたと折返して言譯して、夫かれ皇帝の印のある(譯註實は)信託状を示した。次いで、接待館の位置變更の件も建議して見たが既に建物が出来上つた後なので、今更變更は甚だ困難であ

ると述べた。かくあるべしとは提督の兼ねて豫想して居た所であるし、實際又日本人に何う云ふ謀反が企てられてあるかも知れなかつたので、出来るだけ萬一の用意をせねばならぬと決心した。其處で測量船を出して、接待館の近邊を普く視察せられた。測量船が歸つての報告には、接待館の近傍には、大勢の人間が建物の建築や造作の運搬、其の他明日の準備に忙しく立働いて居るのが見え、且つ艦隊は接待館への着弾距離迄這入つて行つても差支ないと云ふ事であつた。

やがて奉行は明日の提督の隨行員は何の位の人數であるかと尋ねた。すると、夫は大勢である、大統領の使命を帯びた高官が澤山な隨行員を従へるのは合衆國の習慣でもあるし、又一方には派遣された國に對して敬意を表する譯であるから、従つて提督も艦隊から出来るだけ多くの士卒を連れて行きますと答へられた。夫から奉行等は明日の接待の儀式に就いて、當日役員は通例の儀式の場合とは違ふ本装束を致しますと得意氣であつたが、軍艦の船室で彼等が腰を掛けたやうな立派な肘掛椅子に賓客を請ずる事が出来ないのを非常に残念相に、肘掛椅子は一つ



もありませんからと言譯するのであつた。殊に彼等が前日振舞はれたプランデ  
 ーなどの外國酒には一層苦心した様子で、我が國にはあゝ云ふ品はないので差上  
 げる事は出来ませんから何うか容赦して貰ひたいと言ふのであつた。  
 其慶氣遣は一切無用、國々々々て響應の異なるのは風俗習慣の異なると同じ事で、亞米  
 利加の習慣が日本に行はれぬからとて少しも差支ない、唯提督は當の日本の委員  
 と同等の席に着き、随行員も對當の日本の役人と同等の席ならば夫て満足である  
 と告げた。其の時彼等は又大統領の親書は提督の手から直接欽差委員の戸田伊  
 豆守にお渡しになるか、お渡しになつたら提督は直ぐ歸艦なさるか、又何時頃返答  
 を受取りに来らるゝのかなどと尋ねた。  
 這慶具合て協議は二時間半に互り、彼等が例の如く禮儀正しく、相變らず一步毎に  
 腰を屈めながら軍艦を辭したのは既に夕方、其の際一番通詞の堀達之助は極め  
 て明瞭に「歸宅致したい」と英語を操つた。彼は外國語に懸けては餘程の天才らし  
 かつた。

提督は各艦の艦長を旗艦に召集して、一つには日本の接待館の位置撰定の目的が  
 判然しないし、兼々日本の謀叛と反覆とに備ふる爲明朝早々艦隊の碇泊所を接待  
 館の前面に移す事、又出来るだけ随行員を盛大にする爲各艦から差支ない限多數  
 の士卒を繰り出すやうにと命令した。  
 陸上では我々に増して明朝の準備に忙殺されて居る様子で、浦賀の港からは様々  
 の警護船が頻繁に入出した。接待館の建築を取急いで居ると思はる邊からは、勞  
 働者の騒々しい聲に混つて、鐵槌の音が引切なしに静かな夜を貫いて夜明け迄聞  
 えた。

### 十三 久里濱上陸

十四日(六日)の夜明には不吉な霧や雲が地上に垂れて居たが間もなく朝日が干々  
 と出て、来て、空も奇麗に晴れ渡つた。

浦賀の海岸は一夜の間に見違ふ許になつて、緋の花形の即ち葵の紋を付けた幕を

一帯に引廻はし、幕の上には派手な色で様々の紋を出した旗や長旒が垂れ下つて、幕の後には兵隊が一杯列べてあつた。軍艦は早朝から準備で元氣がつき、誰も彼も盡く今日の隨行を希望したが、幾程か後に残つて居なければならぬので皆行く譯にはいかなかつた。其處で差支ない限多數の人を出す事にして、不公平のないやうに籤で撰んだ。當籤した三百餘人の士官水兵水夫は兼ねて命令された通りに大禮服や制服に着換へた。八時前にサスタハナ號とミシシッピー號とは錨を抜き、煤煙を棚引かして徐々と浦賀浦を久里濱の方へ下り始めた。風がない爲帆前船は夫に加はる事が出来なかつた。

今迄の投錨地と久里濱との間を隔て、居た岬を廻ると、急に陸上の準備が見え出した。此處も浦賀同様海岸一帯の地は天皇の紋(將軍の葵)を付けた色染の幕を引廻はして、如何にも盛で、夫に種々の派手な色合の軍旗が無數、其の中には又高い幟が九本立混つて何れも朝日に耀々と輝いて居た。幟からは又眞赤な巾廣の小

旗が長く垂れ下つて地面を拂ふやうにした。

右の光景を背にして、濱邊には一團の兵隊が隊伍を整へて列んで居た。確かに兵力

を見せつけて亞米利加人を吃驚させて遣らうとの量見であつたのだ。

軍艦から海岸を見渡すと、久里濱の左手に當つて海岸と山麓の間に、屋根の尖つた家が放れ放れに一群見える。右手には五六百にも餘る日本船が海邊に沿ふて平

行に並んで、艦に赤旗を翻して居た。總ての光景が怖しいと云ふよりは寧ろ珍しく賑かて、丸で繪でも見るやうに面白い。夫に太陽は朗かに照輝いて、青々した野

山派手な軍旗閃々する軍勢に一層の活氣を添へた。

接待館は海岸より引込んだ處にあつて、周圍の家よりは一段高く、三角形の屋根を三つ並べて居るが、棟の形が不整なので、遠くから観ると大きな草堆のやうであつた。

軍艦が久里濱の口に近づいて錨を下すと、舳が二艘サスタハナ號に漕ぎ寄せた。香山榮左衛門は二人の通詞を伴ひ、續いて其の後から中島三郎助と一人の役人と

が軍艦に上つて来たので、舷門の處で彼等を丁寧（ていねい）に迎へて上甲板に案内した。彼等は皆常とは異つた立派な装束をして居た。副奉行（そくぎやう）與力（よりき）の三郎助（さぶらうすけ）はこつてりと化粧をして、綺麗な錦襦袢（きんじゆばん）の衣裳を着飾つて居たが、左程引立たない許か、却つて夫が滑稽（こっけい）に見えて、感歎（かんだん）よりは可笑味（おかしみ）の種で、實際の所トラムブに書いてある兵隊さんに宛然（そつくり）であつた。

サスクハナから短艇集合の信號が上つた、三十分許の内に十五艘近くの大艇小艇は列を揃へて堂々と漕ぎ出した。ブツカナン艦長は大短艇に乗込んで先頭に立ち、其の兩側には今日の儀式の應接掛らしい浦賀奉行の香山榮左衛門と副奉行の中島三郎助が乗つた小舟が二艘附いて居て案内をした。艇隊が中程迄進むとサスクハナから提督の出發を知らずる大砲が十三發放たれて、水から山に鳴り轟いた、同時に提督は大短艇に乗込んで陸地を指して進んだ。

上陸點は入込んだ浦の中程に、水際から土俵を突出して造つた間に合せの波戸場であつた。先頭のブツカナン艦長が真先に海岸に飛上ると、續いて百餘人の水兵が

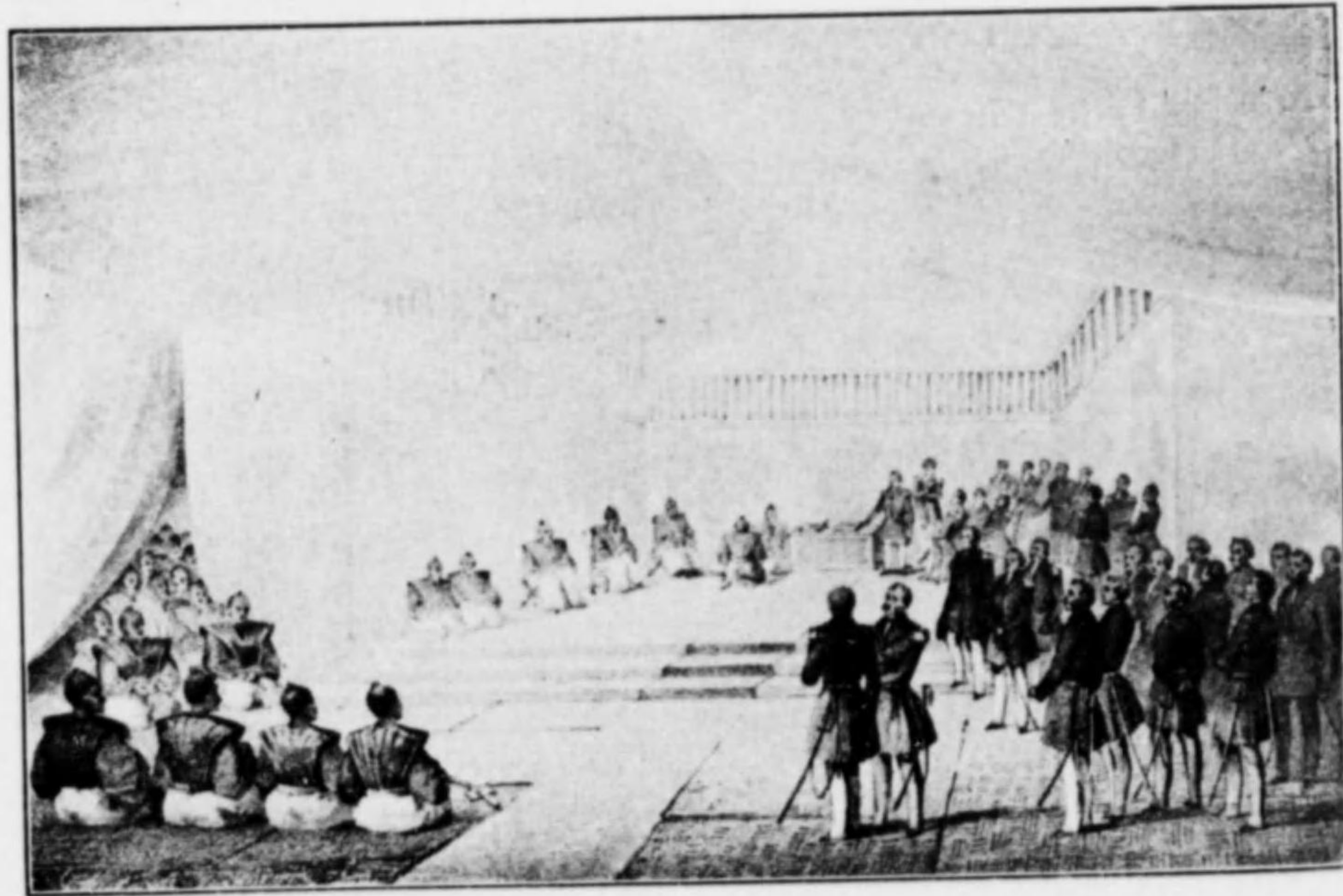
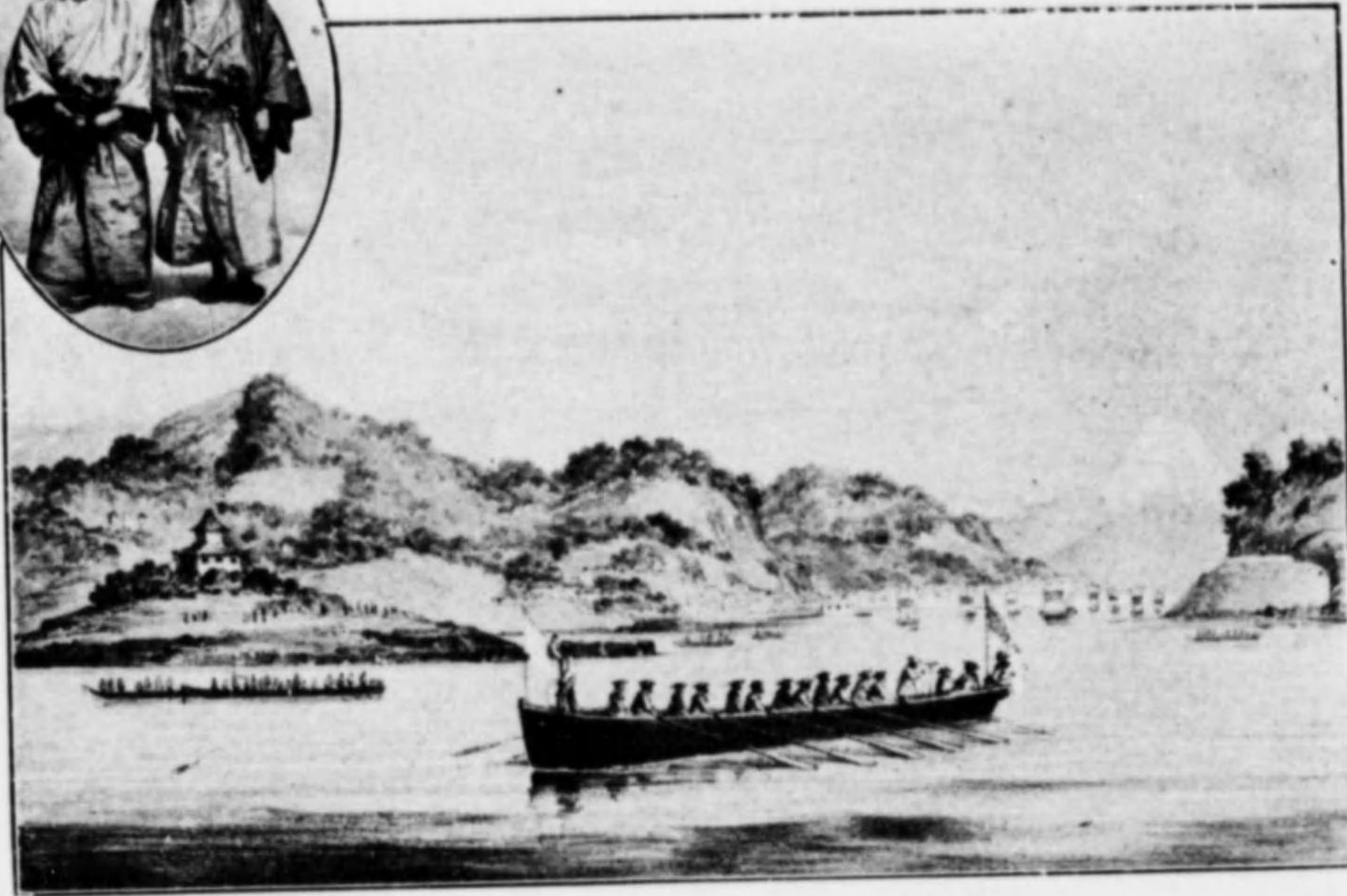
波戸場に上陸して海に面して兩側に並んだ。其の後から又百餘人の水夫が上陸した。續いて音楽隊が二組上陸した。全體で亞米利加人が三百人近く、甚だ盛大なる軍勢とは云はれぬけれど、平時には是で十分で、殊に我が軍人の強健な偉大なる體格は、矮小な柔弱らしい日本人に對照して著しく目立つた。

日本の軍勢は五千と奉行の言葉であつたが、遙かに夫以上で、海岸一帯は云ふに及ばず、村の眞外端から北は峻しい山の中腹迄一杯に廣がつて居て、其の後には幕を引廻してあつたが、其の幕の蔭や後には又無數の軍勢が屯在して居た。然し秩序も規律も整はぬ所を見ると、善く訓練されたものとは思はれない。兵隊の服装は普通の日本服と同じだが、刀槍火繩銃などの武器を携へて、かひなく武裝して居た。遙か後方には豫備の爲か騎兵の大部隊が見えたが、馬には立派な馬衣を被せてあるので、騎者行列の趣があつた。村の背後に起續いて居る山や岡の麓から軍隊の後には、一杯に土地の人民が詰込んで、其の内には婦人も澤山混つて西半球から来た珍客を珍し相に眺めて居た。

通詞森山榮之助



浦賀港の外観



國書受渡し

#### 四 國書の受渡し

提督が岸に上ると、隨行の士官は上陸點の兩側に列んで居て、提督が其の間を通抜ける。後から從つた。一行は直ぐ列を作つて、香山榮左衛門と通詞とに導かれて接待館に向つて進行を始めた。艦隊中から撰出した剛力無双の二人の水夫が合衆國の國旗と軍艦旗とを持ち、儀式の服装をした二人の給仕は、大統領の親翰と提督の信任状とを入れた籠を捧げて、提督の先に立つた。提督の兩側には、これ又艦隊中から擇出した丈の高黒奴の美丈夫が護衛に附いた。

接待館は上陸點から近かつたので直ぐ達いた。入口の前には確に歐羅巴で鑄造された黄銅の小さい大砲が二門か置いてあつて、其の側には、普通の兵隊とは全然服装を異にした一組の番兵が迂路々々して立つて居た。通路の右側には陣羽織を着て、白い鉢巻をした兵隊が小銃を持つた上に、火付道具と銃剣とを携へ、左側の番兵は黄色に變つた鳶色の汚ない制服を着て、舊式の火繩銃を擔いて居た。提督

は接待館の入口迄護衛せられて、随行員と共に接待館の内に這入つた。

建物は大急で造つたと見えて、柱や梁には符牒が其の儘鮮かに残つて居た。入口の間は廣さ七間四方もある丸て天幕のやうなもので、葵の紋を所々に染出した幕で大體出來て居た。次の間は今日の受渡しの儀式のある持待室で、一段高く、廣さは三間四方、疊敷の上に赤い毛氈を敷詰め、周圍には入口だけ明けて、葵の紋を白く抜いた紫の幕を引き、金屏風を建て廻して、其の上上段の間迄の通路には毛氈を敷いてあつた。

提督が随行員を從へて接待の間に這入つて行くと、左側に腰を掛けて居た三人の役人が起上つて辭儀をした。而して提督と随行員とは右側に列べてあつた肘掛椅子に導かれた。

日本の欽差委員は戸田伊豆守と伊藤石見守との二人であつた。何れも相當の年輩で、伊豆守は確に五十頃、石見守は夫より十か十五多いやうであつた。二人の内て伊豆守の方が容貌優れて美しく、顔立も準正にして愛嬌があつたので、石見守の

皺だらけの老顔に比べて一層見映がした。装束は二人とも非常に立派な物で、銀糸や金糸で模様を縫取つた金目のかゝつた錦襦袢子の仕度であつた。伊豆守と石見守とは恰も銅像か何かのやうに端然と坐込んで會見の済む迄此の態度を少しも崩さなかつた。唯提督が這入つて來た時と退出する時には起上つて眞面目にお恒例の辭儀をしたが、口は一口も利かなかつた。榮左衛門と通詞達は今日の儀式の主人顔に立働いて居たが、提督の一行が這入つて行くと、室の眞中に据ゑた朱塗の大きな箱の側に端然と跪いた。提督と隨行員とが着席すると、暫の間は肅と鳴を鎮めて、双方から何とも言はずに黙つて居た。其の時一番通詞の堀達之助が初めて口を切つて、和蘭語の通譯ポトマンに、戸田侯は既に國書を受取る用意が出来て居るが、お渡しくださる用意は如何ですかと訊ね、上座に備へてある朱塗の箱は國書を受け取る爲めの箱であるから夫に載せて貰ひたいと云ふ旨を通じた。其處で提督は下座に控えて居た給仕に點頭くと、彼等は夫に應じて、國書と其の他の文書を入れた立派な籠を捧げて進

み出した。二人の屈強な黒奴は直ぐ給仕の後に跟いて、眞中の朱塗の箱に進寄り、給仕から籠を受取り蓋を開いて中から手紙を取り出し、夫を擴げ文面や印章を現はして、日本の箱の蓋の上に載せた。總て以上の事は無言で爲されたのである。斯うして大統領の親翰、提督の信任状並に提督から皇帝に宛てた二通の手紙が載せ終はると、ポトマンは提督の指圖で達之助に文書の性質を夫々説明した。其の間達之助と榮左衛門とは跪いた儘頭を低げて居た。やがて榮左衛門は起上つて石見守に近づき、其の前に跪いて手紙の卷いたのを受取り、夫を持つて提督の前に來て跪いて渡した。通譯のポトマンが其の手紙は何かと尋ねると、國書の受領書であると答へた。其の文意は、——亞米利加合衆國大統領の書翰及び添書とも確に受取りました。就いては早速皇帝の御許に廻す事に致します。一體浦賀は外國に關した事柄を取扱ふ場所でないに由つて、長崎に赴くべき旨幾度諭すも、此の地に於て書翰受取られざる場合には、提督は大統領の使節としての使命を辱め、一分立ち難き趣なるにより、此の度は其の苦勞を諒察し、國法を曲げて件の書翰を

を受取つた次第である。固より此の地は外國人と應接すべき場處でなく、従つて何等の商議も響應も致す事は出来ないから、書翰が受取られた上は速かに歸帆せられたい——と云ふのであつた。

暫時沈黙の後、ポートマンは提督の命に由つて、提督は二三日の内に此處を出發して琉球から廣東に赴き、來春四五月の頃再び日本に歸來する都合であると語つた。

すると達之助は通譯にもう一度言つて呉れと求めた。通譯は前通の言葉を繰返して答へた。すると又

「提督は軍艦四艘で歸つて來るのでせうか」と尋ねた。

「全艦隊を率ゐて來ます。これは艦隊の一部だから、其の時は軍艦の數も更に多

いてせう」と提督は答へしめた。

榮左衛門と達之助とは辭儀をして起上つて、朱塗の箱の紐を結び、通譯にこれ用事が悉皆済みましたと挨拶して、兩側に列んでゐる人々に各自頭を下げながら退出した。其處で提督も起上つて席を立つた。すると、二人の國守は椅子から起上

り、相變らず啞然と黙り切つた儘提督一行の退去つて了ら迄突起つて居た。斯うして待兼ねた國書の受渡しは、非常に鄭重に、然も極めて儀式張つて取行はれ、二三

十分許で悉皆済んだのである。

提督及び隨員が接待館の入口に立留つて短艇の來るのを待つて居ると、榮左衛門と通詞とが出て來て、隨員に何を待つて居るのかと尋ねた。提督の船を待つて居

るのだと話は夫きりて済んだ。間もなく短艇は來て、提督一行は之に乗込み、前

のやうに列を作り、音樂隊に國歌を奏樂させつゝ、浦賀奉行一行の二艘の日本船に送られて歸艦した。

### 十五 大統領の親翰

其の一(使節派遣の趣旨)

北亞米利加合衆國大統領ミラード・フィルモア書を日本皇帝陛下に呈す  
予今水師提督マッシュ・シールを以て、書を陛下に呈す。此者は合衆國海軍の最

高將校にして、今次陛下の領地に航到せる一艦隊の總督なり。  
 予已に水師提督ベルリに命じて、予が陛下に對し、且つ貴國政府に對し、極めて懇切の情を含むことを告明せしめ、又且つ今次ベルリを日本に遣はすは他の趣旨あるに非ず、唯我が合衆國と日本とは宜しく互に親睦し、且つ交貨すべき所以なるを告げ知らしめんと欲するにあるのみ。  
 合衆國の憲法及び法律は固より人民に禁戒を下して、他邦の人民の宗教政治を妨害することを得ざらしむ。予特に水師提督ベルリに命じて是等の事を嚴禁せしむ。是貴國の安穩を妨げざらん事を欲してなり。  
 北亞米利加合衆國は大西洋より大平洋に達するの國にして、就中其のオレゴン州及びカリホルニアの地は正に貴國と相對す、我が蒸汽船カリホルニアを發すれば十八日にして貴國に達することを得るなり。  
 我がカリホルニアの大州は毎年凡そ金六千ダラー、其の他銀水銀、寶石若干並びに其の他諸種の物件を産す。日本も亦豊富肥沃の國にして、幾多貴重物品を出す、

貴國の人民も亦諸般の技藝に長ぜり、予が志兩國の人民をして交易を行はしめんと欲す。是を以て日本の利益となし、兼ねて又合衆國の利益となさん事を欲してなり。  
 貴國從來の制度、支那人及び和蘭人を除くの外は、外邦と交易することを禁ずるは固より予が知る所然れども、世界中時勢の變換に隨ひ、改革の新政行はるゝ時に當つては、其の時に隨ひて新法律を定むるを智と稱すべし。蓋し貴國舊制の法律初めて世上に布かれし時は、今よりこれを見れば既に甚だ古りたり。  
 此の時代に當りて亞米利加始めて發見され、或は之を新世界と呼び、歐羅巴人にこれに居住せり。久しき間亞米利加は人民稀少にして、其の民皆貧陋なりしが、當今は人口大に蕃殖し、交易亦甚だ弘博となれり。故に陛下若し舊律を改革し、兩國の交易允準するに於ては、兩國の利益極めて大なる事疑なし。  
 然れども陛下若し外邦の交易を禁停せる古來の定律を全く廢棄するを欲せざる時は、五年或は十年を限りて許可し、以て其の利害を察し、若し果して貴國に利なき



に於ては、再び舊律を回復して可なり。凡そ合衆國他邦と盟約を行ふには、屢々幾年を限りて約定す。而して其の事便宜なるを知る時は、再び其盟約を尋ぐこととす。予更に水師提督に命じて他の一事を陛下に告明せしむ。合衆國の船舶毎年カリホルニアより支那に航するもの甚だ多し。又捕鯨の爲合衆國人日本海岸に近づく者少からず。而して若し颶風ある時は、貴國の近海にて往々破船に逢ふ事あり。若し是等の難に遇ふに方つては、貴國に於て、其の難民を撫卹し、其の財物を保護し、以て本國より一船を送り難民を救ひ取るを待たれんこと、是予が切に請ふ所なり。

予又水師提督ペルリに命じて次の件を陛下に告げしむ。蓋し日本に石炭甚だ多く、又食料多きことは予が曾て聞知する所なり。我が國にて用ふる所の蒸汽船は其の大洋を航するに當つて、石炭を費すこと甚だ多し。而して其の石炭を亞米利加より運搬せんとすれば、其の不便知るべし。是を以て予願はくば、我が國の蒸汽船及び其の他諸船石炭食料及び水を得んが爲に日本に入ること許されん事を請

ふ。若し其の價は金錢を以てするも、或は貴國の民人好む所の物件を以てするも可なり。請ふ陛下貴國の南地に於て一地を擇び、以て我が船舶の入港を許されん事を、是予が深く願ふ所なり。

右の故を以て予今水師提督ペルリに命じ、一隊の軍艦を以て貴國有名の大府江戸に到らしむ。和親交易石炭食料及び合衆國難民の撫卹は其の用件なり。

予更に水師提督ペルリに命じて陛下に菲微の土物を献ぜしむ。願はくばこれを容れん事を。其の物固より甚だ貴からずと雖も、亦以て合衆國に於ける製造品の標本として見るに足るべく、且つ予が正實敬愛の微衷を表するに足らんか。伏して祈る皇天陛下の爲に祥を垂れん事を。

斯く書し終りて爰に合衆國の大印章を印し、且つ自から姓名を署す、時に千八百五十二年第十一月十三日。華盛頓府にて

ミラード、フィルモア親書

大統領の命を受けて

國務卿エドワード・エベレット親書

其の二 (使節全權委任書)

北亞米利加合衆國大統領ミラード・フィルモア書を日本皇帝陛下に呈す。  
 合衆國海軍の掲督マッシュ・シー・ペルリは其の人と爲り、誠實、周密、且つ才能あるを鑑識し、拔擢して全權の任に膺らしめ、合衆國の使節として貴國の同等權要の位にある官人一員若しくは數員と會談し、兩國の和親交易、航海及び之に連絡して國民の利害に關する諸件の一約定、又數約定を商議し、締結し、且つ親署せしむ。此は合衆國議會の合議協賛を経て、合衆國大統領最後の批准を與ふるものとす。  
 右の證左として合衆國の印章を印して茲に附す。  
 千八百五十二年即ち北亞米利加合衆國獨立建國以來七十七年、第十一月十三日、華盛頓府にて

ミラード・フィルモア親書

大統領の命を奉じて

國務卿、エドワード・エベレット親書

十六 提督の書翰(渡來の趣旨)

水師提督ペルリより皇帝に上る。

本書署各者は、東印度支那日本海に備へたる北亞米利加合衆國の海軍の總司令官にして、便宜に應じて、日本政府と協商すべき全權を帯び、好意を以て本國より斯の國に差遣せらる。其の協商の事體は我が合衆國大統領の書翰中に詳記せり。  
 右書翰並びに本書署名者の全權委任書は共に英吉利和蘭支那文に翻譯し、併せて之を呈す。

大統領より奉呈せる國書の原本及び委任書の原本は共に日本國皇帝陛下の高貴なる位に應じて調度せるものなれど、本書署名者親しく自から繳納すべし。願はくば陛下豫め受納の日を指定せられん事を  
 本書署名者更に陛下に上告すべき命を受く。大統領は日本に對し友愛の意志を抱けるに係らず、合衆國の土人、故意に貴國の地方に來り、或は船難に遇ふて此の地

方に漂着せる時、貴國是を待遇すること、讐敵の如くなるは實に驚駭痛心に堪へざる所なり。是蓋し往年貴國にて亞米利加船モリソン、ラゴダ、ローレンスを遇する處置に就いて云へるなり。

亞米利加人は猶基督教諸國の習俗の如く、其の國の海岸に漂着せる者は何れの地たるを論ぜず、愛し容れ、且つ拯救撫卹を以て仁慈の所爲とせり。是を以て貴國民合衆國の領地に漂着せるもの皆是を撫卹せり。

凡そ貴國の海岸にて難船せる者又は逆風狂浪に遇ふて貴國の港内に入る者は、貴國政府仁慈を以て是を措處せんとの明證を得んことは、是合衆國政府の切に貴國政府に望む所なり。

又署名者に命じて貴國に告げしむ。合衆國は歐羅巴諸國の中、何れの國とも同盟することなし、又其の法律にては國內各人隨意の宗教を奉ずるを許す。况や他國人の宗旨教法に至りては固より是を是非することなし。

亞米利加人は日本と歐羅巴との間にある大國に住す。此の大國は歐羅巴人初め

て日本を見出せし頃發見せる國にして、其の初は此の大國の内最も歐羅巴に近き地方に歐羅巴の移住民のみ居住せしに、人民速かに繁殖して全國に及び、終に大洋海岸に達し、今は國內に幾多の大都會ありて、其の都會より蒸汽船に乗じて發程する時は、十八日若くは二十日にして日本に到るべし。されば我が國と世界の此の方面との交易は方に急速の繁昌を加へ、我が國の船舶日本の海上に粟散するに至ること遠きに非ざるべし。

合衆國と日本とは逐日次第に相近づき相交るに至ること免れざるが故に、大統領殊に日本皇帝陛下と好誼を結び交を修めんことを欲す。然れども貴國にて亞米利加人を待遇すること恰も寇讐を視るが如き風習を禁止するに非ざれば其の交誼豈能く久しからんや

外國と交を絶ち、是を仇視する貴國の制度は、其の初法律を立つる時に在つては元より知慮ある處置なりしならむも、今後兩國の交通昔日に比すれば極めて容易に、且つ速かなるを得るに至りたれば、此の舊制を固守せんと欲するは、是無智の謀に

して自今決して行ふ可らざる所なり。

本書署名者以上の説を陳し、偏へに願はくば、日本政府にて兩國民の争闘を致すを防ぐの必要なるを思ひ、正實友愛の誠情に答ふるに好意を以てせられん事を。

日本訪問の爲指定せられし大軍艦數隻未だ此の海に到着せず、本書署名者等徒らに是を待つのみ。今聊か其の友愛の情を表せんが爲、小艦四隻を以て貴國に到れり。明春當に事體に應じて尙數隻を増加して再び航し來るべし。

然りと雖も、日本國皇帝陛下の政府、願はくば本書署名者の再び來るを待たず、大統領の書中の載せられ公平和好の策を採用あらん事を。但し、其の書中の本旨は近日便宜を得るを待つて、本書署名者當に自ら詳悉すべし。

皇帝陛下に對し、深く崇敬し奉り、誠心に陛下の康寧福止、萬壽無疆を祈る。

東印度支那日本海にある合衆國海軍司令長官マッシュ・シー・ペルリ親書

千八百五十三年七月七日日本近海にて合衆國蒸汽フリゲート船サスクハナにて。

### 十七 榮左衛門と三郎助

提督の一行を送つてサスクハナ艦に來た榮左衛門三郎助並びに通詞は、艦長と提督の副官とに迎へられて船室に案内された。而して双方の間に左の如き會談が取交はされた。

榮左衛門。萬事都合好く濟んで誠に喜ばしい次第であります。

ブッカナン艦長。我々は日本と合衆國と常に友邦ならん事を希望いたします。

榮左衛門。何時出發の都合でありますか。

ブッカナン。二三日の内です。提督は只今の碇泊地が意に満たぬ爲他の碇泊地を探しに此の灣の奥の方に出掛ける積てあります。

榮左衛門。夫ては其處に碇泊する積てすか。

ブッカナン、たゞ二三日間出發の用意が出来る迄です。

榮左衛門。今日これ限り公然と別れ致したい、さすれば貴方方が出立する前に復

来る必要がありませんから。

ブツカナン。何れ數個月経つて再びお目に懸る考であります。提督は今回は日本皇帝へ献上する贈物を持參して居りませんが、次回には持參して參ります。其の内には蒸汽機關車即ち鐵道の機關車があります。

コンテ一 副官。又其の内には浦賀から江戸に達く位長い電信機もあります。夫を用ゐると僅か一分間の内に此方と向方とて話が出来ます。

榮左衛門。蒸汽機關車は一時間に幾里位走りますか。

コンテ一。蒸汽だけで、風の力を假らずに、日本の八里即ち亞米利加の十三哩走ります。又合衆國には一時間に十八哩を走る快速な河蒸汽船があります。

榮左衛門。蒸汽船は何處で最初に發明されましたか

コンテ一。亞米利加です。ファルトンと云ふ亞米利加人が初めて紐育で發明したのです。

話は大方これで済んだので、榮左衛門に留つて居て機關の運轉を觀察しては如何

かと勧めると、彼は好奇心に促されて終に其の氣になつた。其處で蒸汽船は彼に乗つて來た船と三郎助の乗つて來た船とを索で後に繋ぎ、錨を抜いて前碇泊地に歸航を始めた。

榮左衛門、三郎助、通詞の一行は士官に案内せられて、艦上艦内限なく忙し相に觀て廻つた。一體日本の役人達は珍しい物を觀ても平氣に構へて居るが常であるが、彼等は汽船の構造並に其の他の附屬物をば非常に面白相に丁寧に觀るのであつた。殊に機關室では、機械を見た例のない人達が能くするやうに驚いた様子も、怖がる様子もなく、運轉して居る機械の各部をば精密に検査して居たが、早速蒸汽の性質、夫に由つて機關が運動を起し、其の力で汽船の車輪が運轉する理法を呑込んだ様子であつた。のみならず彼等の質問はなか／＼穿つたもので、誰が初めて發明したのか、一時間に何里位水を排して走るかと再び尋ねた。

榮左衛門は又士官の腰にある拳銃を見付けて、其の組立を調べたいから解體いて見せて貰ひたいとの希望を述べた。夫に應じて一人の艦長は甲板上で試みに發

射して見せた。榮左衛門は怖れはせぬが驚嘆して、六發の丸が續け様に出るのを見護つて居た。榮左衛門は何うかと云ふと始終遠慮勝に扣目に振舞つて居たが、三郎助は厚かましく出婆婆つて居た。榮左衛門は珍しい物に出會ふと面白がつて黙つて觀て居たが、三郎助は青蠅く物を聞きながらるのであつた。又榮左衛門は何時にも温好な禮儀正しい謹直な紳士であつたが、之に引換へ三郎助は斷えず騒々しく、粗暴で出過ぎて、而して圓々しく厚がましい顔をば案内もされぬ角や隅までも突込んで覗き廻すので、好奇心を満すと云ふよりは寧ろ探偵を働いて居るやうに見えた。其の時汽笛が消魂しく鳴つて浦賀表に着いた事を知らせた。日本人は別れる時が來たのに思はず吃驚して飛上つた。機關は暫く運轉を中止し、後に繋いだ日本船を艦側に廻した。榮左衛門一行は餘り早く浦賀表に着いたので明かに失望した。而して未だ十分に好奇心を満足させぬ内に歸らねばならぬのを残念がつた。

### 十八 パンやハムの片を袂へ……

初め提督は上陸するに先立つて、サスクハナ、ミシシッピーの二艘を久里濱を見渡す處に置き、甲板は悉く片付けて何時でも行動が出来るやうに用意をさせてあつた。又短艇には榴彈砲を積込み、若し日本人が敵對しても始め、陸上で騒動が起つた場合には早速派遣して海岸に屯集して居る日本軍の全面に雨霰の如く彈丸を浴せ掛ける許に準備を整へてあつた。斯う萬一の場合の用意はして置いたが、今日の會見は戰爭沙汰で終はるやうな心配なく、無事平穩に國書の受渡しに済んだので、全艦隊舉つて其の成功を喜んだ。勿論文明國民間の普通の關係から云へば、何にも特別に喜ぶべき謂はないやうなもの、之が鎖國主義を堅く執つて居た日本なる事を考へると、今日の出來事に關係した我々亞米利加人が自から得意がるも穴勝ち無理はなからう。殊に受領書にある國法を曲げてと云ふ異常な文句は、これ明かに日本が自分の改心を語る

もので、又アメリカの爲に自から凱歌を謳つたものである。則ちアメリカ合衆國が和親的精神を以て差出した堅き握手は日本の孤立的の遍見を動かして、世界各國の交際場裡に出るやうにした。斯うして日本は年來の鎖國主義を棄て、四海修交の普遍的法則に従ふやうになつたのである。

然し日本は全然鎖國主義を撤解したとは謂はれず、未だ幾分か其の形跡を保持して居る事は書翰が受取られ上は速かに歸帆せられたいと受領書に書いてあるのて明白であつた。勿論提督は伊豆守の右の如き指圖は丸て眼中に措かなかつた。夫を示す爲に、提督は會見が終つて歸艦するや、否や艦隊に發航を命じた。伊豆守等は之を觀て提督が自分の指圖通りに浦賀灣を退出するのだと確信したのであらうが、夫とは反對に却つて江戸灣深く這入り込んで行つたのである。提督が斯く江戸灣の測量を決行して、四艘の軍艦を揃へて測量に従事しながら江戸近く押寄せた譯は、一方には高慢不遜なる日本政府に明かに何等かの影響を與へ、延いて日本政府が大統領の親翰に對して一層慎重なる考慮を拂ふやうになるだら

うと思つたからである。

榮左衛門の一行が軍艦を辭して歸ると、蒸汽船は各二艘の帆前船を曳いて堂々として東に向つた。指す所は此の前副官のベント大尉が測量した碇泊地にあつたので、其處に投錨したのは午後であつた。提督は亞米利加碇泊地と此處を名付けた。浦賀の前碇泊地よりは殆ど十哩、海岸へは半哩乃至一哩で、水深は裕に十三尋あつた。

見渡すと海岸一哩許の間には、赤旗を建てた警護船が列んで居て、砲臺には木綿の幕を引廻してあつた。初めは其の幕を砲臺と見間違ひさせる爲か、それとも虚勢を張る爲か、或は敵對の標であるのかなど考へて居たが、後になつてこれも旗や幟と同様に軍隊の標に過ぎない事が判つて來た。

投錨すると提督は測量船を派出した。警護船は海岸を往つたり還つたりした居たが、別に抵抗する氣色もなかつた。其の内直ぐ榮左衛門は通詞を連れて、平常の船でサスクハナを目懸けて近付いて來た。船頭は力一杯に櫓を押立てるので見

る間に艦側に漕ぎつけた。  
 観る所榮左衛門と其の同伴とは非常に激して居たが、又非常に心配の様子であつた。彼等は直ぐ船室に案内せられた。其處に艦長等が待受けて居て其の言分を冷かに聴取つた。

通詞の達之助は直ちに「何故此處に投錨したのですか」と質問を發した。夫に對して既に前にも言つて居た通り提督は安全な碇泊地を得ん爲かく深入りしたのであると答へた。すると通詞は此の邊は今迄諸外國人も遠慮して來なかつた所で艦隊は是より先に這入る事はならぬが提督は尙先へ進んで行く積りであるか、若し左様でなくば何時迄此處に投錨して居る都合であるかと尋ねた。提督は來春多數の軍艦を率ゐて來るが浦賀は波も高く風も強く碇泊地として甚だ不適當な事が判つたので他に安全なる碇泊地を求むる必要がある。其の爲猶四日間位投錨して居て灣内を探測して適當なる碇泊地を見定める計劃であると答へた。すると達之助は提督は國書の受渡しを濟むと直ぐ江戸灣を退去すると約束して置

きなからこれは何うした譯であるかと迫つて來たが、夫はたゞ海岸を退去すると云ふ約束だけで決して江戸灣を退去する約束はしない、否提督は更に灣内深く進んで行く企てであると明白地に答へた。達之助は猶も土地の人民共は外國船が近海に近付いた爲非常に氣が立つて居るから此の上測量船などが陸地に近付くと、とんだ間違が持上らぬとも限らぬからと説立てた。其處心配は無用である、短艇は陸地に近寄らないし、夫に日本人が先に手出しをせぬ以上は、亞米利加人は決して日本人と衝突するやうな事はせぬと告げた。

榮左衛門は又通詞を介して執固く艦隊の退去を求めた。而して日本政府は亞米利加人に對しては好意を持つて居る事並に大統領の親書は鄭重に審議せらるゝ事疑ないと丁寧に述べ、此の次提督が來航の時は浦賀を以て協商の地と定めて置くから夫より先には這入らぬやうにして貰ひたいとの希望を漏した。其處で、今回亞米利加人は親友として日本に來たのに適當なる碇泊地を探さうとすれば、日本政府は之に反對がましい事をするのは、誠に不道理な話である我が合衆國に於



ては外國人には總ゆる便利を與ふるのが習慣であるから、若し日本人が我が合衆國に來るならば、何處を航行しようとする自由勝手、のみならず、カリフォルニアの豊富な黄金の産地ですら開放して決して拒むやうな事はせぬと、斯う榮左衛門に返打をすると、榮左衛門は返答に詰つたものか、夫とも此の上退去を迫るのも餘り無禮と思つて差控へたものか、それ限黙つて了つて何とも言はなかつた。

話もこれで終つたので、榮左衛門と同伴とに一寸した手輕な馳走を供すると、彼等は遠慮せず直ぐ前に列べた馳走をば盛なる食欲を以て食べ始めた。其の内日本船が一艘艦側に漕ぎ寄せたから、夫に乗つて居た役人をも船室に案内して之に加へたので、恰かも一場の宴會のやうな光景を呈し、ハム、ビスケット其の他色々の物が可なり澤山列べてあつたが、瞬く間にウキスキの肴になつて消えて了つた。彼等は思ふ存分飲食したと見えて大分陽氣であつた。其の内でも通詞は非常な上機嫌で、今日の愉快な酒盛を紀念する爲に何か有形の片見を持つて歸りたいと言ひ出した。夫で彼等は腹が一杯になつただけでは満足せず、家に歸つた後も今日

のお馳走を偲ぶ量見て、パンやハムの片を廣い袂の中へ入れ込んだのである。日暮になると、彼等は軍艦の待遇に十分満足と云ふ様子で、至極丁寧に別を告げて歸つた。

十九 七月十五日

翌十五日(六月)の早朝提督は再び測量隊を出して更に内海を測量させた。三艘の短艇が兎ある砲臺の向側に漕ぎ廻ると、其處は入江になつて名を知らぬ河、遠く河上の方から美しい田野の間を蜿蜒と傳つて流込んでゐた。河の兩岸には繪のやうな村落が塊まり、豊饒な野原や善く耕された田畑が廣々と展開してゐた。士官は短艇を川に漕入れた。すると土地の人民は異人を珍しがつて海岸に一杯群つた。其の内には觀迎の意を表して、水や結構な桃などを氣輕に持つて來て呉れるものもあつた。近くには日本の警護船が二三艘泊つてゐたが、船中の役人は吾々が來たのを喜んで歡迎した。而して二三服の吸付煙草が兩國人を結付ける縁とな

つて其の間に相互に親密の情が芽したのである。

米國の士官は日本人の厚意に報いる爲に、ピストルを出して發射して見せた。彼等は非常に吃驚はしたが、面白がる事も非常であつた。斯うして愉快に全然打解けて交際して見ると日本人は應對も至つて優しく社交的である。其の時日本の役人が五六人立現はれて、人民を手眞似て追拂つた。すると宛然小兒が悪い事をして捕へられる時のやうに見る間にばらくと逃去つて了つた。やがて測量船が歸艦すると、士官や其の他の人々は皆日本人の親切な態度を聞いて大に喜んだ。殊に景色の美しいのには皆恍惚としてゐた。實際何處を向いても繪を欺くやうな景色許で幾程見ても飽きる事はなかつたのである。

此の日の午後提督は提督旗をサスクハナからミシシッピーに移して、江戸の方に十哩許進んで行つた。江戸の港は判然と南側に見えるし品川らしい町も目に留つたが江戸の町は岬に陰れて見えなかつた。

ミシシッピー號が行留まりの三四哩先には、小高い岬が突出してゐて、其の上には燈

明臺に似た塔が建つてゐた。此の塔より猶三四哩彼方は江戸の港と想はれる處に當るので、提督は江戸から僅か十哩以内の處迄軍艦を入れた事になる。鍾を下して視ると、其の近邊は二十五尋もあるので、猶進んで行つても差支ない事が判つたが、餘り恐怖を惹起させて、折角昨日都合好く渡して、今頃は多分審議中にある大統領の書翰に累を及ぼすやうな事があつてはと氣遣つたので、提督は此の上江戸の方へ進んで行く事は廢して、亞米利加碇泊地に待つてゐる僚艦の許に引還したのである。

初めミシシッピー號が江戸の近海深く這入つて行くと、砲臺の附近には恐ろしい程兵隊が屯在してゐたが、別に抵抗する模様もなく、軍事の爲よりは寧ろ珍らしい軍艦見物と云つた風に秩序なく塊つて居た。たゞ警護船が時々軍艦を見張る積て岸を放れて出て來る許であつた。

提督が斯うして江戸近海の探偵に出懸けた後へ、榮左衛門は通詞と共に贈物を入れた箱を船に積んで、サスクハナ號に漕寄せて來た。然し提督は留守であるし、且

つ陸から来たものは誰でも、特に自分の許可を得ぬ以上は、上艦させてはならぬと云ふ提督の命令であつたので、勿論榮左衛門の一行は上艦する事も出来ず、又贈物も受けられなかつた。此の旨を榮左衛門に告げると、最初は提督の歸る迄待つてゐようと言出したが、やがて何れ又來ると言つて彼等は歸つた。此の日は十二艘の短艇が終日浦賀の上の西海岸を測量したのである。

### 二十 贈物の交換

翌十六日(六一日)の朝、艦隊は浦賀から五哩程隔つた、提督がサスクハナ灣と命名した處に移つて、陸地から一哩許の處に碇泊した。榮左衛門はサスクハナガ未だ錨を卸さぬ内に再び艦側に漕付けた。彼は大統領の書翰が滞りなく江戸幕府に請取られた事、特に注進に來たにも係らず、其の返書は長崎に廻送するとも何とも言はぬ所を見ると、昨日提督が江戸の近く迄這入つて行つたのが、なか／＼利目あつて、其の爲に日本の幕府は益々米國に懐き親しむやうになり、返書を長崎に廻送す

ると云ふやうな事も遠慮したものらしい。榮左衛門は其の際贈物を持つて來た。其の中には、絹布團扇、漆塗の茶碗、煙草などがあつた。尤も左程價打のものではないが、日本の製作品の見本として何れも吾々には珍しく、日本人の技術に巧妙な事が善く判るのであつた。けれど提督の指圖で、伴の贈物は提督の贈物と引換へてなくては受取る譯にいかぬと云ふ旨を榮左衛門に通ずると、榮左衛門は例の一本調子で、夫は日本の國法の嚴禁する所であるから提督の贈物は受ける譯にはいかぬと、最初はなか／＼承知しなかつた。其處で米國の國法では贈物は相互に交換すべきもので、左様でない以上は決して其の贈物は受取る事は出来ぬと主張した。提督の決心の動かす可らざるを觀て取つて、榮左衛門はやがて、武器以外の贈物は何でも返禮に受取る事を同意した。其處で日本人が持参した物品よりは遙に價値のある二三の品を早速甲板の上に運び出させると、榮左衛門は夫を見て、此は餘り善さ過ぎる、夫に自分と通詞とが身體の周圍に匿せる物の外は何にも持つて歸る事は出来ぬと打明けた。隠蔽せず公

然受取られぬものなれば、貴方の持つて来た贈物も返却するより外はないと答へられて、榮左衛門は三振の劔の外は盡く提督の贈物を納めて別れを告げた。此の日の午後、榮左衛門は通詞を伴れ、僅か鶏卵五函と鶏百五十羽許を籠に入れたのを持つて再び軍艦に訪ねて来た。彼等は非常に機嫌が好さうに見受けられたが、夫は多分今朝提督から贈物を受取つて歸つたけれど、別段苦條も受けずに済んだからであらう。提督は鶏と鶏卵を受け代りに、榮左衛門と通詞との妻君へ夫々の贈物をして其の帳消しをした。一體この贈物の交換と云ふ事は、日本にては外國人との間に前例のない事で、之が又日本を促し立て、獲得した一つの重要な事柄である。

榮左衛門に贈つた品物の中には、亞米利加産の色々の草木の種子や、酒やカステラ、ピッケット牛肉などがあつた。彼は何時ぞや軍艦の饗宴で試みた味を覚えて居たので、眼敏く酒の容れてある大きな函に目を著けた。榮左衛門及び通詞の達之助、得十郎は如何にも愉快相に艦内を彷徨いて、最後の訣別を告げるのが殘惜し氣に

見えた。而して彼等の爲に設けた午饗には非常に快活に打解けて列つたのである。

榮左衛門は生得温好の質である所へ、三鞭酒の爲餘程遠慮も取れたので、一層濼泊になつて来た。榮左衛門が亞米利加人に厚意を有つて居る事は皆一様に認むる所て、愈訣別の曉には泣かれずにはゐられぬと彼が自から言つたのを見ても、どれ程亞米利加人を慕つて居たのかが判る。通詞は奉行より酒量も好く、夫に幾分か差扣へて居たが、非常に上機嫌なので少しも氣がおけなかつた。達之助は惻口相な顔をして、低い私語くやうな調子で、大統領の書翰が満足な返答を得るやうな好都合になつた事や、榮左衛門が現職の浦賀奉行から或榮職に昇進の噂などを漏した。とは云ふものゝ、日本人は外交にかけては些々たる利益でも逃すまいと終始注意を怠らず、斯のやうに酒で氣樂になつた時でさへ、自分の職分は決して忘れな。夫てブッカン大佐が提督は明日江戸灣を退去する計劃であると語ると、慧敏なる達之助は突然三鞭酒の杯を下に置いて、酒興の最中にも係らず、不段のやうに

眞面目になつて、今大佐が被仰つた事を覺書にして貰ひたいと請求した。然し大佐は冷かに之を拒んだ。

やがて彼等は歸仕度さして、自分達が受けた厚遇を言葉で極めて謝し、亞米利加の親友と別れの残り多い事などを述べて、士官達と熱心に握手し、甲板の兩側に列んでゐた人々には微笑みながらお辭儀しつゝ、船に歸つた。而して船の中に敷いた疊に座るや否や、榮左衛門は自分の妻君への贈物の箱を直ぐ様開かせて、眞先に現はれた酒瓶を取り出し、もどかし相に瓶の口を抜いて、中の酒を飲み始めた。これは確に別れの酒杯と云ふ意味で、榮左衛門の例の慇懃な心遣であつたのだ。彼等の乗つた小船は直ぐ浦賀の出鼻に隠れて了つて、鄭重な榮左衛門も、博學にして才能なる達之助、得十郎の姿も最早見えなくなつた。

### 二十一 江戸灣退去

浦賀奉行の香山榮左衛門は前後數回サスタクハナ艦に来て交渉の任に當つたが、其

の間、提督が何日迄滞留の積か夫を非常に知りたがつた。而して其の度毎に、外交に關した事柄は決定する迄には非常な手間を取る、之が日本の政府の慣例であるからと注告するのであつた。其處で一つには此の注告の爲又一つには大統領の親翰中に認めてある提議は日本に取つては重大な事柄で、若し日本が之を承諾する場合には國家の大法を幾分か覆さねばならぬやうな性質のもので、従つて審議に時日を要する事を知つたから、ベルリ提督は日本政府の返答を待たずに直ぐ様此處を退出する方が策の得たものと考へた。のみならず、他にも亦重大な事情があつたので、愈退出と決心したのである。其の事情と云ふのは、即ち艦隊の糧食薪水の缺乏であつた。其の當時、提督は此の先一ヶ月を支へるだけの準備しなかつた。故に若し日本の官憲か明白な理由を設けて満足な返答をせず、諸侯を召集して討議するの、其の上大裏の裁可を仰ぐ必要もあるのと、一日述べし二日述べす内に、艦隊は否應なしに出帆しなくてはならぬ破目に至る事は見え透いてゐた。而して其の結果は日本政府の勝利となり、今回の使命を全うする爲には非常な障

害となるもので、提督は善く此の邊の消息を呑込んで居たのである。以上の外日本政府の最後の返答を來春になつて受取つた方が提督に取つて更に都合の好い事情があつた。と云ふのは、其の當時支那には内亂があつて、在留亞米利加人の生命財産も幾分か危険を感じたので、夫を保護する爲軍艦派遣の必要があつた。所が到着すべき筈の軍艦は未だ本國から來らず、夫に此の儘日本に滞在する以上は僅か四艘の軍艦を割いて派遣する事も出来なかつた。のみならず日本政府から大統領の親翰に返答のある時捧呈すべき贈物を積込んだベルモント號は未だに來着しなかつたので、其の用意も出来て居なかつた譯である。右のやうな種々の事情からして、返答は來春迄待つ方が總ての點から得策であるし、且つ其の時は艦隊を悉皆集め、糧食石炭船を從へて行く便もあるし、又日本政府の意向を確むる餘裕も十分ある譯である。其處で提督は早速江戸灣を退去し來春再び返答を聞きに來航する旨を認めた手紙を與へて、七月十七日(六月十二日)の朝、錨を引揚げ、サスクハナはサラトガ號を、ミシシッピーはブリマウス號を曳いて直に進

航を開始したのである。

此の朝は天氣が好かつた。亞米利加人が出立したと云ふ事が既に日本人に取つて大事件であるのに、四艘の軍艦が堂々と波を蹴つて進む有様は珍らしとも、怖ろしとも見えなかつたので、陸上には人民が一杯集つて軍艦を眺めて居た。浦賀の岬には砲臺から繰出した兵隊が犇々と折重なり、中には山の頂上目懸けて駈け昇るものもあつた。軍艦が沖合に出ると遠くて善く見えぬものは船を艘ぎ出したので、見る間に海上は數百艘の船で掩はるゝに至つた。やがて艦隊は富士の高い頂を前後に眺めつゝ、江戸灣を出たのである。七月八日浦賀に投錨してから、今日江戸灣を退去する迄都合十日間の滞在中、提督は日本政府が未だ嘗つて外國人に拒んで與へぬ所の利益を得たのである。即ち第一警護船の解除。第二、浦賀に於て國書の交附。第三、江戸灣の測量。第四、贈物の交換。これである。

## 第四篇 琉球の卷下

### 一 琉球再度の訪問

江戸灣を放れると暴風が吹出した。二隻の蒸汽船すら思ふまゝに嵐に掀弄さるゝので遅々として進まない。己むを得ず、一番天頂の檣を取外して下に下し、大砲は強い太索で確と縛付ける始末であつたが、幸無事で、江戸灣を抜錨してから九日目の七月二十五日(六日)に琉球那覇に着いた。

提督は到着早々琉球の官憲と商議を開く準備に取掛つた。提督は日本に於て比較的に成功したから、琉球に於ても夫に劣らぬ成功を得らるゝ事を確信して居た。然し提督が日本訪問中後に残して置いたサブライ號の士官の言ふ所を聞いて見ると、琉球人は彼等に對して敢て不親切ではなかつたが、相變らず隔意を置く事甚だしく、間喋をつけるのも以前と少しも異らなかつたと云ふ事である。今度の來

航は實は上海に赴く途上に立寄つたので、ほんに少しの間しか滞在出來ず、まして例の呑氣な琉球人の因循姑息な策略で、愚圖々々時を費すやうな閑は一瞬間もなかつたから、提督は早速攝政に會見を求めた。此の請求は直に容れられて、會見の日も定まつたが、提督は會見に先立つて豫め自分の要件を攝政に知らして置くのが得策と考へたので、之を那覇の里主及び役人達の前に開陳せしむる爲、アダムス參謀長に支那語の通譯ウキリアムをつけて陸上に遣した。其の要件の第一は家屋の借受け、家賃の割合並に支拂の方法を定むるにあつた。即ち石炭貯藏庫として六百噸を容れるに足る恰好な家屋を欲いが、若し琉球官憲の望む所なれば、當方にて琉球の大工を使つて琉球風に建築しても宜しいし、又琉球政府の費用で里主の監督の下に建築さるゝとも夫は適當で、夫に對して年々相當の家賃を支拂ふ事に致すから、何れか一方に取極めてたいと云ふ事であつた。

第二は間喋に關した事で、今後間喋が相變らず我將校の後を跟け廻すに於ては、其結果恐らくは血を見るやうな不幸が起らぬとも限らぬ、固より如何なる變事が起

らうと、正々堂々、好誼を旨として一點不正の行爲のない吾々アメリカの公民に間喋などを附けるとは、第一琉球人の過失であつて、其の責は琉球人にあると謂はねばなら事である。

第三は市場に於て物品の自由賣買を許す事と、軍艦の需用品購入の道を開く事とであつた。其の次には那覇滞在中に病死したサスクハナ號の給仕の墳に石碑を建てて呉れた返禮と、石碑代の支拂などの事であつた。

アダムス參謀長は以上の要件を那覇の里主の前に出した。里主は自分の權限では如何様にも取計ふ事が出来ないから、通事官か攝政に申出して貰ひたいとの挨拶であつた。其處で提督は、夫ては明日か明後日、攝政に會見致したい、最も會見の場所と時日とは攝政の都合次第で宜しいが、其の時は、攝政閣下には以上の要件に

否應なしに賛同せらるゝ用意で来るやうに申傳へて貰ひたいと語つた。すると里主は、早速此の旨を攝政に傳達致し、會見の場所と時日とは追つて報告する事に致しますと答つた。

翌朝提督の副官コンテ、大尉は那覇の里主を訪問して、攝政が明二十八日那覇の公館で提督と會見の事を聽いて歸つた。

### 二 事の決定迄宮殿を占領せん

會見は二十八日の午後二時那覇で開かるゝ事に定まつて、攝政は正午に首里を出立する手筈になつて居た。午後の一時半に小船が一艘親雲上の尙某を乗せて、サスクハナに漕付けた。親雲上は軍艦に上つて來て、接待の準備は悉皆整つて攝政は先刻から待つて居ると提督に傳へた。會見所は那覇の公館と云ふ建物で、此處は公用に使はるゝ場所である。

提督はアダムス參謀長、旗艦副官コンテ、大尉、ミシシッピー艦長、レー、ブリマウス艦長、ケレイ及び他の十二名の將校を従へて上陸した。一組の琉球の役人が親雲上を先頭にして、提督一行を立迎へて會見所たる公館に案内した。公館は那覇から首里に通ずる大通に面して居て、海岸からは一哩許、小さいながらも小綺麗な建物



て、周圍には高い土塀が廻らして、外から見えぬやうに圍んであつた。那覇の里主は屬僚を従へて入口に立つて居たが、攝政は提督を出迎へに奥の間の入口迄進んで來た。奥の間には既に饗應の卓子が列べてあつた。其の様子は前攝政が首里で催したと同じ風で、たゞ規模があれ程大きくないだけであつた。儀式も悉皆前通りで、提督とアデムスとは一番上の卓子に著席し、攝政と里主とは向き合つて左の卓子に坐つた。

茶が運ばれると、攝政は提督に「恙なくお歸りになるのをお待ち申して居りました」と随稱めいた挨拶をした。通譯の役に當つたのは板良敷と云ふ人で、ウキリアムと支那語で會話を續けた。提督は其の時自分は二三日の内に支那に向つて出發する、二三ヶ月の以内に亦琉球に歸つて來るが、然し出發する前に兼ねて申出して置いた要件は決定したい。自分の要求は固より正當なもので、當然同意せらるべき筈である。亞米利加人は口數は寡いが、一度言外した事は決して後へ引かぬ人間である」と云ふ事などを説いたのである。すると攝政は、早速返答する事に致しま

すから、先づお馳走を召上つて頂きたいと勧めた。提督は、お馳走は第一用事を片付けてからの事であると、それを卻けて續いて元來此度の要求は公平な單純なもので、許すの許さぬのと暇を取るの甚だ殘念な次第である。既に日本にては極めて鄭重な待遇を受け、日本政府とは贈物の交換もなし、國民とは親密な交際を取交したのであるから、これと同じやうに琉球人も親密にいたしたい希望であると述べた。夫に續いてウキリアムは提督の指圖に従つて、伊豆守、石見守の接待振江戸灣の測量調査の事などを搔摘まんで話した。之に對して攝政は、夫ては歸艦する迄に大至急返答を致すやうに取謀らひませうと答へた。

其處で饗宴が始つた。十二通の吸物が七八通出た時手紙が攝政の許に來た。攝政は夫を受取り、里主と通事とを伴つて、提督の卓子の前に進み、如何にも謙遜の態で件の手紙を差出した。手紙は封筒に收めて大きな琉球の印が捺してあつた。ウキリアム通譯は提督の命令で、開封して其の場で讀んだ。其の文句は、先づ琉球の小國なる事から書出して、英國の宣教師ベトルハイム博士が一人居留して居てさ

へ、非常に困らせられてゐるのだから、此の上石炭庫が建てられたら益々困る許である。亞米利加人が使つた寺は佛事の勤行が出来なくなつたので廢寺になつて了つた。琉球の産物と云つても茶、生糸、上布、其の他の物は皆日本や支那へ送出して了うから寡いし、賣買、市場の事は人民の自由勝手であるから見世を閉めようと、物を賣るまいとも攝政は夫を如何する事もない。夫に上陸する毎に間喋をつけると云ふ事であるが、彼の人達は間喋などではなく特に案内のため、又人民が防害をせぬようにと警戒する爲に任命した役人であるが、若し無用であるし、又反對と云ふ事ならば、以後決して彼等を附けぬ事に致しませうと長々しく書いてあつた。以上の手紙が讀み終はると、提督は、少しも自分の意に満たぬ受取る事は出来ぬと言つて夫を攝政に返した。而して提督は、吾々の要求は公平で決して琉球に許無理な注文をするのではなく、諸國民も同意し、支那にても既に同意を得、日本からも得ようとして居るより以上の事を琉球に求むるのではない。又寺院に關しても、吾々は家賃を支拂ふ覺悟であつたし、夫に琉球側で勝手に撰定して吾々の使用に

當てた許でなく、今迄外國人が來た場合には同じやうに使用させて置きながら、今更吾々に向つて苦情を言ふのは少し受取り難い。又吾々は旅行して居るので、土地の肥沃な事も、人民の豊かな事も、色々の産物に富んで居る事も、ちやんと知つて居る。琉球人が受けた品物に對しては必ず相當の代金を拂ふのだから、吾々の滞在は畢竟琉球人の利益で、軍艦は市場のやうな物である。又石炭庫も琉球側で建てるのが厭ならば、當方で建てる事にしよう——斯う云ふ風に答へさせた。すると攝政は提督の御相談には難しい處があるので、善く熟考した上でなくては、摺揆が出来ませんと答へた。提督は、自分の要求は決してそんな難しい物ではない、正當な單純な躊躇せず容れらるべきものである旨を繰返し、續いて、琉球人も其の時になつて亞米利加に害意のなかつた事を知るであらう、吾々の内には琉球人を苦しめようなどとする者は決してないが、然し相變らず間喋を執拗附ける場合には如何ならうと自分は其の責任を負ふ事は出来ぬと言つた。其の時攝政は再び進み出して何とか挨拶をしさうな氣配であつたが、提督は起上つて退出の用意をな

し、若し自分の要求全體に對して満足な返答を明日の正午を期して與へられぬ場合には、二百の兵士を上陸させて首里の宮殿を占領し、事の落着迄留つて居る覺悟である。斯う提督は宣言して退參した。攝政は門口迄提督を見送り、伴の將校が皆出終へる迄其處に立つて居た。提督は眞直にサスクハナに歸艦した。

### 三 提督の要求は悉く許容された

新攝政は琉球の首鼠兩端主義の策略にかけては、なか／＼の老手で、様々の口實を設けて、提督の要求に對して直接に返答を與へた事がない。然し提督は琉球政府の虚構や術數に僻易せず、東洋風の陰險な外交には側目も振らず、自分の宣言した目的に向つて堂々と直進した。而してアダムス參謀長とブツカナン大佐に通譯のウキリアムをつけて那覇の里主の許に遣はし、昨日の返答を求めさせた。所が此の使者の上陸と共に思ひかけぬ事が起つた。事柄から云へば些々たるものであるが、夫が臆病な琉球人には尠からず効果があつた。と云ふのは提督が一人の大工

を遣はして、泊の寺に藏つてある、嘗つて首里宮殿に參城の時使つた轎を如何なつたか見にやつた。此を見た琉球人は膽を潰して、大工の行動をば非常に心配氣に注目した。而して一圖に、提督が勝利者として兵隊共に擔かれて宮殿に乘込むに違ひないと思込んだのである。此の轎を見にやつた事は、偶然とは云へ、非常に好機會に出會つたため、確かに琉球政府の決心を早むる一つの原因になつた。夫て那覇の里主は、自分の權限内で提督の要求に應ぜんとする氣色を大に示し、アダムス大佐は里主から、提督の要求は早速攝政の許に傳達致すから、明日は間違なく確然たる返答を致すと云ふ挨拶を得て歸艦した。偕て翌朝十時頃になると、那覇の里主が提督の要求は悉く許容せられたと云ふ報知を持つてサスクハナに來りて、政府が遂々讓歩して提督の要求に應じた點などを細々と物語つた。石炭庫に就いては既に琉球の手で建築の準備が整へ、家賃は一ヶ月十弗と定まつたが、市場に關しては、婦人が外國人と直接賣買するのを嫌忌するから、市場に近づく事は難しからうとの事であつた。其處で双方互に讓歩し

合つて、那覇公館で、賣店を開き、普く國內の産物を陳列して、亞米利加人の求めに應じて賣らしめる事になつた。里主は次の日曜に賣店を開かうと申出したが、日曜は耶蘇教徒に取つては安息日であるし、月曜の朝の九時には艦隊が出帆する積であるから、月曜朝の六時に開いて貰ひたいと言ふと、里主は夫を承諾して歸つた。一體琉球政府は提督の要求に對して好意的の回答を與ふるの必要な事を早くから認めて居り、現在里主は其の回答を齎して來艦して居りながら猶も提督の計劃に執固くつまらぬ反對をする癖があつた。例へば石炭を海岸に置くと土民に盜まれる恐れがあると、言出したから、石炭一塊でもなくなつたら琉球政府の責任であると、答へると、里主は論鋒を變へて、琉球では實に暴風雨が烈しいから必ず石炭庫を流されるに違ないと云ふやうな反對を提出するのであつた。這麼具合に琉球政府の遺口は丸て人を瞞著するのが持前で、夫をやらなくては居られぬかのやうで、結局承諾しなくてはならぬ事でも、出来る處迄は押強く瞞着して行かうとの量見てあつた。

#### 四 パザー

提督と那覇の役人との協議の結果、八月一日の朝の六時に、艦隊出發前の僅かの時間を利用して、パザーが那覇の公館で開かれた。會場には琉球の産物を澤山積上げて、善く準備を整へてあつた。其の内には種々の色の漆で塗つた椀、盆、小箱の類、芭蕉、布、木綿、絹の帶、地草履、留針、扇子、漬物、煙草、煙草入など様々な土地の産物が列べてあつた。其の間に立つて、通事の板良敷は巧に斡旋の勞を取つて居たが、其の行動を見ると、寧ろ下司張つた浮浪商人、普通の仲買人同然な事をなしつゝ、部下の役人を引連れて忙しく駆け廻つて居た。軍艦から上つて來た連中が盛に買立てると、品物は段々減つて來る。左様すると最初は夫程高くなかつたものが、追々にせり上つて行く其の鹽味は何處も同じ商賣の掛引で、琉球人もこれには一歩も後れて居なかつた。夫で軍艦から行つた連中の内には、同じ品に對して殆んど他人の倍近く拂つた者も尠くなかつた。

やがて艦隊出發の合圖が出ると、買物の連中は夫々軍艦に歸つた。提督は琉球島民と亞米利加人との間に出来かゝつた好情を此の先長く持續して行くには、始終軍艦を碇泊させて置く必要があると認められたので、ブリマウス號(艦長ケレイ)を殘置いて、此の朝の八時に香港に向つて解纜した。

提督の斷乎たる要求の結果僅か二日前に工事に取掛つた石炭倉は出發の日には骨組が出来て、聞く所によれば、其後二日餘て悉皆出来上つたと云ふ事であつた。間口は十間、奥行八間餘あつて、裕に五百噸の石炭を容れるに足るが、其後又必要に迫られて鍵手に一棟増築させた。

那覇を去つて二日目の夕方、サスクハナ號とミシシッピー號とが香港指して進んで行くと、遙か前方に當つて、帆が一つ、西南の方向を取つて進んで來るのが見えた。最初は何船かしらと怪んで居た所、薄暮にも係はらず大砲を發つて、サスクハナ號の提督旗に挨拶したので、疑は晴れて、兎に角亞米利加軍人に違ひないと思つて居る内に、長い間待受けた帆前船バンダリア號と云ふ事が直ぐ判つた。其處でサス

ハナ號ではバンダリアの艦長に來艦の信號を與へて、其の方に舵を向けて進んで行つた。艦長ポープは早速短艇でサスクハナ號に來り、提督に航海の模様を報告し、同時にポープハタン號が合衆國から香港に到着したが、琉球に向つて出發の計劃中であつたと語つた。提督は此を聞いて、若しや自分が香港に到着せぬ先に、ポープハタン號が出發しはせぬかと非常に心配し、其處でバンダリア號にも一處に香港に歸港を命じて進航を續けた。サスクハナ、ミシシッピー等の蒸汽船は、八月七日に到着したが、其の時は既にポープハタン號が出發した後なので、提督は失望した。バンダリア號は八月十五日に初めて香港に着いた。ポープハタン號は一度琉球に行つて、其處で機械の修繕に十日間許費し、八月廿五日に香港に歸港した。

### 五 魯佛の行動に疑を懷く

提督が香港に着くや否や、廣東の亞米利加商人は革命の事態の容易ならざるを説いて、生命財産の保護を提督に求めた。提督はサプライ號を廣東に派遣し、ポープハ

タン號をワシントンに留め置き、艦隊は香港と澳門との間にある某港に集合して置いた。而してサプライ號の艦上には歩哨を立て、又夜中變事の起つた時の用意に士官を上陸させて亞米利加商人の家に遣はして置くなど警戒に努めて居たが、其の間に支那人が本氣に革命を遣つて居る事を少しでも確めるやうな些細な出來事すら起らず、廣東は初めて來た時と同様に、平穩無事で、亞米利加艦隊が滯在中は支那人同志で殺し合ふやうな事はあつたにせよ、外國人に害を及ぼすやうな騒動は起らなかつた。

其の内日本に歸るべき約束の時も近づいて來たので、提督は艦隊を率ゐて支那海を去らねばならなかつた。夫には廣東警備に當つた、サプライ、ボーハタンの二艦も一處に連れて行く必要がある。幸支那の革命は以上のやうな有様で心配もなかつたから、提督は出發前に廣東の亞米利加商人に其の譯を説伏せて、以上の二艦の代りに、一艘の小蒸汽船を借り受け、夫を武装して艦隊不在中廣東在留民の保護に當らしむる事に定めた。其處で提督はクエンと云ふ新造の好恰な小蒸汽船を

一ヶ月五百弗の船料で六ヶ月借入れ、之に十分武器を備付け、乗込員は艦隊から撰り集めて、ミシシッピー號のアルフレッド・テーラー大尉を指揮官に任命したのである。これより前十一月の末、當時澳門に碇泊して居た佛蘭西軍艦コンスタンチン號の艦長が一兩日の中に旅行中の佛蘭西公使ブルボン夫婦を乗せて上海に向ふと云ふ事は隠れもなく世間に知れて居たのに、歐羅巴から郵便船が到着すると、秘密の命令によつて、突然足許から鳥の立つ如く出發して其の行衛を晦まして了つた。丁度其の時、魯西亞の提督ブーチャチンがバラス號に坐乗し、軍艦四艘を率ゐて長崎から上海に着いた許であつた。提督は魯艦が再び日本に歸り、最後に江戸に赴く計劃に違ひないと見抜いた。而して其の場合には自分の目的と非常に衝突する懼があつた。夫に又佛蘭西艦長の目指した所も同じく江戸であつたのだらうとの疑問が起つたので、献上品を積込んだ運送船のレキシントン號の到着が待遠くて堪らなかつた。提督は此の儘愚圖々々待つて居て、魯西亞や佛蘭西に先鞭を着けさせるよりは、一層の事、險惡不便なる嚴冬の航海を犯して出發しやうと決心し

たのである。提督が一度斯う決心した以上は、峻然なる寒中に不親切極まる日本の海岸で屢々遭遇する名立たる、暴風濃霧其の他様々の危険も其の決心を阻む事が出来なかつた。

初め提督は春になつてから日本に出發する計劃であつたのに、斯う急に出發するやうになつたのは、魯佛の行動に疑を懐いた爲であつた。幸其の内に待受けたレキシントン號も到着したので、提督は早速出發の準備に取り掛り、無用なものは卸し入用な物は積込み、一千八百五十四年一月十四日、サスクハナ號に座乗し、ボーハタ、ミシシッピー運送船レキシントン及サウザムブション等を卒ゐて、香港を解纜して琉球に向つた。マセドニアン及サブライはバンダリア號と一處になるやうに二三日前に琉球に派遣して置いた。プリマウス號は上海に行つて居たので、サラトガ號には直ぐ後から琉球に来て艦隊と合するやうに命令を與へた。

斯うして提督が將に出發しようとする所へ英國郵船が到着した。夫と共に本國海軍省から艦隊中の蒸汽船一隻を割いて、不日赴任の新任支那公使マクレーンの

使用に供するやうにと云ふ指圖書が届いた。之には提督も大に困つて了つて、若し自分の計畫を此の儘延ばすとすれば、使命を完うする事の出来ぬ恐があるので、如何しても今の處直ぐ海軍省の命令通りに艦隊の勢力を殺ぐ事は出来ぬ。兎に角江戸灣にて確乎たる實績を握る迄は軍艦を割く事は延ばさうと決心した。而して英國郵船が届いた日本へ献上の荷物は、廣東の商人の手を借りて上海に廻送し、サラトガ號に積込ませる事にして、提督は早々香港を立つた。

五艘の艦隊の中蒸汽船は一月二十日に、帆前船は後れて二十四日に漸く那覇に入港した。其處にはマセドニアン、バンダリア、サブライの三艘が既に碇泊して居たが、サラトガ號は未だ見えなかつた。

## 六 斷狀と共に貨幣を返して來た

六個月振りて琉球に來て見ると、亞米利加人に對する琉球人の態度ががらりと變つて居たのに氣が注いた。政府は入用の品物をさつくと供給して、其の代價も

當前と言つた風に受取る、人民は以前のやうな遠慮を幾分か打棄て、馴れ親しむやうになつて来た。通行の人も外國人を見馴れて了つて避けようともせず、殊に婦人すら最早市場から逃げ去るやうな事はなく、外國人が這入つて行つても一向平氣で見世の番をして居た。

提督は到着早々、攝政に那覇を立つ前に、首里宮殿訪問の意向を通じた。すると攝政は、提督が神聖な宮殿に參内するのを非常に厭がつて、那覇なれば何處でも望みの所を接待所に致すからと、言葉を低くして断つた。然し提督は堅く前言を執つて、王城へ行くのは琉球國に敬意を表する爲であるから、訪問當日は我等一行を乗せる馬、轎、轎擔等を用意して置いて貰ひたいと答へた。攝政は少しも屈せず、例の琉球一流の見え透くやうな策略を弄して、色々と楯突いたが、提督は唯最初の決心を繰返す許であつた。遂々攝政も如才なく我を折つて、總ての仕度を整へて首里の宮殿で提督をお待ち申すと云ふ事になり、提督は一月三日、護衛の兵隊を従へ、お伴の士官を連れ、頗る儀式張つて宮城を訪問した。其處で前回通りに鄭重な接

待を受け、夫から直ぐ攝政の邸宅へ赴いた。攝政邸には盛な饗應が設けてあつた。此の時は吾々亞米利加人も多少琉球料理に馴れて居たから、前回のやうな不體裁をせずに済んだ。

元來琉球では日本帝國の貨幣を使つて居るのだが、如何して隠蔽して了ふものか、今迄目に觸れた事がない。其處で提督が右の席上で、琉球の貨幣と亞米利加の貨幣とを交換したいものだ、と攝政に語ると、攝政と親雲上とは琉球には素より貨幣は一つもない、たゞ在住の日本人のみが幾程か持つ事は持つて居るが手放はしませんと答へた。提督は之を又例の偽りと思つて、出發前に交換して呉れるやうにと、亞米利加貨幣五十弗許を彼等に渡して歸艦した。所が艦隊が那覇の港を解纜し、ようとする夕方になつて、琉球國中山府總理大臣尙宏勳及布政大夫馬良才の署名ある手紙が届いた。要するに夫は、各所で色々と交換を試みて見たが皆不成功であつたと云ふ斷狀であつた。其の理由としては、日本と琉球間の商賣は實物交換であつて貨幣は少しも使用せぬとか、髮挿にする金や銀は何れも支那から來るも



のて之も品物と交換だとか、又日本人と取引する球人の間を探して見たが、日本の國法では貨幣を國外に持出すのを嚴禁して居るから従つて誰も持つて居るものがないなどと云ふ事を舉げて、此の斷狀と共に前に渡した貨幣をそつくり返して來た。然し提督は夫を拒んで受取らなかつたから、貨幣は其の儘彼等の手許に残つて居るのである。

今回の滞在中に琉球の國情、物産等總て調査が出来たから、一月七日提督はサスリハナ、ポーハタン、ミシシッピーの三隻の蒸汽船を率ゐて那覇を出發して江戸灣に向つた。これより先一月一日に、マセドニアンの艦長アボットがバンタリア、レキシントン、サウザムプジョン等の帆前船を率ゐて出發して居た。夫は艦隊が同時に江戸灣に乘込むには、速力の遅い帆前船を先に出して置く必要があつたからである。サラトガ號は提督出發の翌日上海に赴いて、艦隊へ届いた荷物を積入れ、江戸灣へ廻航すべしとの命令を受けた。

### 第五編 浦賀の巻下

#### 一 將軍の訃音

那覇を出發する前に、提督は和蘭の印度總督から、日本皇帝(譯註、實は將軍家慶のこ思違ひを帝としたのであるが之は)が大統領の親翰を受取ると間もなく亡くなつたと云ふ通知の手紙に接した。夫によると、日本政府は長崎出島の和蘭商館の監督に、將軍薨去の爲め哀悼の儀式や相續者撰立など非常に用事が取込んで居るので、當分大統領の書翰の事に係つて居られず従つて其の挨拶も遅れるから其の旨亞米利加政府に傳へて貰ひたい。夫と同時に亞米利加艦隊がベルリ提督の約した時期に江戸灣に歸つて來るやうな事があると、其の爲必ず騒動が持上るから、歸つて來るのを延ばして呉れるやうに傳へて貰ひたいと呉々も頼んだ事が判る。提督は早速返事を認めて、手紙の返禮やら將軍薨去の哀悼やらと共に、日本の執政者は合

衆國の意向に満足して居るから、日米兩國の親交を破るやうな心配のない旨を答へた。提督は此より餘程と前に、魯國艦隊の或將校から將軍の亡くなつた事も、魯國艦隊の提督が長崎から江戸幕府に送つた手紙が和蘭總督が述べたと同じ理由の下に何等の返答を得る事が出来なかつた事も聞いて知つて居たのである。然し昨年の七月、戸江灣に滞在して居る間は、將軍の病氣の噂すら聞かなかつたし、且つ夫から問のない事であるから、最初薨去の訃音を耳にした時は、之は米國との協約を避けようとの一種の口實だらうと提督は疑つた位である。勿論將軍が事實薨去した所で——其の事實なる事は後に明かになつたが——國際間の公事を延期する理由は少しもないと考へたので、提督は此の凶報に遠慮して自分の計劃を中途で差控えるやうな事はしなかつた。

元來提督の重なる目的と云へば、既に前にも述べてある通り、遭難の爲日本の海岸に漂着した亞米利加人に對する日本政府の取扱に就いて其の説明を求め兼ねて今迄のやうな日本政府の處置は最早合衆國政府の容赦出来ぬ所であると云ふ旨

を告げるにあつた。其の次には亞米利加船舶の爲に尠くとも港を一つ若しくは夫以上開かせる事と出来得べくんば正義と公平とを本として日本帝國と條約を締結する、若し一般條約を結ぶ事が出来ぬならせめて商業上の最好條約を結ばうと云ふ事とにあつた。然し此の目的を甘く仕遂げて、遺憾なく使命を果す事が出来るか否やは、随分疑問の裡にあつたが、提督は合衆國の爲には如何なる苦勞も辭せず、日米兩國の關係を作るが、米國の利益に缺く可らざるものであるから、極力夫に骨を折らうと決心したのである。

愈々艦隊が那覇を出發するので、其の二三日前から、サラトガ號の到着を待明したが、出發迄には見えなかつた。多分港外で出會ふだらうと思ひながら、艦隊が錨を抜いて港を放れると、間もなく此方を指して近寄つて来る帆影が一つ眼に付いた。案の如く夫はサラトガ號であつた。而して上海から積んで來た日本への贈物を容れた三個の行李は早速サクスハナ號に移され、艦長ヲルカーは眞直に江戸灣に向ふべき命令を受けた。

斯うして二月十一日(四月十)に艦隊は江戸灣の入口に進んだが、折しも劇浪怒濤が北から又西から暴立つたので、其の夜は大島の風陰に隠れて夫を避けた。

### 二 マセドニアン號の坐礁

十二日(十一月)になると天候は平穩になつて、陸地の位置は前に見た事があるので直ぐ夫と判つたが、季節の異つた爲様子が全然變つて了つた。富士の高い頂は相變らず明瞭と聳え立つて見えたが、すっかり冬の白装束になつて、青々して居た遠近の山や丘も何時の間にか楽しい夏の景色を失つて見る影もなく凋落して了つて、遠くの間々は雪の衣を引被いて寒さうに震ひ立つて居る。而して肌を劈くやうな酷い風が毎日のやうに吹荒れるのであつた。

提督の率ゐた蒸汽船の一隊が陸地に近づく、軍艦が二隻確かに碇泊して居るのが見えた。猶近寄つて見ると、夫は先發のマセドニアン號とバンダリア號とであつて、バンダリア號は信號旗を掲げてマセドニアン號の坐礁を知らせた。坐礁

したのは(註、鎌倉の附)昨日の十一日、これはアポット艦長が江戸灣の入口を間違ひ、餘り海岸近くに寄つた爲であつた。それで種々手を盡したが船は動かかなかつた。同行のバンダリア號のボイプ艦長も早速錨を卸し、短艇を送つて引卸しに手傳ひ、日本人も亦手を貸して呉れたが矢張駄目であつた。其の時幸にも提督の一行が到着したので、マセドニアン號は難なく引卸されたのである。

初めマセドニアン號が坐礁した時、日本官憲は江戸灣内の亞米利加碇泊地(譯註、小)に碇泊して居たサウサムプトン號に使を立て、二艘の亞米利加軍艦が鎌倉表に著いたが、其の内一艘が坐礁したと云ふ旨を傳へたのみならず、救助にも色々と盡力するなど、我國人に對して十分の厚意を盡したのである。

### 三 眞直に江戸に赴かんのみ

翌十三日(十一月)の朝、マセドニアン號は鎌倉近在の河津浦の遭難地を放れ、レキシントン、バンダリアの二艦を先頭に立て、サスクハナ號に曳かれて、ミシシッピー、ボイ

ハタンの全艦隊と共に舳舻相啣んで江戸灣に向つた。やがて浦賀の前に差懸ると、條の小旗を建てた無数の警護船が屈強の船頭に盛に漕立てられ、前回の如く軍艦検分の爲め進んで来た。胴の間には役人が突立ち上つて舵を軍艦の方に向けて来たが、艦隊は夫を拂除けながら、針路も變ぜず、速力も緩めず、眞直に目的の碇泊地を指して進んだ。警護船は遙か後に残され了つたが、猶も艦隊の跡を追つて大急に漕いで来るのが見えた。而して其の日の午後三時に亞米利加碇泊地と呼んだ小柴沖に著いた。此處は蒲賀から十二哩、江戸から二十哩距つた所で、先著のサウサムプトン號を合せ、前述の三艘の蒸汽船と四艘の帆前船と都合八艘が錨を卸したのである。

艦隊が未だ錨を卸さぬ内に、早くも二艘の警護船が、サスクハナの艦側に漕寄せて来た。中に乗つて居た日本の役人は直ぐ上艦を求めたが、其の時恰かも提督は旗艦をサスクハナからポーハタンに移さうとして居た處であつたし、又提督の方針として下級の役人とは會見せぬと云ふ事であつたので、彼等の旗艦に上るのを許

さなかつた。其の代提督はアダムス參謀長に命じて彼等をポーハタン號で接待せしむる事にした。其の時アダムス參謀長は、ベルリ提督から、日本人の申立を悉皆聞取るやうに、然し大事な事は一切彼等に語らぬやうに、又何事も彼等と約束せぬやうにと云ふ詳しい特別な指圖を受け、通譯のウキリアムスとポートマン其の他提督の秘書官ベルリを連れてポーハタン號に赴いた。警護船も其の後についてポーハタンに赴き、派遣員は直ぐ上艦を許された。

日本の派遣員は黒川嘉兵衛(譯註、浦賀頭)と名乗る高位の役人と、前回の通詞二人と外に灰色の服装をした三人の役人と都合六人から成立つて居た。後の三人は目の運用に妙を得て居ると見え、目付役即ち言葉通りだと「藪覗み」又は「八方覗み」、他の言葉で云ふと、間喋又は探報者と云ふ役柄の人達であつた。彼等は悉く丁寧に迎へられて船室に案内された。やがて彼等は來艦の目的を述べたが話の次手に、此の前來航の時應對に骨を折つた榮左衛門の様子を尋ると、一時病氣であつたが最早快くなつたから、多分近い内に提督にお目に掛るであらうと答へた。夫から